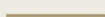




うつせみのあなたに
2023年4月

星野廉



目次

◆各記事の要約・抜粋	
*	3
04/01 目くばせしあう音（連想でつなぐ）	
*	21
04/02 人に動物を感じるとき（連想でつなぐ）	
*	35
04/03 げん・現（うつせみのたわごと-7-）	
*	51
04/04 3人のゲンちゃん	
*	61
04/05 よむ、読む、訓む	
*	67
04/06 連想でつなぐ夜と闇と夢	
*	77
04/07 連想でつなぐ、たそがれ、twilight	
*	89
04/08 音を見る、模様を聞く	
*	101
04/09 連想でつなぐ、うたう	
*	117
04/10 連想でつなぐ、まつ	
*	135
04/11 げん・限（うつせみのたわごと-8-）	
*	149
04/12 身をかかわして相手を制する	

*	159
04/13 げん・原（うつせみのたわごと-9-）	
*	173
04/14 「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する	
*	181
04/15 鏡、境、界	
*	193
04/16 わたし（ぼく）が二人いる	
*	207
04/17 げん・Gen（うつせみのたわごと-10-）	
*	223
04/18 鏡「面」画「面」顔「面」	
*	237
04/19 げん・眼（うつせみのたわごと-11-）	
*	249
04/20 薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか	
*	263
04/21 心が壊れないために何かに何かを見てしまう	
*	273
04/22 Moves Like Jagger（連想でつなぐ）	
*	285
04/23 自分に自分を似せていく（連想でつなぐ、引用の織物）	
*	297
04/24 げん・弦（うつせみのたわごと-12-）	
*	311
04/25 「誤配」を避ける	
*	323
04/26 げん・減（うつせみのたわごと-13-）	
*	331
04/27 つかった水を大河にかえす	
*	347

04/28	連想でつなぐ、壊れる	
*	353
04/29	言葉は声と顔が命、意味は二の次	
*	369
04/30	げん・絃（うつせみのたわごと-14-）（全14回）	
*	385

◆各記事の要約・抜粋

＊

＊目くばせしあう音（連想でつなぐ）

話し言葉は音と意味からなりますが、人にとっては意味よりも音が先だと最近よく思います。音は意味を呼びますが、意味は音を呼んでくれないからです。やはり意味は後付けだという気がします。

音が意味やイメージを喚起する力は強いです。言葉を持ってしまった人間にとって、意味が後付けされた音が記憶と重なって付きまとうのかもしれない。

人は目をつむって寝ます。目を閉じて亡くなります。寝際や死に際にあるのは音の記憶と記憶の音が呼び覚ます風景ではないでしょうか。際にあっては、音の記憶も記憶の音も、もはや意味ではないのだらうと想像しています。たぶん風景だけがあるのです。

＊人に動物を感じる時（連想でつなぐ）

視覚、聴覚、嗅覚、触覚・触感、味覚・食感のうち、視覚、聴覚、嗅覚では対象との間に距離が必要です。触覚・触感と味覚・食感では、相手と接触していなければなりません。「する」側にも「される」側にも、「する」と「される」が同時に起きています。つまり、双方向的なのです。

一方的に、相手に知られずに、見る、聞く、嗅ぐ場合は多々あります。「触れる・撫でる」と「味わう・食感を楽しむ」最中となると、もし相手に意識や意思があれば、されている相手は「されている」と感じているでしょう。

「撫でる・撫でられる」は想像しやすいですが、「食べる・食べられる」を想像するには心の痛みを感じます。相手が人以外の動物や生き物の場合だと、「食べる」側の人には心の痛みはあるのでしょうか。

ただ相手の「痛み」(苦痛)だけがある気がします。こればかりは、自分がされてみないと分からないでしょう。思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる、しかなさそうです。

*げん・現 (うつせみのたわごと -7-)

今回のテーマは、「現実・げん・現」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「現界」です。目覚めている状態、つまり意識が働いている状態と、夢を見ていたり、空想をしていたり、無意識でいる状態とを対比するのではなく、連続した帯=濃淡=階調として論じようとしています。これまで扱った幻界、言界、現界が重なるものであるとも訴えています。

* 3人のゲンちゃん

決定的に、同じなのは、

*唯言論=唯幻論=唯現論が、どれも「ゆいげんろん」と読める。= 3人とも、「ゲンちゃん」だ

という点です。

というのは、もちろん冗談でして、そうではなくて、

*唯言論=唯幻論=唯現論が、どれも「唯〇論」である。

= 3者とも、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」と言っている。

=できもしないことを言っている。

＝夢を語っている。

＝希望を述べている

という点が同じです。

***よむ、読む、訓む**

たとえば、「よむ」に「読」や「詠」という字を当てる、「読」や「詠」に「よむ」を当てる。こうして、この島々にもともとあった音で、よそから来た字を読み下した。すらすら読めるようにした。そればかりか、よその字を変えて字をつくりもした。そうやって、放せば消えてしまう音を残すやり方を編み出した。そうやって大きな竜（たつ）に飲まれることなく、くださったと言えるかもしれない。

***連想でつなぐ夜と闇と夢**

読む、詠む、黄泉、病み、闇、山——。辞書を頼りに「よむ」という音を漢字で分けると、「よみ」と「やみ」と「やま」が浮かんで、つながってきます。連想です。個人的な印象とイメージでつながっています。夢路（イメージ）をたどるのです（夢は「イメ（寝目）の転」という夢のような記述が広辞苑に見えます）。

よみ、やみ、やま、ゆめ——。連想するのは、死者たちの集まる場所です。そこでは姿が見えるというよりも声がします。私にとって死者たちの声が集まる空間と時間を濃密に感じさせる作家の一人が古井由吉です。そこでは、夜、読み、詠み、黄泉、夢、闇、山が境をなくし、書くと欠く、欠けると書けるが重なりあいます。

***連想でつなぐ、たそがれ、twilight**

たそがれ月

かわたれ星

かたわれ月

かたわれ星

辞書で見つけたフレーズを並べたものですが、字の韻も音の韻もイメージの韻も踏んでいるように感じます。見た目も綺麗です。

音の韻、字の韻、意味の韻、イメージの韻があると私は思っています。「韻する」の基本は「似ている」です。韻、陰、隠、因——韻は陰に隠れている「何か」に因り掛かって踏むものなのでしょう。どんな物でも事でも現象でも、多面的で多層的ですから、どこかでつなぐことができます。それに賭けるのです。

*音を見る、模様を聞く

音を見る、模様を聞く——これは奇をてらったレトリックではありません。じっさいに現実で起きているのです。私たちはそうした現象に囲まれて生きています。とりわけ、広義のテクノロジーと工学が進歩して日常に入りこみ溶けこんでいる、いまはそうです。溶けこんでいるので気づかないのです。

文字を聞く、楽曲を見る、映像を嗅ぐ・触る・舌で味わう、手ざわりで見る・聞く・嗅ぐ・味わう——ほら、こういうことってあるじゃないですか。本やテレビや映画やパソコンやスマホと付き合っている私たちは、これらのことを日常的に体験しているのです。PCもスマホも手指で撫でて操作するものです。

置き換えとそれによる連動のことです。「Aの代わりにAとは別のもので済ませる」と言えば分かりやすいかもしれませんが。仮想現実に行かなくても、すでに私たちは置き換えを体感して生きています。私たちにとっての「リアル」は置き換えられたものなのです。

*連想でつなぐ、うたう

「うたう」がどうして気持ちよいのかを考えてみました。いろいろな思いが浮かびましたが、結論から言いますと、「いま、ここにある・いる」が続いている喜びと期待を全身で感じる・味わうという感じです。

旋律はいまという瞬間を引き延ばし、どこかへ連れて行ってくれる乗物です。「どこか」は「かなた」つまり遠くて抽象的な場所ではない点大切です。「どこか」は、あくまでも「いまいるここ」であり、「いまいるここ」が「いまいるここ」のままに、びろーんとのびることだと思います。

*連想でつなぐ、まつ

会った瞬間よりも、会うまでの待っているあいだのほうが幸せだと言われます。わくわくどきどきじりじりしながら待つ。これは、サスペンス = suspense にも通じる気がします。「宙ぶらりん = どうなるんだろう = この結果を知りたいなあ = この先を見たいなあ」です。

世界中の多くの人たちが、サスペンス小説や推理小説や謎解き、およびその種の映画・テレビドラマを好んでいるというのは興味深い現象です。人は宙ぶらりにされたいのではないのでしょうか。気持ちがいいから。ただし、待たされるより、待つほうが気持ちがいい。快をもたらす「待つ」には主導権が必要なのです。これがフィクションです。

*げん・限（うつせみのたわごと -8-）

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

今回のテーマは、「かぎり・へり・げん・限」という言葉とイメージで世界をとらえる「限界」です。冗談ではなく、文字どおり限界は限界にあります。ヒトをはじめ、あらゆる生き物は、それぞれに備わった枠の中で生きています。その枠組みを意識できるのは、

おそらくヒトだけでしょう。

でも、ヒトを縛る杵は多種多様であり、それらの杵を意識することは難しいはずですが。杵はヒトを縛るが、杵をずらすことで、その縛りから一時的にでも逃れることが可能なのではないのでしょうか。

*身をかわして相手を制する

漢文の読み下しにおいては、自分が動く、つまり自分の目を上下に動かす（同時に頭の中と体でなぞる）ことで、自分の外にある動かないものを動かす（もちろんそう思い込むのですが）ことに成功したのです。自分の外にいる異物を手なづけ飼いならしたとも言えるでしょう。こう考えるとすごい話です。

「自分が動くことで、外にある動かないものを動かす」とは、漢文だけでなく、人の知覚と認知のあり方のことではないかなんて大風呂敷を広げたくくなります。でも、そうではないのでしょうか。

動か「ない」ものを目で追って、それが動いて「いる」と感じる、言い換えると「ない」を「いる・ある」にするのは、赤ちゃんがふつうにやっていることではないのでしょうか。さらに言うと、赤ちゃんに限らず、私たちが日常的にやっていることだと私は思います。

*げん・原（うつせみのたわごと -9-）

今回のテーマは、「もと・はら・げん・原」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「原界」です。ヒトは何ごとについても、その始原を求めようとする傾向があります。それは「戻る」「帰る」という運動へとヒトを誘うようです。

源に帰ろうとするという動きの前提には、枝分かれしている形態の存在と、「出た」という過去の出来事が想定されています。個人的には、苦手な物語です。どうしても馴染めません。信じていないせいか笑ってしまうのです。この種の話とは相性が悪いので

しょう。

*「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する

意識の中で二人になっている——とは夢と同じです。夢の中で、人は「自分の出ている夢」をもう一人の自分の視点から見ている気がします。夢と、夢うつつと、うつつ（現実）の思いは、緩やかにつながっている。たぶんグラデーション状に連続している。そんなふうには感じられません。とはいうものの、あくまでも以上はどれも「思い」の中での話であり、現実には人は「一人である」という枠の中にいるわけです。

思いの中では自由に出ているながら、現実の中では決して出ることのできない枠であるからこそ、私は「一人である」という枠にこだわっているとも言えそうです。オブセッションなのです。だから、「2・2・II」が気になるのでしょう。

「数・かず・すう」の「2・2・II」と、その影とも言える、文字や記号である数字の「2・2・II」は私の中では異なります。前者（数・かず）は見えない抽象で観念であり、後者（数字）は見える具象であり具体的なものとして立ちあらわれています。後者は象形文字に似ています。

*鏡、境、界

和語ではなく漢字、つまり大昔の中国語の文字としての「鏡」が「境」と関連しているらしいという話は、想像力をかき立ててくれます。鏡は境。鏡は「さかい」。さらに界も付けくわえましょう。鏡、境、界。

「きょう」という音読みではなく（かつての中国語の音ではなく）、境（さかい）につられて、鏡を勝手に訓読みして「さかい」と読んだときのイメージは魅力的です。さかい、きわ、あいだ、はざま、わけめ、わかれめ、しきり。

さかい、ふち、はし、へり。辺境や周縁とも重なってきます。縁（ふち）は縁（えん）、

さらには縁（よすが）。ど真ん中ではなく、ふちにいることで、他者やよそ者と出会ったり交わりが生まれるかもしれません。わくわくするイメージです。

鏡に近づくときのどきどき、鏡の前にいるときのわくわく、鏡を覗きこんだときのぞくぞく。これは「かがみ」という「さかい」で他者との出会いが起きるからではないでしょうか。でも、その他者は自分でもあるのです。

*わたし（ぼく）が二人いる

主観と客観、主体と客体、個人と社会、自分と世間、自と他、部分と全体、無意識と意識——。いま挙げたペアの、前者が「わたし（ぼく）・自分」で、後者が「二人いる自分の片割れ・他者」だと言えば、分かりやすいかもしれません。後者が「二人いる自分の片割れ」であることがきわめて大切です。

「他者」と名づけ名指しているものの、自分なのです。人は他者にはなれません。なりきったり、演じたりすることはできます。ベースはあくまでも自分です。外にいる（ある）他者は、自分の中に映す・写すしかなく、移すことはできません。

主観と客観、主体と客体、個人と社会、自分と世間、自と他、部分と全体、無意識と意識——という対立は、偽装＝擬装された対立であり、「わたし（ぼく）が二人いる」の変奏＝変装だと言えば分かりやすいかもしれません。念を押しますが、あくまでも意識や心においての話です。

*げん・Gen（うつせみのたわごと -10-）

今回のテーマは、「ふえる・げん・Gen（※ドイツ語で「遺伝子」）」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「Gen界」です。

小さな命の単位が転写という仕組みでどんどん増えていく。転写しそこなう場合もある。死滅する単位もある。単位の集合体である生体は、単位を生殖や増殖という仕組み

で、新たな生体を生み出していく。そうやって、写す、移る、増える、伝わる、渡す、という一連の動きが生起する。

ヒトは、その生起を出来事としてではなく、物語としてとらえるしかない。その物語を生成するために必要なのは、分けるという作業だ。分けるのは、ヒトが小さいからにほかならない。自分より小さく分けて分かったとする。

Gen 界における、もうひとつの運動は、「交わす」。「ものを交わす」から、「価値を交わす」へとヒトは「交わす」を変化させた。価値という分けられず分からないものに、ヒトはもてあそばれ、振り回されている。それが経済である。

*鏡「面」画「面」顔「面」

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。網膜、鏡面——。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが。それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのには、こしらえているからではないでしょうか。

ありもしないもの、あってほしいもの、あると想像しているもの、あるにちがいないもの、あるはずのもの、なければ困るもの、そうしたものをこしらえている気がします。でっちあげるとか作るとか捏造するという言い方もできるでしょうが、とりあえず「こしらえる」にしておきます。

*げん・眼（うつせみのたわごと -11-）

今回のテーマは、「め・げん・眼」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる眼界です。「見る」を「知覚する」という広い意味で取り、「見える＝見る＝見分ける＝分かる＝意識する＝認識する」へとつながっていくさまを語っています。

「まだら・まばら」という言葉で、ヒトが「見間違う」「無視する」「見て見ぬ振りをする」

こと、つまり知覚と認識の限界性とそのいかわしきについても触れています。「見る・見える」には「見ない・見えない」も含めていいと思います。前者にくらべて後者は——前者と同じくらい頻繁に起きているにもかかわらず——不当に軽視されているからです。

***薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか**

言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、ネット・網、声、文字といったものたちを、ぺらぺらという言葉に掛ける形で遊んでみました。ぜんぶ薄いのに厚いのです。だからこそ、人は薄いものを利用して薄いものに見入っているし耳を傾けています。

猫という言葉と猫という生き物はぜんぜん似ていませんが、言葉を使っている分には、似ていないという感覚はないと思います。「似ている」って不思議です。人は「似ている」を基本とする印象の世界に生きている気がしてなりません。

猫を見ていると、この「似ている」世界とはまったく無縁の世界に住んでいるように見えます。世界がぺらぺらに満ち満ちている。薄い厚いでもある。そんなギャグは猫には通じそうもありません。薄いものに熱中する人に対して、猫はひたすら邪魔をするだけ。私はそんな猫がうらやましくてたまりません。

たぶん、猫という言葉と猫という生き物は似ているのです。いや、きっと同じなのです。人にとっては。だから、「言葉と事物とは違うんだよ」なんて当り前のことを書いて、わざわざ念を押したフランス人がいたのでしょう。猫はぺらぺらの言葉と立体で奥行きのある事物を混同してはいないもようです。

***心が壊れないために何かに何かを見てしまう**

何かに何かを見る、見てしまう——。見慣れない何かに、自分の知っている（馴染みの）何かを見る。見たいもの（自分に都合のいいもの）を見る。見てしまう。どうして、見てしまうのでしょうか。心が壊れないためにそうしているように私には思えてなりません。

見知らぬ「何か」、初めて見る「何か」ほど不気味であったり、恐ろしいものはありません。名前がないからです。そこにドラマや物語がないからです。たとえ、その名が「怪物」や「モンスター」であっても、名前がない「何か」よりはずっと不気味ではないし、怖くもありません。

面（具象・そのもの）に立体（抽象・その向こうにあるもの）を見るときも言えます。人がのっぺらぼうな面——意味が不在である面（無意味な面ではなく）——に、顔や模様や奥行きや深さや遠近や背後を見てしまうのは、たぶん心が壊れないためなのです。

* Moves Like Jagger（連想でつなぐ）

アーティスト——歌手や演奏家だけでなく小説家や作詞家や作曲家や美術作品の作家をふくむ広い意味での芸術家——が自分のスタイルを作りあげていく過程で、「他人を模倣する」（立場を変えれば「自分が模倣される」）だけでなく、「自分を模倣する」もあるのではないのでしょうか。

先行する他人のパフォーマンス（演技や演奏）や作品を模倣するだけでなく、過去の自分自身のパフォーマンスや作品を模倣するという意味です。自分自身の模倣の場合には更新とも言えるでしょう。絶え間ない自己更新をしていかなければならない（他人ではなく自分が相手＝ライバルなのです）のが、広義のアーティストの宿命かもしれません。

ミック・ジャガーがその moves =動き=振りを自分で作り出していったのか、先行する誰かの振りを真似たのか知りませんが、彼のパフォーマンスを映した数々の動画を見ていると、変容を重ねている動きが一つの身体から自然に出てきている、つねに試行錯誤＝自己更新を重ねているようにも感じられます。

*自分に自分を似せていく（連想でつなぐ、引用の織物）

他人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸

能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。

これはプロ・アマを問わず見られます。悪い言い方をすればワンパターンでありマネリズムです。創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。自分を真似る。自分に似せる。自分の似姿に自分を似せる。そうやって自分のスタイルや文体や作風ができていきます。

*げん・弦（うつせみのたわごと -12-）

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

今回のテーマは、「つる・つるされてゆらぐ・げん・弦」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる弦界です。ヒトが天から垂れた「つる・弦」または糸につかまって吊るされて、ぶらぶらゆらゆらしている。すべてを何ものかに任せている。弦界とは、そんなイメージです。

この記事では、「任せる・負ける」という身ぶりが大きな役割を演じています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の存在が前提になっているにもかかわらず、ヒトはそれを知り得ないという立場で話を進めています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の威を借りる人たちを批判してもいます。

*「誤配」を避ける

学生時代の話ですが、純文学をやるんだと意気込んでいる同じ学科の人から、純文学の定義を聞かされたことがありました。

・描写に徹する。

・観念的な語を使わない。たとえば、神、愛、心、魂、真理、真実、心理、(哲学的な意味での) 存在。

・固有名詞、とくに著名人や名所の名前はできるだけ避ける。

・決まり文句と定型を退ける。

・比喩を使わない。

たしかこんな観念的なことを熱っぽく語っていました。

*げん・減 (うつせみのたわごと -13-)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

今回のテーマは、「減る・足りない・げん・減」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる減界です。言葉の遊びを多用しながら、「減る・足りない・欠ける」と「増える・足りる」とが言葉では矛盾しても、言葉の枠外では矛盾しないことを、言葉たちに演じてもらっています。

原理は単純です。ヒトは分ける。分けたものに名前を付ける＝分かったことにする。名前が増える、つまり、名前が足りなくなる(ヒトの処理能力を超える)。

要するに「事＝言足りる」が「事＝言足りない」となる。そうなると、訳＝分けが分からなくなってくる。「分けた＝分かった＝知が増えた」とならず、「分けた＝分かっている＝知が欠けている」ことの確認にしかならないという「わけ」です。

*つかった水を大河にかえず

ジャンルにはなんらかの形で、人的なつながりと枠と伝統が付きものです。私はそう

したものが苦手です。自分の書いたものがなんらかの枠や集団や伝統につらなっていると考えるのがつらい気持ちがあります。窮屈なのです。書き方や内容に干渉されたくないという思いは強いほうだと思います。

言葉をつかう以上、これまで言葉をつかってきた人たちとつながるのは当然です。そうしたつながりを否定するほどには分からず屋ではないつもりです。言葉は私が生まれたときに自分のまわりにすでにあったものであり、それを真似て学ぶことで習得してきたからです。

言葉は借り物なのです。誰にとってもそうでしょう。借りたらお返しする。それでいいのではないのでしょうか。でも、きれいにして返す必要はないと思います。よごれているのは、それが私の生きた証であり、私のつかった印でもあるからです。

***連想でつなぐ、壊れる**

崩壊——。崩れて壊れるのですが、漢字で見るとずっと迫力があります。漢字は厳めしいのです。いかめしいのではなく厳めしい。厳格、厳然、威厳。漢字は偉そうにも見えます。もったいぶっているのです。ゲンカク・genkaku、ゲンゼン・genzen、イゲン・igen。音読しても、厳めしいし怖くもあります。

「ないもの」を「ある」ように見せるのが漢字です。字面が厳めしい。強面なのです。私は「無」に「ある」を感じます。「無」には、「ない」にないものが有ります。「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっている気がすると言えば、分かっていただけでしょうか？

***言葉は声と顔が命、意味は二の次**

人はまず○△Xという言葉をつくり、次に「○△Xとは何か？」とえんえんと思い悩む生き物である。

言葉をなりたたせている音は聞こえ、文字は見えます。意味はどうでしょう。意味は見えません。というか、意味を見たことがありますか。意味は聞こえないし見えないから、刺身のつま状態にされているのです。人は見えないものや聞こえないものを冷遇します。苦手だからです。業を煮やしているのです。

人は意味を冷遇する一方で礼遇もします。見えないし聞こえないけど、言葉は意味なしで成立しないし、だいいち使えないからに他なりません。しぶしぶ「お意味さま」を礼遇し、「お意味さま」の確認をするわけですが、その作業の集大成が、辞書や法典や経典や聖典や法則や公式だったりします。

とはいえ、これらは全部が文字です。目に見えます。音読すれば聞こえます。要するに、意味は見えないし聞こえないという現実が変わっていないのです。

見えない、聞こえない、手で触れることができないもの——意味のことです——を固定することができますか？ 文字という形で記して固定（複製・拡散・保存）したところで、それは意味を固定したことにはなりません。言葉に言葉を重ねただけ、文字に文字を重ねただけです。意味が見えないことへの根本的な解決策ではありません。

もしそうであるのなら、みんなで考えてみませんか。難しい問題だからと、機械に委託するのではなく。

*げん・絃（うつせみのたわごと -14-）（全14回）

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという連載の最終回です。今回は「糸・伝わる・伝える・げん・絃」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる絃界です。

「伝わる・伝える」という動き、「伝わる・伝える」を仲介する媒体、「伝わる・伝える」の対象をめぐる、さまざまな言葉たちを次々と「ずらす」ことにより、その言葉たちの表情・身ぶり・目くばせを読者に体感してもらおうとしています。

糸とその縦横の運動から成る織物と、紙と記された言葉たちの縦横の運動から成るテキスト＝テキストのつながりにも触れています。「伝わる・伝える」の究極的な対象となる「揺れ・揺らぎ」について考察していますが、尻切れトンボに終わっています。再度、考えてみたいテーマです。不可解なテーマです。

04/01 目くばせしあう音（連想でつなぐ）

＊

目くばせしあう音（連想でつなぐ）

星野廉

2023年4月1日 08:08

目次

似ているからつなげる

またたく

印象の世界の住人

「同じ」と「異なる」は知識、「分ける」はローカルな決まり

またたき目くばせしあう音たち

反復、連続、変奏の心地よさ

語呂のよさ

「い・イ・i」

音の記憶、記憶の音

似ているからつなげる

「似ている」に「に・二」を見てしまうのは私だけでしょうか。

（拙文「連想でつなぐ「2・二・II」より）

two、twelve、twenty、twice に共通する tw- のイメージは、「twig（小枝、二股の枝）」から来た「枝が分れる」らしいのです。

twist（ツイスト）や twin（ツイン）も、語源的につながっているようです。twist は「ねじれる、ねじる、よじる、よじれる」ですから、「もつれる」とつながってきます。

こんなふうに連想でつなげていますが、基本は「似ている」です。

なにしろ「似ている」は印象ですから、人は勝手に「似ている」と感じて、勝手に「似ている」もの同士をくっつけます。

その結果が言葉にあらわれていると考えると、言葉がもつれたりよじれたりこじれるのは当然ではないかと思えてきます。

*

「似ている」を相手にしているかぎり、人は「あっ」「あれっ」「まあ」「おお」という感じで、つぎつぎと「似ている」と出会うのはもはや宿命と言っていい気がします。

「似ている」の連続ですから、「あ、まただ」の連続ですね。「また」や「二」や「分れる」が出てくるのは避けられないようです。つまり、それぞれがつながっているみたいです。

にている、に、ふたつ、ふたたび、たびたび、ふたまた、またまた、また、またたく。

two、twig、twin、twice、(too)、twist、twinkle

またたく

Twinkle, twinkle, little star

きらきらお星さま

きらきらとまたたくお星さま

「またたく」は「目叩く（またた）く」だなんて、広辞苑にはとても分かりやすい駄洒落のような語源の説明が載っています。

「またたく、まばたく、瞬く」ということですね。

これくらいの「こじれ」や「もつれ」だと、ほどよい「こじれ」であり、いい具合の「もつれ」だという気がします。

「まばたく」は、wink（ウィンク）ですが、twinkle と似ています。

またたき、まばたき・瞬き、めくばせ・目配せ、めませ・目交ぜ。

ほどよい「似ている」とほどよい「こじれ」が快い、心地よいです。

印象の世界の住人

持論なのですが、人は「似ている」を基本とする印象の世界の住人ではないでしょうか。

「同じ」か「異なる」かは人にとって不明である、つまり確認できないのです。

「同じ」と「異なる」は印象や感想ではなく断定であり断言です。AとBが「同じ」であるか「異なる」かは、器具や器械や機械をつかわないと確認も検証もできないのです。

一方の「似ている」は、各人が勝手にそう感じてそう言っているだけです。だから、「似ている」と言う人もいれば、「似ていない」と言う人もいます。

「同じ」と「異なる」は知識、「分ける」はローカルな決まり

「同じ」と「異なる」は他人から教えてもらった知識や情報であるとも言えます。器具や器械や機械をつかって調べたり、みんなで「同じ」であるとか「異なる」と決めた、つまり「決まり」だという意味です。

ポメラニアンとセントバーナードが同じ犬という種類の動物だなんて、赤ちゃんには分からないでしょう。犬というものを知らない人にも分からないにちがいません。ヒラメとカレイの違いも、たぶん人が決めたのでしょう。

そのように決めたのです。分類とは、人が決めたものに他なりません。

DNAですか？ それは人が機械をつかって決めたのでしょうか。「異なる」も「同じ」も人が器具をつかったり、みんなで決めたりした結果という意味の知識であり情報なのです。

虹が七色だという決まりのところもあれば、六色、五色、四色という言語や地域があるようです。出世魚なんて日本だけの分類ではないでしょうか。四季なんて言いますが、そもそも季節の区分が世界ではまちまちなのです。

「分ける」「分類する」はローカルな——つまり普遍や客観とはほど遠い——決まりであり、伝承されてきた知識であり情報だと言えるでしょう。

たしかミシェル・フーコーの『言葉と物』の冒頭で、ボルヘスの著作を引き合いに出し、「分類」に対して疑問の目が向けられていた記憶があります。

ミシェル・フーコー、渡辺一民／訳、佐々木明／訳『言葉と物〈新装版〉—人文科学の考古学—』| 新潮社

ベラスケスの名画「侍女たち」は、古典主義時代における人間の不在を表現している。実は「人間」という存在は近代に登場したもので

www.shinchosha.co.jp

またたき目くばせしあう音たち

堅くて、ややこしい話になったので、楽しい話に変えます。

Twinkle, twinkle, little star,
How I wonder what you are!
Up above the world so high,
Like a diamond in the sky.

よく口ずさむことがあります。語呂がいいですね。韻を踏んでいるからでしょうか。

英語なのですが、口にしているときには、何語かなんて考えません。ただ音が快いだけ。

韻をはじめ、同じ音や似ている音の反復では、音たちがまたたき、目くばせしあっているのです。

high、diamond、sky ——音とイメージにさそわれて、晴夜の清夜にきらきら輝くお星さまが目浮かぶようです。その空から音が降ってくる気がしませんか。

*

Ah ! Vous dirais-je Maman
Ce qui cause mon tourment?
Papa veut que je raisonne
Comme une grande personne
Moi je dis que les bonbons
Valent mieux que la raison.

フランス語バージョン（こちらが先なのでしょうか）でも韻が見られます。

https://www.youtube.com/watch?v=n3_0_tdabNQ

大学生時代に私は、福永武彦先生にフランス語の詩の読み方を手ほどきしていただいたのですが、福永先生が詩の音節を数えたり、韻を確認するために単語を発音なさるときが好きでした。

ふだんは近づきたい雰囲気福永先生が、ふと和んだ表情をお見せになったのは、きっと類似する言葉の音と戯れていらっしゃったからではないか。そんなふうにいまになって考えています。

元歌らしいフランス語の曲です。

https://www.youtube.com/watch?v=B_YVFZ7TOWk

この歌に興味のある方は、ウィキペディアの解説をご覧ください。とても詳しいです。いろいろなバージョン（替え歌）があるということは、それだけ愛されてきた曲なのですね。

きらきら星 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

反復、連続、変奏の心地よさ

バージョン・版、変奏・編曲・アレンジ、替え歌、翻訳、翻案——どれもが「似ている」わけです。「似ている」でつながっているとと言えます。

こうしたことを考えていると、「似ている」大好き人間の私はわくわくするどころか、気が遠くなりそうです。

気持ちいいから楽しいから人は「似ている」に惹かれ、さらには「似ている」を自分でつないだり紡いでいくのではないのでしょうか。

*

同じ音や似ている音がほどよく出てくると、聞いていても、唱えても、目にしても、読んでも気持ちよく感じる場合があります。

似ているものや同じものには人の気持ちをなごやかにする働きがあるようです。

反復や連続や変奏の心地よさは、視覚的なものでも見られますね。模様やパターンなどの広義のデザインがそうでしょう。

語呂のよさ

日本語で簡単な例を見てみましょう。

セブン (2)

イレブン (3)

いきぶん (4)

口調がいいですね。ブン、ブン、ぶん。脚韻でしょうか。耳にずっと入りずっと馴染む。しかも母音の数が2、3、4と畳みかけるように増えて気分（きぶん）を盛り上げていきます。

魔法のように、お客様がどんどんお店に入るわけです。イツ・マジック。

*

スカット sukatto
さわやか sawayaka
コカコーラ kokakora

耳に快いですね。sという子音をつかった頭韻でしょうか。心を開く母音のaの連続が、じつに爽やか（sawayaka）です。

三つのkの連続もいい感じに喉に掛かって（kakattte）きます。飲み物ですから喉に訴えなければならぬわけですが、こういうのも一種の掛け詞ではないかと私は思います。

体の内部から出てくる感のある母音とくらべると、そもそも子音は歯や唇や舌や喉という体の出口に近い——外に近い——部分で、母音につかかってくるわけです。

外に近いというのは異物を感じさせるという意味です。咳やくしゃみや鼻水や吐き気や嘔吐を思いだしてください。生理現象や発作は異物を体外に出そうとする行為なのです。

子音は擦ったり（s・z）、絞めたり（m・n）、引っ掛かったり（k・g）、かすれたり（h）、叩いたり（t・d）、なでたり（r・l）、ぶつかったり（b）、はじけたり（p）します。なお、私にはwとyは母音、つまりuとiに近い感じがします。

この例では、「擦る・suru」と「掛かる・kamaru」の適度の異物感が人に「渴き・kawaki」を想起させ、「喉を潤したい」とか「飲みたい」というアクションへと誘うのではないのでしょうか。

まさに「爽やか (sawayaka)」です。

さわやか
あざやか
あざとい

魔法のように清涼飲料水が売れるわけです。イツツ・ア・ミラクル。

*

以上の例は両方とも、もともとが外資系の会社のCMソングですね。さもありなん。コピーライティングに携わっている方々はきわめて繊細な言語感覚をそなえた詩人なのです。

欧米の定型詩の韻はもっと複雑でややこしいみたいですけど、歌詞やキャッチフレーズやコピーなどでの韻は簡単に考えていいと思います。要するに、似た発音（母音も子音もです）の言葉がいい具合に散らばっているのです。

この「いい具合に」がポイントです。いい具合に散らばっていると快く耳に響くわけです。同じ形をした音を星のようにちりばめるとも言えそうです。

*

ガラスと言えば、透明。
カラスと言えば、黒。
マリア・カラスと言えば、男性で苦勞。
カラスは英語で crow。

自作の戯言なのですが、韻の練習をしてみました。頭韻と脚韻です。

*

うさぎおいしかのやま (yama)
こぶなつりしかのかわ (kawa)

この歌の出だしにも同音というか韻を感じますね。口にするとうっとりします。

山川草木、日本の原風景が重なります。あと花（hana）も。

＊

花は花が花。

桜（はな）は花（はな）が華（はな）。

誰が決めたのでしょうか。

これも先ほど述べた「決まり」「分ける」「分類」です。

「分ける」は選別と排除でもあります。分けて何かを選べば、何かが除かれるのは、人にとっての必然であり自然なようです。

＊

なにしろ、人は線引きが好きなのです。

話をもどします。北アメリカやアフリカの国境には不自然に長く伸びる直線が目立つという話でしたね。

切り分けたのでしょうか。切るためには直線が必要です。刃物は直線部分があります。ぴんと張った細い紐でも切れますね。手術でも、ある部分に糸を巻いて両方から引っぱって切断していたような気がします。

縄張りを思い出します。縄を張って直線をつくり、こっちはわたしのものとか「うち」、あっちはおまえのものとか「よそ」と決めるイメージです。張る、切る、分ける。張り切って分けていたのでしょうかね。

（拙文「【小説】あいまいでやさしい境」より）

線を引いて分ける。「分ける」は「切る・伐る・剪る・截る・斬る」です。kill でもあります。

人がどんなに線引きと「切る」と kill が好きなのかは、世界地図と世界史年表を見ると一目瞭然です。

あと、毎日のニュースも。

「い・イ・i」

山川草木、花は花が花、与作は木をきると言えば、日本の原風景。

日本の原風景と言えば、山口百恵さんの歌った「いい日旅立ち」（作詞・作曲・谷村新司・1978年リリース）です。

日本、母、少年、父、子供、雪、夕焼け、岬、魚、すすき——これだけ盛りだくさんののに、歌は静かです。眉や顔をしかめることもなく、淡々とうたっているからではないでしょうか。

いい日旅立ち——綺麗な響きのフレーズですね。

iihi-tabidachi——「い・i」の連続がとても、きれいでこちよい。しかも「い・i」を要所でサポートする母音は、心を開く音の「あ・a」が二つあるだけです。

この曲の歌詞を読むと、「い・i」や「い段」の音が目立ちます。特に「い」と「に」が驚くほど多い。これも、この曲を落ち着いた印象にしている理由の一つではないでしょうか。

ま、こういうのは、そう思うとそう見えたりそう聞こえたりするものですけど。

個人的な感想ですが、「い・i」や「い段」の音は軽いのです。軽くて薄いではなく、軽くて快い、つまり軽快なのです。母音の中ではいちばん軽い気がします。

その「い」を山口百恵さんがきれいにうたっていたように思えてならないのです。

音の記憶、記憶の音

音の美しさは何にも勝ります。音が模様や風景を呼ぶことがありますね。

話し言葉は音と意味からなりますが、人にとっては意味よりも音が先だと最近よく思います。音は意味を呼びますが、意味は音を呼んでくれないからです。意味は後付けだ

という気がします。

話し言葉では意味やイメージ、つまり思いが音を主導すると考えられがちですが、逆に音が意味やイメージを先導するのではないのでしょうか。

音が意味やイメージを喚起する力は強いです。言葉を持ってしまった人間にとって、意味が後付けされた音が記憶と重なって付きまとうのかもしれませんが。

人は目をつむって寝ます。目を閉じて亡くなります。

寝際や死に際にあるのは音の記憶と記憶の音が呼び覚ます風景ではないのでしょうか。際にあっては、音の記憶も記憶の音も、もはや意味ではないのだらうと想像しています。

たぶん風景だけがあるのです。

そんなとき、目蓋の裏では音がまたたいている気がします。人を離れて自立した音たちが目くばせしあっているのかもしれませんが。

人はその光景を眺めているだけ。夢と同じです。夢と同じで参加できないのです。

#連想 # 意味 # 詩 # 英語 # フランス語 # 福永武彦 # 韻 # 母音 # 子音 # 歌 # 広告
コピー # 洋楽 # 邦楽 # 発音 # 歌詞 # 山口百恵 # 谷村新司 # ミシェル・フーコー
分類

04/02 人に動物を感じる時（連想でつなぐ）

＊

人に動物を感じる時（連想でつなぐ）

星野廉

2023年4月2日 08:40

（※この記事は連想でつなげた長い記事なので、見出しごとに独立してお読みいただくこともできます。）

目次

動物、生物、宇宙人

知覚、五感、距離

痛みを推しはかる

身びいき、擬人

作意、作為

意識的な擬人、無意識の擬人、深層的な擬人

鏡の中の話だと意識する、意識しない

ひと休み

恥ずかしさ

プライベートな行為、プライベートな仕草

においを嗅ぐ、鏡を覗きこむ

テリトリーをおかす

近さ、親しみ

食う、喰う、食べる

動物、生物、宇宙人

動物園に人はいません。いるにはいるけれど、常時檻や柵の中にはいません。それは人が自分たちを動物と見なしてないからでしょう。

生き物や生物やいきものはどうでしょう。人は自分たちを生き物や生物やいきものと考えているのでしょうか。もちろん、これは日本語の語感の問題ですけど。

宇宙人はどうでしょう。地球も宇宙の一部であるはずですよ。

知覚、五感、距離

目を向ける・見入る、耳を傾ける、嗅ぐ、ふれる・なでる、味わう・食感を楽しむ——この中で私がいちばん動物を感じるのは「嗅ぐ」です。人のことです。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚・触感、味覚・食感のうち、視覚、聴覚、嗅覚では対象との間に距離が必要です。

触覚・触感と味覚・食感では、相手と接触していなければなりません。「する」側にも「される」側にも、「する」と「される」が同時に起きています。つまり、双方向的なのです。

痛みを推しはかる

一方的に、相手に知られずに、見る、聞く、嗅ぐ場合は多々あります。

【※あとで触れますが、この辺のことにとても意識的だった作家は川端康成だと思います。とりわけ『雪国』（ソフトでマイルドです）と『眠れる美女』『片腕』（ハードでワイルドです）です。】

「触れる・撫でる」と「味わう・食感を楽しむ」最中となると、もし相手に意識や意思があれば、されている相手は「されている」と感じているでしょう。

「撫でる・撫でられる」は想像しやすいですが、「食べる・食べられる」を想像するには心の痛みを感じます。たとえ、その行為の前に「いただきます」と手を合わせたとしてもです。

あれは相手の魂を鎮めるためではなく、自分の気持ちを鎮めるための儀式だと私は受

けとめています。

相手が自分に「うつってくる（入ってくる）」と感じているからです。だから、二つの手を胸の前で合わせるといふ象徴的な動作をするのです。

亡くなった人を送ったり、亡くなった人と日々挨拶をするのと同じ仕草をしていますが、その意味あい異なります。なにしろ、この場合には相手はこれから自分に「入ってくる」のです。（※諸説あり）

いただきます。合掌。

もっとも相手の身になれば、そんな言葉や動作は慰めにもならないでしょう。相手が人の場合です。

相手が人以外の動物や生き物や宇宙人の場合だと、「食べる」側の人には心の痛みはあるのでしょうか。ただ相手の「痛み」（苦痛）だけがある気がします。

こればかりは、自分がされてみないと分からないでしょう。思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる、しかなさそうです。

身びいき、擬人

思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる——これが得意なのは人かもしれません（人の思いこみである可能性が濃厚ですけど）。ただし、対象は人に限られるようです。

正確に言うと、対象は人というよりも、各人にとっての仲間や肉親でしょう。自分を含めた周りを見ているとそう思えます。どうしても人は身びいきします。

人は自分以外の動物や生き物だけでなく、無生物にまで「思いやる、おもんばかり、忖度する、推しはかる」心に向けることがあります。

人形、キャラクター、物語や小説や映画の登場人物（人物とは限りません）、アイドル（本人や実物ではなく映像や音声として立ちあらわれます）といった生きていないものにも、人は「思いやる、おもんばかる、忖度する、推しはかる」という行為でのぞむ場合が多々あります。

いわゆる擬人、つまり人以外のものを人に擬すわけです。

作意、作為

生き物の生態を撮影や録音したテレビ番組やネット上の動画や写真を見るのが好きです。好きなのですが、手放しで楽しめない自分もいます。

撮影する側の視点や撮影者たちの存在を、つい考えてしまうのです。

これだけ接近した映像はどうやって撮ったのだろう。望遠だろうか、それとも接写か。この場面は長時間どころか長期間にわたってカメラを向けないと撮れないはずだ。どこで宿泊していたのだろう。お金もかかっているにちがいない。

そもそも、どういう意図があってつくられた映像であり企画であり番組なのだろう――。

こういうことを考えたり疑うようになると切りがありません。「疑心暗鬼を生ず」なのでしょうが、オブセッションになります。被害妄想に似て、しつこくてなかなか去りません。

意識的な擬人、無意識の擬人、深層的な擬人

生き物の生態を撮った番組では、ときどきショッキングな映像が流れます。前もって断りのテロップが出ることもあります。

「食べる・食べられる」は、たしかに見ていて気持ちのいいものではありません。

「食べる・食べられる」の場面を見ているとき、私はきまってヒトを連想します。

そうした行為がヒトの行為と重なるのです。雑食性のヒトは驚くほどいろいろな生き物を食べています。飼育や栽培までしています。

おそらく無意識のうちに、ヒトの行為と重ねようとして撮っているのではないのでしょうか。これは私の妄想でしょうけど。

直接、ヒトの行為を撮れないから、代わりにヒト以外の生き物たちのそうした行為を写しているのしか思えないのです。私の妄想でしょうけど。

鏡の前の体験のようです。ヒト以外の生き物の生態という鏡に、ヒトが自分の生態を「撮し・写し・映し・移し」見ているという意味です。

これもまた、生き物に自分たちを見る、つまり擬人なのでしょう。私は、意識的な擬人、無意識の擬人、深層的な擬人があるのではないかと考えています。

鏡の中の話だと意識する、意識しない

人は森羅万象に自分を見ているのではないか、意識的または無意識に擬人をしている、つまり自分自身を映しているのではないかと私は考えています。

たとえば、人形、キャラクター、物語や小説や映画の登場人物（人物とは限りません）、アイドル（映像や音声として立ちあらわれます）といった生きていないものを、人は人に擬します。

いま挙げた例は、どれもが人のつくったものであることに注目したいです。そもそも自分に似せてつくったのですから、一種のやらせなのです。

この場合には、人はある程度自分の擬人行為を意識しています。

ところが、自分のつくったのではないもの、たとえば生き物の生態を撮るとなると、とたんに自分が自分の視線で見ていることを忘れてしまいます。

まるで「ひとごと」のように見ているのですが——自分のことは棚に上げているとか、メタな視座に立ったつもりなのでしょう——、じつはそこに見ているのは自分自身だということに気づかないのです。

*

どういうことかと言いますと、現実や世界をそのまま写し取ることなどは不可能なのです。

言葉による描写であれ、映像をつかったの撮影であれ、必ずそこには枠があり——空間的なフレームと、始まり終りという時間的な枠——、視点があり、色づけがあり、意味付けがあり、人工的な音響効果があり、筋書きがあり、テーマやメッセージがある、つまり写し取ったようで、じつは演出された作りものだという意味です。

描写や写生ではなく作画や創作だとも言えるでしょう。それなのに現実を裸眼で直接見て、それを写していると錯覚しているのです。

自分の見ているのは枠のある鏡の中の像であり、そもそも自分が鏡の中を覗きこんでいること自体を忘れてしまっているとも言えます。

言語——言語の基本は「Aの代わりにAとは別のもの見る」です——を持ってしまったために、不自然と反自然という生き方を選んできた人間は、自然を自然に見る術(すべ)を失ってしまったのです。

ひと休み

この辺でひと休みしましょう。

小説と映画と本を紹介します。共通するテーマは、嗅覚と「におい・匂い・臭い・欲

求・欲望」です。

- ・『香水—ある人殺しの物語』（パトリック・ジュースキント著・池内紀訳・文春文庫）
- ・映画「香水 ある人殺しの物語」
- ・『においの歴史—嗅覚と社会的想像力』（アラン・コルバン著・山田登世子/鹿島茂訳・藤原書店）

私は映画が苦手なので、映画は予告編しか見たことがないのですが、小説と本はぞくぞくしながら読んだ記憶があります。

お勧めします。

＊

文春文庫 香水—ある人殺しの物語

18世紀のパリ。孤児のグルヌイユは生まれながらに図抜けた嗅覚を与えられていた。真の闇夜でさえ匂いで自在に歩める。異才はやが

www.kinokuniya.co.jp

香水 ある人殺しの物語 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

パフューム ある人殺しの物語 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

においの歴史〈新版〉 嗅覚と社会的想像力 著者：アラン・コルバン 翻訳者：山田登世子・鹿島茂 藤原書店

「嗅覚革命」を活写

www.fujiwara-shoten-store.jp

『新版 においの歴史—嗅覚と社会的想像力』（藤原書店） - 著者：アラン・コルバン 翻訳：山田 登世子, 鹿島 茂 - 鹿島 茂による書評| 好きな書評家、読ませる書評。ALL REVIEWS アラン・コルバン『新版 においの歴史—嗅覚と社会的想像力』への鹿島茂の書評。《にお

い》という、必ず思い出すのがヴァン・
allreviews.jp

恥ずかしさ

「動物」園に人はいません。いるにはいるけれど、常時檻や柵の中にはいません。それは人が自分たちを動物と見なしてないからでしょう。

目を向ける・見入る、耳を傾ける、嗅ぐ、ふれる・なでる、味わう・食感を楽しむ——
この中で私がいちばん動物を感じるのは「嗅ぐ」です。

視覚、聴覚、嗅覚、触覚・触感、味覚・食感のうち、視覚、聴覚、嗅覚では対象との間に距離が必要です。

*

人は自分が見たり聞いたりしている場面を恥ずかしがることはあまりないでしょう。何をしたり聞いているかにもよりますが。

さわったり撫でたりするとなると、その対象次第では恥ずかしがるにちがいありません。

味覚・食感については会食という習慣がある以上、個人差はあってもあまり恥ずかしがるだろうとは思えません。でも、私みたいに恥ずかしがる人間が少数ながらいます。

恥ずかしいと感じる行為が私にはわりと多いようです。

プライベートな行為、プライベートな仕草

においを嗅ぐ行為はどうでしょう。

「におい・匂い・臭い」「くさい・臭い」

においは生理現象と深く結びついていますね。汗、唾、腋臭、ガス、排泄物、体液……。
(私はこういう文字を書いたり見ているだけで汗が出てくるタイプです。)

においを嗅ぐとき、人はその対象から目をそらして宙や空(くう)に、または斜め下に眼差しを向けることがあります。目を閉じることもあります。

私はそうした仕草にきわめてプライベートな「なにか」を感じてしまいます。そういう仕草をしている相手を凝視できないという意味です。見てはいけないものと言えいいのでしょうか。

そんなとき、私はその人に動物を感じます。同時に自分にも動物を感じます。

なぜなのかは、あまり考えたことがありません。考えないようにしているみたいです。

においを嗅ぐ、鏡を覗きこむ

とはいうものの、もう少し「におい」と「嗅ぐ」について話してみます。

思い出したことがあるのです。

川端康成の『雪国』の最初のほうに出てくる、ある仕草なのです。

透明ではなく透明感のある文体として、川端康成作『雪国』の冒頭近くの文章を挙げてみます。特に取り上げたい例は、主人公の島村が、曇った汽車の窓ガラスに指で線を引く場面なのです(……)

——汽車の中で主人公の島村が左手の人差し指をいろいろ動かしたり、その指にまつわる記憶にふけったり、指を鼻につけてその匂いを嗅いでみるという、かなりエロティックな描写(猥褻な感じさえする)の後に、向かい側の座席の女(娘)が窓ガラス(手で押し上げて開ける窓)に映る。窓ガラスが鏡になるのだ。その窓ガラスの向こうに夕闇の中の景色が流れていく。窓という鏡に映った娘。窓の向こうに流れる風景。娘の顔に、野山のともし火がともる。映画の二重写しのように。

ガラスが透明であることとガラスが鏡でもあることをこれほどまでに、美しく象徴的に描いた文章はほかにない気がします。エロチックで濃密な筆致の直後に、こうした透明感のある描写を持ってくるところが、川端の凄さです。(……)

(拙文「うつる」でも「映る」でもなく「写る」より)

この場面では、主人公の島村が汽車の窓にうつった少女を盗み見している、つまり少女は見られていることを知らないという点が決定的に大切だと思います。

盗み見している人物の行為を、私たち読者が「盗み見する」という構造になっているのです。

この小説の面白さはストーリーだけでなく「する」「される」の関係性だと私は理解しています。

『雪国』という作品は鏡、いやむしろ二重写しになっている汽車の窓なのです。ストーリーだけに還元するにはもったいない細部に満ちています。

*

このように、においを嗅ぐ行為をしている人が、きわめてプライベートな空間にいるのを感じさせる場面と仕草だと思います。

そもそも、においを嗅ぐときには、人はたった一人で自分の世界に入りこんでいるようです。視覚や聴覚にくらべると、他人と同じ感覚を共有するという感じではない気がします。

鏡と重なるのです。鏡の前において鏡を覗きこむ人もまたきわめてプライベートな空間にいると私は感じています。

あまり他人に見せる姿ではないのです。その姿を見た他人もそのまま見つづけるのを遠慮すべきなのです。

テリトリーをおかす

こんな記事を書いているのですから、もっと踏みこんでみます。

誰かがにおいを嗅いでいる気配を感じるとき、私は相手のテリトリーをおかした気分になるのかもしれませんが。

テリトリーで思いだしましたが、私は他人の家に入ることに特別な思いをいただきます。

そもそもふだんから他人の家に入ることがめったにないためか、私は他人の家に入ると恥ずかしさと戸惑いを覚えるのです。

このこだわりは、発汗、口の渇き、動悸、息切れ、過度の緊張、沈黙という形であらわれます。こういう言葉を書いただけで、もうそうになっています。

私が他人の家に入ってまっ先に感じたり意識するのは、その家のおいんです。湿度をともなった、においなのです。

家の中の様子にはぜんぜん目が行きません。においが私を襲ってきます。

近さ、親しみ

誰かの姿や仕草を見てその人に同化する。

誰かの声や話を聞いていて、その人が自分に入りこんでくるような気分になる。

誰かと肌で接していて、その人を皮膚で感じてうっとりする。

誰かのにおいを嗅いで、その人に近さや親しみや切なさを覚える。

*

視覚・像、聴覚・音声、触覚・触感、嗅覚・におい——視覚がいちばん抽象度が高く、触感とにおいがいちばん動物的（悪い意味ではなく文字どおりに取ってください）だと私には感じられます。

いま述べたのは相手が人の場合ですから、味覚と食感はさておきの話ですが、あえて言わせてもらいますと、「食べてしまいたいほど」誰かを愛しているという言い回しは意味深というか、きわめて「深い」と思います。

人の深層と真相を突いた表現ではないかという意味です。

においに対する人の思い入れは、食感に至れないための代償だと言え、言いすぎでしょうか。

ひょっとすると自分の中に入れてしまいたいのかもかもしれません。美味しそうではなくて、愛していればの話です。

でも、においだけで我慢するのは。もしそうであれば、そこで踏みとどまっているのは、人間だからでしょうか、ヒトという名の動物だからでしょうか。

食う、喰う、食べる

ところで、宇宙人の目からは、この星に棲むヒトという動物同士は共食しているように見える気がしてなりません。

地球規模で考えると、たぶん人は人を食っているようです。とほうもないアンバランスとか格差とか搾取のことです。

少数が飽食し多数が飢えていると言えれば分かりやすいと思います。

人は人を食う。喰らう。食す。いただく。食べる。

食べちゃいたい。

人は人を食う。「食べてしまいたいほど」相手を愛していなくてもです。それは比喻ではなく、人の現実なのかもしれません。

人を食った話に聞こえたら、ごめんなさい。

*

匂わせや、ほのめかしの多い、長い記事をお読みいただき、ありがとうございました。

#五感 # 知覚 # 視覚 # 聴覚 # 嗅覚 # 触覚 # 味覚 # におい # 匂い # 食べる # 動物
ヒト # 生き物 # 鏡 # 川端康成

04/03 げん・現（うつせみのたわごと-7-）

＊

げん・現 (うつせみのたわごと -7-)

星野廉

2023年4月3日 07:39

げん——。きになることば。からからきた、ことば。からから、ものやことがはいる、そととうちがまじり、いまのゆたかさがある。よそものをしめだす。よそものをいれない。よそものをかえりみない。おもいやらない。そんなくになが、このさき、さかえるわけがない。そとのかたきとにた、うちなるかたきが、そとをにくめとそそのかす。にたものは、にくみあう。そっくりは、なお、にくみあう。それがうつつか。ひとのよか。あきらめよ、というのか。

＊

げん・現。げんかい・現界。うつつ。うつせみ。ゆめからさめても、ひとはゆめうつつ。うつつ。うつらうつら。うとうと。ゆめとうつつのあわいにあるのが、ひとのおもい。ひとのこころ。ひのもとでも、やみはさらない。よい、まよいは、きえない。

＊

めざめる。めをさます。さとる。さととる。さ、ありととる。そうであるとする。これ、でまかせ。さもありなん、とおもうだけ。さもあればあれ、いなおるだけ。さもあれ、さとる。なんと、えらそうなことば。ゆめつつ。それで、いいではないか。やまにこもる。ひをたく。けものみちをあるく。みずをあびる。だまり、ただすわりつづける。なんとみがってな。ひとりしばい。おのれだけ、すくわれようとする。あさましい。さどにおりれば、することはやまほどあるのに。すくいをもとめているひとたちが、たくさんいるのに。にせひじり。ひじり。ひをしるひと。えらそうなことば。ありえない。うそっぱち。いかにも、ひとのかんがえそうな、ことのは。ことのはし。かたこと。

＊

げんかい、幻界、言界、現界。さかいはない。へだたりはない。かさなりあい、からみあい、そのあわいはあわい。いまここにあるのは、ことのは。ことのはし。現とうつつ。からことばとやまとことば。そのあわいはあわい。なつかしきは、そのひとのうまれと、そだちからおこる。うえもしたもない。ことばはならぶ。ならんでいるだけ。つづるもの。よむもの。そのあわいもあわい。げん、げん、げん。まぼろし、ことのは、うつつ。幻、言、現。ならんでいるだけ。わかるのは、ひと。ひとがいて、はじめて、わけがある。

＊

うつをうつ。打つを打つ。全をうつ。空をうつ。虚をうつ。鬱をうつ。うつつ。打つ。撃つ。討つ。棄つ。うつつ。打棄つ。でじゃびゅ。déjà vu。あ、みたことがある。あ、きいたことがある。あ、ふれたことがある。あ、かいだことがある。あ、きいたことがある。あ、このおもい、はじめてではない。ぼん、ぼん。とん、とん。がん、がん。うつ、うつ。からだはから。うてばひびく、うつろなから。にく、ち、ほね、ふしぶし。はだ、すなわち、かわをのこせば、からだはからだ。かわをはった、うつわとおなじ。うてば、ぼん、ぼん。おとがする。かいのから。せみのから。へびのから。たましいのぬけがら。からをうつ。うつをうつ。どこかで、みみにしたことのあるおと。なつかしいおと。はのはらのなかで、きいたおとか。まさか。まさに、ゆめうつつ。うつうつ、うつつ。それにしても、こちよひ、ひびき。めをとじ、ききいる。めざめは、いらぬ。さとりなど、いらぬ。わけも、いらぬ。

＊

ふし。からだをつなぐふし。からだをくぎるふし。まをへだてるふし。ふしがながれる。うたがながれる。となえる。よむ。からをふきぬける、かぜ。こまかにふるえる、から。ぼん、ぼん。ぼん、ぼん。とん、とん。がん、がん。うつ、うつ。からだはから。うてばひびく、うつろなから。ちは、なみうつ。にくは、ふるえる。ほねは、きしむ。ふしぶしに、おとなみが、はしる。いきも、ふし。ふーっと、ふく。いきる。いきをあわせて、ふしがなみうつ。それがからだ。いきている、あかし。うつつ。うつうつ。

＊

ま。ま一。ma。am。om。あ一む。お一む。あうん。あくび。ま一と、くちをあげ、うまれる。あ一むと、くちをとじ、なくなる。それが、うつせみのよ。よわいうつせみの、よわい。あくび。ゆめうつつのあわいで、なくなるまね。しにまね。かりのし。ねむ

り。ねむい。ねむる。めをつむる。しにまね。まばたき。またたくまの、しにまね。まぶた。まのふた。まなこをおおう、まなぶた。あくび、まばたき、ねむり。ひびくりかえす、かりのし。そのあわいでみる、ゆめ、おもい。

*

ねむる。かりのし。ゆめをみる。めざめる。よあけ。あさ。あらたなうつつの、はじまり。よみがえる。よみからかえる。やみからかえる。やみはおそろしい。こわい。ひのもとにも、やみがある。ひのかけにも、やみがある。いきていくみちにも、やみがある。なやみ、やまい、くるしみ。おもい、わずらう。ならば、うたおう。なつかしいおととふしを、おもいだし、うたおう。うつせみのように。うたが、とわにながれる、としんじ、ふしをつけて、うたおう。うたう。うたあう。うちあう。それだけが、うつつ。うたおう。はなうたでもいい。おとが、はずれていてもいい。なかみなど、かんがえずに。ふしとひびきに、みをまかせ、いきのあるかぎり、うたおう。それが、うつつ。からだをはっての、ゆめうつつのあかし。

*

ゆめうつつというが、ゆめもうつつも、ひとのおもいのうちにあるかぎり、わけめ、わかれめがあるはず。ことわけ、わけるは、ひとのくせ。さが。うつつは、ないものやないことを、あるとしんじるところ。ゆめのなかでは、しんじるものもこともない。あるという、おもいだけがあるところ。ゆめは、まぼろし。ひたすら、あるとしんじる、ねんじる、いのる、のぞむ、ほっする、ねがう。そのかなたにあるところ。そこがゆめ。そこが、うつつとことなるところ。おそらく。きっと。

*

ひたすら、あるとしんじる、ねんじる。これが、うつつにあるあかし。しるし。ゆめは、しんじるのかなたにある。うつつでは、ひとは、わかろう、しろうと、いのちをかける。よをわたるすべ。かせぐすべ。しあわせをてにする、すべ。さいわいをひきよせる、すべ。うでやちからをみにつける、すべ。はうつー、はうつう、うつうつ。しかた、やりかた、てだて、すべ。すべすべ。すべからく、まなぶべし。べしべし。わがみに、むちうつ。いそがし。

*

いまのはやり。あたまのなかと、かつすべ。あたまのかわとほねをもぎとり、あはあ、わかったとさけぶ。それをつづる。よにだせば、うれる。もうかる。もうかれば、さらにもうけたい。だから、わかったとさけびながら、ぼける。おさめるべきものをわすれるほどの、まぬけぶり。ぼけとたわけは、かおだけにしてくれ。かつまた、はったりをきかす。それをつづる。よにだせば、これまた、うれる。さらにつづらせたい、まわりのやからが、ちやほやほめそやす。そんなわけで、しげるきぎのごとく、ことのはのかずかずを、かきちらす。なんとでもいえるのが、ことのは。はったりにはったりをかさねる。そうしてみせにならぶ、かきもののかずかず。かずかずよもすえ。いや、かずかずよもつづくか。つぎは、きれいがいのち、とか。

＊

すべてがはったり。でまかせ。よせあつめ、うつし、まねて、すこしかえて、それをおのれのうんだものだと、はったりをいう。からことばのかきものを、ひとにめいじて、このくにのことばになおさせ、おのれがなおしたと、はったりをいう。そうやって、おおくかいたものの、かち。まともによみ、うけとったものの、まけ。ほねおりぞんの、くたびれまけ。もうけなし。あげくは、がんばりすぎて、うつ。うつうつ、うつつ。こう、やまをかけてでてきたのが、ぎしぎし、ぎすぎす、はぎしりか。うふうふ。とはいえ、がんばらずがんばるとは、わざなし。どこかできいたはなしの、むしかえし。うらで、かつまたてをむすび、もうけにあずかる、ちゃっかりか。しらぬは、なみのひとびとなり。いや、うすうすしても、しんじない。しんじるのが、らく。しんじれば、すくわれる。あしも、すくわれる。あたまのなかも、すくわれる。からより、ましか。

＊

ひたすら、あるとしんじる、ねんじる、いのる、のぞむ、ほっする、ねがう。それがうつつ。うつせみのよ。だから、ことのはにつられて、かりのもの、にせものをほんものとみまちがい、はったりとくちぐせを、まにうけて、よむ。でるから、よむ。きりなく、よむ。うつつをぬかし、よむ。けれども、うまくはいかないのが、よのつね。がんばりすぎたあげくに、うつせみのから。もぬけのから。なかみなし。いまは、おもいおもいは、はやらない。なかみのないかきものほど、きりなく、あきなく、うれる。だから、またかく。うつつをぬかし、かきちらす。かきなぐる。こんながいい、あきないはない。これこそ、まことのうつつのありよう。このたぐいのかきものこそが、まぼろしとことわりにみちたうつつを、うつすかがみなり。げんかい、幻界、言界、現界。ここでも、かさなる。さかいはない。そのあわいはあわい。

＊

おもいは、かなう。これが、かきもののひながた。つまるところ、こんだけー。わらいごとではない。ひとは、そうしんじる。こころより、しんじる。ねんじる。となえる。つづる。かなしき、いのり。むなしい、いのり。あわれ。それにつけこみ、あきないとするものが、いかにおおいことか。かみ、かみがみ、ほとけ、さとり、たま、あのよ、はったりをつづったかきもの、いわしのあたま。あさましい。ひとは、いのるしかない。そこに、つけいる。かたる。おもいと、ことのはは、ゆめとうつつのかけはし。せめて、そう、しんじたい。だから、そう、ねんじる。となえる。つづる。それしか、ない。できれば、ひとりで、しんじよう。むれることなく、ねんじよう。にせものに、みつぐことなく、いのろう。ひとは、ひとりで、おのれをこえたものと、ことばをかわずべき。すくなくとも、このあほは、そうおもう。たわごとなり。

＊

うつつは、まことにあらず。うつせみは、まことにあらず。ひとのおもいのなかにあり。まことはかたこと。かたことはまこと。かたこと、かたこと、みずぐるまはまわる。ことごと、ことごと、かざぐるまはまわる。くるくる、きょろきょろ、ひとのまなこもまわる。おちつくところなし。おちつくわけなし。うつうつ、うつつ。あわいをうちうつ。あわいをうつつ。あわいをうつ。おとがする。ひびきあり。なつかしいふしがきこえる。うたおう。うつせみのうたを。

◆

以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
= 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
= 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」
= 4) 「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」
= 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
= 6) 「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
= 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わけ

る・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

= 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」

= 9) 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・〇・輪・和・わ」

= 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



「うつせみのたわごと-7-」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

*

今回のテーマは、「現実・げん・現」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる

「現界」です。

目覚めている状態、つまり意識が働いている状態と、夢を見ていたり、空想をしていたり、無意識でいる状態とを対比するのではなく、連続した帯＝濃淡＝階調として論じようとしています。

幻界、言界、現界が重なるものであるとも訴えています。また、瞑想などによって悟りを得て自分だけが救われようする態度や、現実を生きるさいに、現在多くの人たちが指針としがちな自己啓発書を批判しています。

標準的な表記に直したキーワードは、「うつつ・現」「ゆめうつつ・夢現」「悟る」「救い」「あうん」「あくび」「歌う」「眠る」「仮の死」です。

直接書かなかったキーワードは、「om」「うつ病」「出版界」「マーケティング」「実用書」「処世術」「脳科学」『ブヴァールとペキュシェ』です。

この連載全体を通じての、直接書かなかったキーワードは、「ジェイムズ・ジョイス」「フィネガンズ・ウェイク」「サミュエル・ベケット」「フランツ・カフカ」「ジル・ドゥルーズ」「柳瀬尚紀」「レーモン・ルーセル」「VOA の special English」「basic English」「聖書の翻訳」「ジョージ・スタイナー」『After Babel (邦訳：バベルの後に)』「ピジン言語」「クレオール言語」「ブリコラージュ」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.08 うつせみのたわごと-7-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

#日本語 # 言葉 # 大和言葉# 和語 # 漢語 # 自分語 # 現実 # うつつ # 夢 # 夢うつつ

04/04 3人のゲンちゃん

＊

3人のゲンちゃん

星野廉

2023年4月4日 07:45

ところで、唯〇論って、ありますね。で、思い出したのですが、唯幻論と唯言論とのあいだで論争があったとか、なかったとか、そんな話がありました。昔の話です。いわば、ゲンちゃんとゲンちゃんとの喧嘩です。

みなさん、ここで、この記事のタイトルをご覧ください。「3人のゲンちゃん」となっています。そうです、ゲンちゃんは、もう1人いるのです。ひょっとすると、もっといるかもしれませんが、3人にとどめておきます。

では、ご紹介いたします。「唯現論のゲンちゃん」です。“唯現論”でネット検索すると、複数のゲンちゃんがヒットしますが、そのご使用中のゲンちゃんのごことは存じません。世の中には、同名のヒトがたくさんいます。

ここでの、ゲンちゃんは、「げん・現・現実・事実・うつつ」という連鎖を信奉していき、言と「幻」にならってフレーズ化しますと、「現から見れば=現に重点を置けば、すべては現=現実=「今、現に在る事実・状態」である」となります。

また、現が、特権的=メタな立場にある、根拠=基盤=背景=理由として、ヒトは現実に「現在する=現に存在する」事象以外を認識できないという説=フィクション=イメージ=物語がある、ともなります。

＊

で、この現ちゃんの見解ですが、言ちゃんと幻ちゃんの言っていることが同じなのと同じく、同じことを言っています。

いちばん大切だと思われる「ヒトは広義の「言語＝言葉」でしか関係を築けない」＝「ヒトは本能が壊れた生き物だ」＝「ヒトは現実に「現存する＝現に存在する」事象以外を認識できない」という部分が同じことを言っています。

さらに単純化すると、「言語の存在＝本能の壊れ＝現実の認識」は同義です。

「どこが同じなんだ？」「なぜ同義なんだ？」と疑問をいただいている方のために説明します。

3人のゲンちゃんは、「ヒトには、知覚、および、認識の両面において、限界＝欠陥がある」と言っています。

言い換えると、「ヒトは、全知全能ではない。＝ヒトには、出来ないことと、分からないことがたくさんある」、あるいは「ヒトは、この惑星に生息する一介の生き物にしかすぎない」と認めている点で、3人の言っていることは同じだという意味です。

決定的に、同じなのは、

*唯言論＝唯幻論＝唯現論が、どれも「ゆいげんろん」と読める。＝3人とも、「ゲンちゃん」だ

という点です。

というのは、もちろん冗談でして、そうではなくて、

*唯言論＝唯幻論＝唯現論が、どれも「唯〇論」である。

＝3者とも、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」と言っている。

＝できもしないことを言っている。

＝夢を語っている。

＝希望を述べている

という点が同じです。

蛇足ですが、

*すべてを「げん」に還元（かんげん）する（※「還元主義＝ reductionism」の「還元」です）。

=すべてを「げん」で説明する

ことはできません。なぜなら、

*たったいま、記述した立場＝考え方は、言＝言語だからであり、幻＝幻想だからであり、現＝現実だからである

からです。

*問題は、「唯」と「すべて」にある。

と言えます。

*「唯」と「すべて」は、肯定に見える＝思えるが、実際には否定である。「唯」と「すべて」という言葉＝イメージで、何かを特権化する＝メタな立場に置く＝上位に置くという作業を行ったとたんに、ヒトは不可能性に直面している＝もてあそばれている

という事態に陥ることを、忘れてはならないと思います。早い話が、

*「唯」と「すべて」という言葉＝イメージは、「ヒトにとって荷が重すぎる」＝「ヒトには扱えない」

ということです。

*

ここで飛躍しますが、だからこそ、

*ヒトは、必死で記述する。＝記述するしか方法がない。＝記述することで自らの「無力＝無能＝敗北」を認めている。

のです。

万が一、ヒトが全能に近い存在であれば、記述などという、まどろこしい=ほぼ愚かな作業に、没頭=熱中しない、とも言えます。ヒトが血道を上げている

*記述とは、既述であり、奇術もしくは詭術でもある。

なんてなかなか言えていますよね。

したがって、メタな立場にたつ=この惑星の王者を気取るなんて、10年早いどころか、100万年早いと言ったとしても、言い過ぎ or 言い足りない、と言えそうです。

*

とはいうものの、3人のゲンちゃんは、全知全能ではぜんぜんなく、「ぜんぶ、私に任せなさい」「ぜんぶ、私が面倒見よう」という立場には全然ないにもかかわらず、それなりに有効性=効果=影響力を備えていて、ヒトびとのためになっていることは確かです。

誰がいちばん偉いかなんて考えることはありません。それぞれの活躍の場はあるわけです。

それはさておき、現実問題として、要は、ヒトは生きていくうえで、自分にとって「気持ちいい=快である」ゲンちゃんと付き合えばいい、のです。ただし、

*「唯〇論」の、「唯」は外しましょう。「〇論」だけで、いいじゃありませんか。

そうすれば、唯言論、唯幻論、唯現論、が全部、「げんろん」となります。「げんろんの自由」は保障されています（※公平を期するために、あえて「言論の自由」とは記述しませんでした。気遣いと気配りが何よりも大切でございます）。

#言葉#まぼろし#幻想#現実#メタ#記述

04/05 よむ、読む、訓む

＊

よむ、読む、訓む

星野廉

2023年4月5日 07:59

はじめにまとめます。

たとえば、「よむ」に「読」や「詠」という字を当てる、「読」や「詠」に「よむ」を当てる。こうして、この島々にもともとあった音で、よそから来た字を読み下した。すらすら読めるようにした。そればかりか、よその字を変えて字をつくりもした。そうやって、放せば消えてしまう音を残すやり方を編み出した。そうやって大きな竜（たつ）に飲まれることなく、くだしたと言えるかもしれない。

今回はそんな話をします。

目次

文字・しるし、話し言葉、表情・身振り

文字という異物

文字という怪物

異物である文字を手なずけて飼いならす方法

怪物である竜をくだす方法

下（くだ）すことで降（くだ）す

文字・しるし、話し言葉、表情・身振り

言葉は異物だと思います。

私は言葉を広く取っていて、話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情と身振りとするしも言葉と受けとめて生活しています。

文字・しるしにもっとも異物感を覚え、話し言葉、表情・身振りの順で異物感は減少していきます。もちろん、これは私の印象にすぎません。

文字としるしは物であり、消さないかぎり残ります。文字は、たとえば紙に染みこんだ染みであったり、液晶画面の上に浮かんでいる画素の集まりですが、後者を物と呼ぶのにはためらいを覚えますが、消えずにどこかに残っているため、ここでは便宜上物としておきます。

文字としるしが消えずに残っているのは人の外にあるからだという気がします。外にあって消えずに残っているのですから異物感は強いと言えるでしょう。

話し言葉、表情、身振りは発したとたんに消えていきます。それを受けとる人は、ほとんど記憶していくことで「受けとる」しかありません。もちろん、聞き流したり無視することもできます。忘れる場合もおおいにありそうです。

文字という異物

文字の異物性については以下のまとめをご覧ください。

整理します。

- ・文字の習得には、とほうもない時間と労力がかかる。
- ・学習障害として文字の読み書きだけができない人がいる。
- ・人類には無文字社会という選択もあった。
- ・話し言葉、書き言葉（文字）、表情、身振りと言葉と考えた場合に、文字がいちばん遅く出てきた。個人レベルでも、文字の習得が後になりがち。
- ・文字だけが見える、しかも残る。
- ・複製として存在し広まり継承される。
- ・スーパースターとして最後にあらわれた。それでいて、あちこちであらわれ続けている。
- ・産む。産み続ける。

(拙文「文字に異物を感じる時」より)

文字という怪物

私たちの住んでいる大小の島々には文字がない、またはあったとしても普及していなかった時代が長くあり、のちに大陸から文字が伝わってきた。そういう意味のことを小学校、中学校、高校で学んだ記憶があります。

この記事ではそうした経緯を前提に話をします。

*

くだす、下す、降す
くだる、下る、降る
おろす、下ろす、降ろす、卸す、墮ろす
おりる、下りる、降りる
さがる、下がる
さげる、下げる、提げる
もと、下、許、本、元、原、基、旧、故
した、下
しも、下

このように見てみると、日本語の表記がもつれにもつれていることが見えます。

言葉の中に言葉があり、言語の中に言語があるのが一目瞭然なのです。

日本語を母語としていない人が、こうした表記と言葉のもつれを覚えるさいの苦労を想像すると気の毒になります。これを教える人の苦労も並大抵ではないでしょう。

一方で、私たちは上の表記を見て、「そう言えばそうだね」ぐらいの受けとめ方をする場合が多いように思います。もちろん、「そんなの知らなかった」という部分もあるにちがいありません。

いずれにせよ、これだけの知識が身についているとすれば、すごいことだと私は思います。誰もが自分を褒めてやっていいのではないのでしょうか。

*

世界にはいろいろな言葉がありいろいろな文字があるようです。いろいろな表記があ

るのでしょうか、日本語の表記は中でも複雑なのではないかいつも感じています。これは私の印象でしかありませんけど。

話し言葉とちがって、文字を習得するには時間と労力を要します。世界というレベルでは言葉を話せても文字の読み書きができない人が相当数いると聞きます。

日本でも文字の読み書きがこれほど浸透したのは日本の歴史の中でも比較的最近だった。学校で習ったそんな経緯を思いだすたびに、私は複雑な思いになります。

文字は人にとって必ずしも自然なものではない。異物なのではないでしょうか。

異物である文字を手なずけて飼いならす方法

ここまできをまとめてみます。

もともとこの島々にあった音が、のちになって大陸からの文字を迎えたと考えられます。

当時に大陸で読み書きされていた中国語の音の一部（漢字の音読みしている部分）と文字を、当時話されていた「日本語」の音に当てて読み、さらに漢字という異郷の文字から仮名をつかって、「日本語」が読み書きされる環境が整っていった。

簡単に言うと、こういうことでしょう。

この島々では公文書は漢文で書かれ保存されてきたと学校で習いました。ということは昔の中国語が書き言葉として併用されていたのでしょうか。おそらく一部の知的エリートだけが漢文の読み書きができたにちがいありません。

朝貢という言葉をお考えください。大昔の中国は経済的にも政治的にも制度的にも文化的にも科学技術的にも軍事的にも大国であり、その周辺の地域の人たちが、中国を文字どおり中心の国と見なして、ひれ伏していたのでしょうか。

機嫌を損じれば、攻めこまれるに決まっています。恐ろしい存在でなければ朝貢なんてしません。

大昔の中国はその周辺の地域にとって怪物だったのではないのでしょうか。竜です。へたをすれば、この島々では竜の国の言葉が話されていたのかもしれないのです。

その場合には、竜の国の言葉を話すだけでなく、書いてもいたと想像します。

でも、そうならなかった。よく考えるとすごいことではないでしょうか。

怪物をくださったのです。怪物を手なづけ、飼いならしたのです。文字のことです。漢字のことです。

怪物である竜をくださす方法

大陸から来た異物どころか怪物である文字を手なづけて飼いならし、公文書を漢文で書き保存し継承するようになった。あっさりと書きましたが、すごいことをやったものです。

知は力なり。まさに文字は力であり武器だと言えるでしょう。発したとたんに片っ端から消えていく話し言葉と違って、残り、写し、広め、残し、渡すことができるのです。というか、そのことに気づいた人類は、おもにそのためだけに文字をつかっていると言えます。

経済、政治、諸制度、文化、科学技術、そして軍事といったあらゆる知の領域で、漢字という文字を用いて、その綴り方（文法）に従って作成されたおびただしい数の文書が、複製され、拡散し、保存され、継承されてきたのです。

驚くべきことに、漢文（漢語）と並行して話し言葉である大和言葉（和語）がもちいられ、漢字からつくられた仮字と漢字を当てたり組みあわせることで和語が書き言葉にもなっていったと聞きます。

この島々で話し言葉と書き言葉としての中国語が一般的につかわれることなく、「おいしいとこ取り」と言っは語弊がありますが、リングワ・フランカであった中国語の文語をうまく利用したと言えそうです。

リングワ・フランカ - Wikipedia
ja.wikipedia.org

下（くだ）すことで降（くだ）す

読み下（くだ）す、訓み下（くだ）す、書き下（くだ）す
漢文（中国語の文語）を日本語として読む、書く

翻訳のようで翻訳ではない、翻訳ではないようで翻訳である。

書き下した文章に倣って文章を作成すれば遜色ない漢文調の文書ができる。公文書として利用できる。

手なずけて飼いなすために読み下し（訓み下し）書き下すことで、読み降し書き降す。よくもまあ、こんな方法を編みだしたものです。

「読み下ろす」と「書き下ろす」（異なった意味になりますね）ではなく、「くだす・降す・下す」という訓読みを選んだところに反応しないではいられません。

この言葉を当てたところに意図すら読みたくなります。

おまじない、のろい、お呪い、呪い
言霊の幸わう国

属国や属領になりさがるという運命もありえたのではないのでしょうか。

異物であった文字を読み下す書き下すという方法を取ることによって、怪物である竜の配下に成り下がるのではなく、竜を降すという道を切り開いた。そして、この島々にいまの言葉のありようがある。

というお話でした。

#言葉 #文字 #日本語# 漢文 # 和語 # 大和言葉 # 漢語 # 表記 # 異物 # 怪物 # 竜

04/06 連想でつなぐ夜と闇と夢

＊

連想でつなぐ夜と闇と夢

星野廉

2023年4月6日 07:59

“こうしてウェルギリウスは生涯、死にむかって象徴を紡いできた。あらゆる過去が永遠の現在の中に流れ集まって、たったひとつの記憶として全体的につかみ取られる最後の瞬間を、かれは象徴化のいとなみによって先取りしようとしたのである。”

(古井由吉「ヘルマン・ブロッホ「ウェルギリウスの死」」(『日常の“変身”』作品社・所収 p.152)

目次

死者たちの声

欠けているから書ける

読んでから詠む

夜が明ける

言葉と言葉の身振り

多数の他者と連なる

夜が呼ぶ、夜を呼ぶ

よむ、訓む

夢の言葉、言葉の夢

死者たちの声

読む、詠む、黄泉、病み、闇、山

辞書を頼りに「よむ」という音を漢字で分けると、「よみ」と「やみ」と「やま」が浮かんで、つながってきます。

連想です。個人的な印象とイメージでつながっています。夢路イメージをたどるので
(夢は「イメ(寝目)の転」という夢のような記述が広辞苑に見えます)。

よみ、やみ、やま、ゆめ。

連想するのは、死者たちの集まる場所です。そこでは姿が見えるというよりも声がし
ます。

私にとって死者たちの声が集まる空間と時間を濃密に感じさせる作家の一人が古井由
吉です。

そこでは、夜、読み、詠み、黄泉、夢、闇、山が境をなくし、書くと欠く、欠けると書
けるが重なりあいます。

欠けているから書ける

書き手にとっては文字を相手にしているだけに、書いているさいには、そしてそれを
文字として目でたどるさなかには、きわめて具体的な体験として、その不調、言い換え
るなら、欠けている、ない、うまくいかない、書けないという感覚がそこにある——そ
んなふうに私は思います。

興味深いのは、その欠けているがあって書けているということです。さらに、その欠
けていると並行して書けているが続いていくのです。「ない」という感覚をひたすら書い
ていくとも言えるでしょう。

このような言葉、とりわけ文字の世界で人が体験する失調を感じさせる小説を書いた
作家として、私は古井由吉を挙げたいと思います。

小説の冒頭やその近くに、失調があって作品が書かれていく。そんな感じをいだかせ
る書き手なのです。

まず失調感の確認が儀式のように執り行われて、小説が進んで行くかのような印象を私は受けます。

失調とは、たとえば次のような形を取ります。

発熱、うなされる、身体の不調、疲弊・疲労・消耗、渴き・脱水、入院・闘病、時間や方向感覚が失われる・迷う、誰かが亡くなる・葬式・法事、入眠・寝入り際・寝覚め・意識の混濁や喪失、旅

こうした「欠ける」「失う」「無くなる」という出来事や事件があり、それが切っ掛けになって、狂いが生じます。その狂いを引きずりながら、作品が進行し展開していくのです。

そこでは、読み、詠み、夜、黄泉、夢、闇、山——どれもが古井の作品に頻出する言葉でありテーマです——が境をなくし、書くと欠く、欠けると書けるが重なりあいます。

＊

私の考える文学では、「ない」ものに気づき（気配かもしれません）、「ある」ものに目を向ける（これは体感です）ことも含まれます。「ない」も「ある」も「ある」からに他なりません。文学とは、文字として「ある」ものと「ない」ものに等しく目を向けることではないかと考えています。

(.....)

「ない」「欠けている」が「ある」「備わっている」へと移行していく言葉のさまは、読んでいてきわめてスリリングなのですが、私にとってスリリングなのは、ストーリーでも内容でもなく、書かれてそこにある言葉の身振りだということを書き添えておきます。

(拙文「「ない」ものに気づく、「ある」ものに目を向ける」より)

読んでから詠む

読むことなしに詠むことはできない——。これは、日本の定型詩を論じるさいによく言われる言葉です。

読むと詠むがつながっているようです。それはそうです。定型があるのですから、勝手につくるわけにはいきません。

先行する歌なり句なり作品を踏まえて、個人がつくるわけです。個人は大きなつながりの中において、その中の枠からはみ出すことはできない世界でしょう。

その意味で個人は故人につらなります。個人の声は、それより先に立った個人たち、つまり故人たちの声と重なる。そんな世界の話なのです。

闇、黄泉です。

いま述べたことは、定型詩にかぎらず、物語や小説といった散文でも言えると思います。

夜が明ける

やはり、古井由吉を思いださずにはいられません。冒頭で、葬式、お通夜、往生が出てくる小説をあれだけたくさん書いた書き手です。

そうした古井の書く際の姿勢に、古井が大学教員時代に読みこんだというヘルマン・ブロッホの『ウェルギリウスの死』(Der Tod des Vergil)の影を濃く感じます。

つや・通夜、よとぎ・夜伽

wake (目が覚める、生き返る、寝ずにいる、寝ずの番をする、アイルランドなどの通夜)

awake (目が覚める、目が覚めて)

vigil (寝ずの番)

Virgil (ウェルギリウスの英語での表記)、Vergil (ウェルギリウスのドイツ語での表記)

あける、akeru、明ける、開ける、空ける
わける・wakeru・分ける・別ける、わかれる・wakareru・分れる・別れる
夜明け・よあけ・yoake、夜分け・よわけ・yowake

ジェイムズ・ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』(Finnegans Wake) (柳瀬尚紀訳)
を思いだすなどと言われても無理です。少なくとも私には。

言葉と言葉の身振り

古井由吉は、「開ける」や「空ける」という標準的な表記ではなく、「明ける」や「あける」をもちいていました。作家活動の初期から晩年にいたるまでです。

「明・日・月・赤・白」を、おそらく偏愛した書き手でもありました。

私はなぜかとは考えません。その表記を楽しむだけです。いまここでやっているように。

私にとって「古井由吉」は言葉であり言葉の身振りです。刺激的な細部に満ちた作品を、ストーリーや人生観や意図や文学観や恋愛観に置き換える気持ちはありません。

多数の他者と連なる

そこでは個人が多数の他者をつらなる。他者は多者でもある。

個人と他者は定型という鎖でつながっているかのようです。個人を縛る鎖が連鎖をなし、長い長い連なりを形づくっているかのようです。

連鎖、連座・連坐、蓮座。

そこでは個人と故人のあいだの差はきわめて薄いのではないのでしょうか。個人と多者のあいだの隔たりも淡い気がします。

個人の中に多者である他者がの声が層をなしているのです。

短いと長い、遠いと近い、一と多、自と他が対義であるなんて事実誤認だと思います。

夜が呼ぶ、夜を呼ぶ

闇に包まれた夜は、昼間とは異なる思考が起こる時と場でもあります。

「やみ」と「よる」が「やおよろず」の「ひゃっきやぎょう」の「ようかい」を呼び起こすのです。

それは言の葉となって立ちあらわれます。言の葉がイメージを呼びさますのです。

よぶ、呼ぶ、喚ぶ

呼んでみましょう。

よる、夜

よる、寄る・凭る・頼る、縊る・燃る・依る・因る・由る・依る、選る・択る、揺る

やみ、闇

病み、よみ、黄泉、黄昏（たそがれ）

くらい、昏い、暗い、冥い

やむ、止む、已む、罷む、病む

よむ、よる、やむ、やみ

よむ、訓む

よむを訓む。

読み下す、訓み下す。

読む、詠む、歌う、詠う、唄う、謡う、謳う

唱える、称（とな）える

称（とな）える、称（たた）える、讃える、頌える

＊

語る、騙る

言う、謂う

論じる、論（あげつら）う、ことわり、理、断り、事割り、言割り

＊

よむは、読むと詠むと訓むをへて、夢路イメージをたどり、黄泉、闇、山へとつながって行くようです。私にとってはそうです。

よむ、よる、やむ、やみをいくら訓んで下しても、降すことはできないようです。

夢の言葉、言葉の夢

二つの言葉が触れあうとき、そして絡むとき、そこには必ず食う食われる、傷つき傷つける、擦れる擦られる、変える変えられる、分ける分けられる、うつるうつされるがあると思います。

二つが出会って触れあえば、その出会いと触れ合いによって、どちらも無傷ではられないのです。

当てる当てられる、くだすくだされるもです。

そこには必ず変容が生まれます。どちらも、その場においては（全体ではなく部分が）

変わるのです。変容をこうむるというべきでしょう。

和語の音と漢語の文字と音も、それぞれが局部的に変わったのです。

＊

向こうから渡ってきた字をもちいて下そうとしても、もともとここにあった音を降すことはできない。そもそも降すべきものでもない。そんな気がします。

でも、変わったのです。二つの出会いによってどちらもが局部的に傷つき、全体から見ればこちらの音だけが傷を負うかたちで——向こうの文字と音は向こうではびくともしなかった——、ここにあった音もまた変わったわけです。

あててくだしてかわった。

漢字を和語に当てて、分けて分かるのではなく、いったん漢字を忘れて和語の音を音として「よむ」。ただ、ひたすら「よむ」。いわば和文の素読。

それがいいのかもしれませんが。でも、当てて分けて分かってしまった——分けて変わってしまった——いまとなっては、それはできそうもありません。

夢でしかありません。

後戻りなどできるわけがありません。

夢を見るしかないようです。夢路イメージをたどるしかないようです。

二つの言語、外国語と母語、古い母語と今の母語、漢文と日本語、言葉の中にある言葉、言語の中にある言語——。異なる言葉のあいだに生きる。それは異なる言葉の境をこえた夢の言葉に身を置くような気がします。

(拙文「辺境としての人間」より)

夢の言葉、言葉の夢。

#古井由吉# ヘルマン・ブロッホ # ウェルギリウスの死 # 小説 # 連想 # 読む # 詠む
読み下す # 漢字 # ひらがな # 訓読 # 闇 # 黄泉 # 定型詩 # 言葉 # 日本語 # 和語 # 大
和言葉 # 漢語 # 英語 # アイルランド # ジェイムズ・ジョイス # フィネガンズ・ウェイ
ク # 柳瀬尚紀 # 表記 # 翻訳

04/07 連想でつなぐ、たそがれ、twilight

＊

連想でつなぐ、たそがれ、twilight

星野廉

2023年4月7日 08:05

目次

たそがれ

たそがれ、twilight

二つの世界をまたぐ

二重、ふたえ、まぶた

目は心の窓

オノマトペが増すとすんなり入ってくる

音の韻、字の韻、意味の韻、イメージの韻

韻にインしてみたい

たそがれ

たそがれ、誰そ彼、薄暗い夕方に「だれだ、あれは」

かわたれ、彼は誰、薄暗い明け方（または夕方）に「あれは、だれだ」

かたわれ、割れた片方、partner、分かち合う人

辞書を読んでいると、こういうことが書いてあります。私には本を読んでいるよりもおもしろかったりします。

読むと言うよりも眺めるのです。内容がないようだけに、ぼーっとしてきます。

薄暗い視界と薄れていく意識のもとで、「あれは何？」「あれは誰？」「ここはどこ？」
「いまはいつなの？」と問うわけです。

問うのですから、相手がいるか、相手がいる心もちになっているのでしょうか。人はひとりでもふたりになれます。

言葉が相方です。言葉を意識したとき、人は二人に分れます。もちろん、心や気持ちや意識や魂の話です。物理的にはたぶん一人のままです。

＊

- ・two (二)、twig (小枝・二股の枝)、twin (ツイン)、twice (二回)、twist (ツイスト・ひねる)、twinkle (またたく・まばたく・きらきら)
- ・wink (ウィンク・まばたく・またたく・きらきら)

たそがれ、twilight

まばたく、まぶたが降りたり上がったりする。目蓋が開閉する動きと、星がきらきらちかちかまたたく動きが同期する。

共振する。シンクロする。「似ている」はシンクロなのかもしれません。

twinkle、きらきら、きらめく、めばたく、ちかちか
twilight、たそがれる、黄昏れる、黄昏時

たそがれ、「誰そ彼」、夕闇が迫ってきて「あれは誰だ」というふうに目がしょぼしょぼしてくることから来たらしいです。目だけでなく意識もでしょう。

薄明、はくめい、薄明かり
薄明視、暗所視

twilight は明かりが二つある (two lights) ——それでは明るすぎです——というより、明かりが二分の一になるほど薄暗くなるらしいのです。

「夜と朝のあいだに」を連想しますが、そうなると「たそがれ」よりも「かわたれ」なのでしょうが、語呂的には「たそがれ」を選びたいところです。

二つの世界をまたぐ

たそがれ、かわたれ、twilight

夜と朝のあいだに、昼と夜のあいだに——二つの世界のあいだにいる人。

(動画省略)

夜と朝のあいだに 歌：ピーター（池畑慎之介）

作詞：なかにし礼、作曲：村井邦彦

*

夜と朝のあいだに、昼と夜のあいだに——二つの世界のあいだにある時空。

二つの時空をまたぐ、二つの時と場が重なる、二つの要素を合わせ持つ。こうしたイメージは人をぞくぞくさせます。

トワイライト・ゾーン（The Twilight Zone）は絶妙はネーミングだと思います。

トワイライトゾーン - Wikipedia

ja.wikipedia.org

これが元祖のテレビ番組のようですが、最初は日本では「ミステリーゾーン」と訳されていたとのことです。

(動画省略)

以下は後発のシリーズのようです。

(動画省略)

二重、ふたえ、まぶた

たそがれ、黄昏、「誰そ彼」、「あれは誰だ」——しょぼしょぼしてきた目がかすんで二

重にでも見えるのでしょうか。

二重、ダブる、ダブル、double
にじゅう、ふたえ、二重まぶた

まばたく、またたく、きらきらひかる

*

まばたきや視線は意思表示や意思疎通の手段になります。言葉を発することができない人やできなくなった人には大切な手段となるようです。

誰もにとっても他人事ではありませんが、いまは広義のテクノロジーや工学の進歩が助けてくれるのですね。

まさに目は心の窓です。

目は心の窓

眼は心の窓
眼・め・目・まど・窓

気になったので辞書（広辞苑）で「まど」を調べてみました。

”窓・窗・牕・牖
「目門」または「間戸」の意か”

なるほど。イメージが膨らみます。漢字の門構えが気になります。

門、間、関、開、閉

目は、外と内との「かど・ふち・へり・きわ」なのですね。うちとそとがかかわる「戸」とか「とぼくち」——帳・帷（とぼり）や戸張りも連想しますが——というイメージでしょうか。

戸、つまり蓋（ふた）があって、開いたり閉まったりする。

まぶた・瞼・目蓋、まばたく・瞬く、またたく

*

- ・twinkle（きらきら）、twin（ツイン・ふたご）
- ・wink（ウィンク・ぱちぱち・まばたく）、wrinkle（リンクル・皺・ひだひだ・襞・しわしわ）

オノマトペ感が増すとすんなり入ってくる

きらきら、ぱちぱち、ひだひだ、しわしわ——同音を繰り返すことで、オノマトペ感がいや増します。

きらり、ぱちり、ひだ、しわ——これだけでもいいようなものですが、繰り返すことで反復される動きが出るし、オノマトペ感が増すことでしっくりと、頭ではなく体に入ってくる気がします。

オノマトペはすっと入ってきます。

音や文字が「何かに」「似ている」ではなく、「単に似ている」として入ってくるからではないでしょうか。

「何か」との異なりや事なりや言なりとして無理に押し入ってこないのです。

オノマトペは「すっと入ってくる」がポイントです。意味を考えたり意識したりはしていない状態です。その時点では意味なんてないのです。

でも言葉なのです。辞書にちゃんと載っています。

私の好きな言い方をすると本物や実物のない複製の複製であり、起源のない引用の引用です。これが「単に似ている」です。

音の韻、字の韻、意味の韻、イメージの韻

たそがれ、tasogare
かわたれ、kawatare
かたわれ、kataware

同音や似た音をほどよく配置するのが音の韻です。

私はイメージの韻もあると思っています。たとえば、隠と陰と淫は私の中では音だけでなくイメージでもつながります。これがイメージの韻です。

張り裂ける芽、腫れる粘膜、晴れる空——私にはこの三つのフレーズはイメージの韻を踏んでいるように感じられます。

語義は辞書に載っています。意味は集団や共同体で共有されています。イメージは個人的なものです。

イメージは個人的なものですから、イメージの韻は通じる人にしか通じません。その意味では孤独なギャグなのかもしれません。

*

字の韻もあると思っています。字面が似ているのです。

緑と縁なんて見た目が似ていますが、音やイメージの類似が助けてくれないと、なかなか相手に通じません。

私は字の韻が苦手です。いつも不発に終わります。たいてい、記事のラストでつぶやくだけで終わります。

そういえば、緑って縁に似ていませんか？
(拙文「川のほとりで流れをながめる」より)

ところで、「二」の片割れみたいな「弍」は、「二」よりももっと「似」に「似ている」
気がします。とはいえ、これは意見が二つに分れそうです。
(拙文「連想でつなぐ「2・二・II」より)

このように、決め手を欠くのです。いつか決めてみたいです。

韻にインしてみたい

たそがれ月
かわたれ星
かたわれ月
かたわれ星

辞書で見つけたフレーズを並べたものなのですが、それぞれ語義（意味）があるし、字
の韻も音の韻もイメージの韻も踏んでいるように感じます。

見た目も綺麗です。

器用な人なら、四つのフレーズをつないで筋のある作文ができるでしょうね。

ばらばらなままに眺めていて、いろいろな筋をとりとめなく考えるのも楽しいです。

だらだらと
ばらばらに
まばらに
まだらに

これはまさに私のことです。私の生き方そのものが、韻を踏んだ文字列になってい
ます。

文字列が私に擬態したのか、私が文字列に擬態したのか。

*

この記事を書くためにつくったメモから書き出してみました。

朝焼け

夕焼け

空が白む

夜の帳（とぼり）が降りる、暮れる

暮れなずむ、なかなか暮れない

暮れなじむ、暮れて馴染んでくる

夜明け

夕暮れ

暮れる、暗い

黒、墨、涅（くり）

明ける、明るい

赤、朱、紅

古井由吉における「あける・明ける」、「赤」、「明・日・月・白」

よる、夜

よる、寄る・凭る・頼る、縊る・燃る・依る・因る・由る・依る、選る・択る、揺る

ひる、昼

ひる、干る・乾る、放る

黄昏（たそがれ）

黄泉（よみ）・病み・闇・夜

*

上のメモは、音の韻、字の韻、語義や意味の韻、イメージの韻を感じたフレーズを集めて分けたものです。

いつか韻してみたいです。

「韻する」の基本は「似ている」です。

韻、陰、隠、因——韻は陰に隠れている「何か」に因り掛かって踏むものなのでしょう。

「何か」というのは保留の言葉です。なんらかのつながりがあるかなしに関係なく、ある部分が「似ている」と感じたら、強引につなぐのです。

どんな物でも事でも現象でも、多面的で多層的ですから、どこかでつなぐことができます。つながるかどうかは賭けに似ています。

似ているは印象ですから、基本的に個人的なもので、人に通じることもあれば通じないこともあります。

いずれにせよ、私は「似ている」が大好きです。韻に淫してみたいと思っています。

*

ふと（わざとらしく）米澤穂信さんの作品を連想しました。

米澤さんの小説では以下の『インシテミル』（文春文庫）をお薦めします。ネタバレになりそうなので、これ以上深入りできないのが残念です。

そう言えば、かつて書店で働いていた米澤さんに、買った本のレジを何度か打ってもらったことがあります。かといって面識があるわけではありませんけど。

もうずいぶん昔の話になってしまいました。

#国語がすき # 英語がすき # たそがれ # 黄昏 # 韻 # 語義 # 意味 # 語源# イメージ
オノマトペ # 日本語 # 英語 # 漢字 # 辞書 # ピーター# 池畑慎之介 # トワイライト・ゾーン # 米澤穂信

04/08 音を見る、模様を聞く

＊

音を見る、模様を聞く

星野廉

2023年4月8日 08:04

目次

なんとなく似ている

つながっている、いないに関係なく「似ている」

きらきら、またたく

まばたく、まぶた、めのふた

上下、左右、往復（前後）

微小な○○部分を拡大すると△△に「見える」

点・ツー

ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

点と線から面へ

音を見る、模様を聞く

置き換えの結果としてのリアルとリアリティ

現実の文法、言葉の文法

まばらに、まだらに読む

なんとなく似ている

・にている、に、ふたつ、ふたたび、たびたび、ふたまた、またまた、また、またたく

日本語だと、なんとなく似ています。

「なんとなく」を詳しく言うと、発音が似ている、イメージが似ている、字面が似ている、です。

＊

- ・two (二)、twig (小枝・二股の枝)、twin (ツイン)、twice (二回)、twist (ツイスト・ひねる)、twinkle (またたく・まばたく・きらきら)
- ・wink (ウィンク・まばたく・またたく・きらきら)
- ・too (もまた・あまりにも～すぎ)

英語もなんとなく似ているのですが、よく見ると共通点があります。

tw- という語源の素(もと)みたいなものでつながっていると似ているようです。

親戚か親子か兄弟か分かりませんが、血は争えないようです。

wink と too は、語源的なつながりはないようなのに、tw- のついた語と似ています。発音と字面とイメージが似ています。

つながっている、いないに関係なく「似ている」

日本語と英語は、ぜんぜんつながっていないらしいのに似ているところがあります。

つながっている、いないに関係なく似ているのを私はシンクロとか同期と呼んでいます。

似ているだけですから印象に他なりません。

私のイメージするシンクロとは普遍や法則やはたまた真理とはほど遠いものです。

きらきら、またたく

Twinkle, twinkle, little star
きらきらまたたくお星さま

「またたく」は「目叩く(またた)く」というふうに、広辞苑にはとても分かりやすい、駄洒落のような語源の説明が載っています。

「またたく、まばたく、瞬く」ということですね。

Twinkle, twinkle, little star
またたけ、またたけ、小さいお星さま

こういうのは、似ていると思うと似ているように見えたり聞こえたりします。

「何かと何か似ている」のも不思議ですが、「似ていると思うと似ているように感じられる」のも不思議です。

どちらのシンクロも不思議だと思います。

人は似ているを基本とする印象の世界に生きているではないか、と私は感じています。

世界は「似ている」に満ち満ちています。

まばたく、まぶた、めのふた

まばたく、またたく、きらきらひかる
まぶた・目蓋・瞼・まなぶた・目の蓋・めのふた

「目を閉じる」と「目を開ける」、オンとオフ、これがまばたきの最小単位です。これが繰り返されるのです。

人は一年で何回まばたきをするのでしょうか。

*

ぴくぴく、ひくひく、ぱちぱち
どきどき、わくわく、びくびく
心臓バクバク、動悸に同期する

オン・オフ、on・off、0・1
白・黒、陰・陽、ポジ・ネガ、明・暗
満潮・干潮、満ち・欠け、満月・新月

こうやって並べるとシンクロを感じます。私流の言い方で恐縮ですが、イメージの韻を感じます。

つながっているか、つながっていないかに関係なく「似ている」、それが私のイメージするシンクロや同期であり、イメージの韻です。

ピストン運動、上下運動、行ったり来たり、往復運動、びくびく、ゆらゆら、びくびく、ジグザグ、ぴくんぴくん、ひくひく。
(拙文「つながる、かさなる、ふるえる」より)

上下、左右、往復（前後）

どんな動きにも、上下運動（見方を変えればジグザグ運動）、左右の揺れ、往復（前後）運動、ピストン運動があるようです。

その基本単位は、びくびく、on・off、0・1 に感じられます。

移る、通じる、流れる、走る、移動する。震える、振れる。曲がる、曲げる。

こうした動きや姿の基本もびくびくなのかもしれませんが。

さーさー、しゃーしゃーを、細かく分けると、びくびく、ひくひく。すいすいを、細かく分けると、がくがく。

滑らかな動きを細かく分けていくと角張っている、というイメージ。

既視感を覚えます。

微小な○○部分を拡大すると△△に「見える」

数学の微分で、方程式をグラフに描くと曲線になって、その曲線の微小な部分を拡大すると直線に見えるというような話があったように記憶しています。

理屈というのには、あまりにも適当でいい加減に感じられて、一種の面白いお話として受けとめてきました。

数学に対して、自分が勝手にいだいているイメージを裏切るほどのテキトーぶりなのです。

数学って、こんなに感覚的なものでしたっけ。もっと冷徹かつ緻密で、感覚などという曖昧なものを排除したガチガチの論理で成りたっているものだと勝手にイメージしていました。

いまPCに向かって文章を書きながら、あたりを見回すと、あちこちに曲線が見えます。

目の前にもありました。PCのモニターに映し出されている活字は直線と曲線から成りたっています。また、PCの脇に家のカギが置いてあるのですが、それには細い紐と鈴がついています。

紐は細い糸を編んだもののようです。その紐が曲線を描いています。虫眼鏡でその紐の曲線部分を拡大してみると、確かに直線に見えます。ここで、大切なのは、「見える」です。

微分では、方程式をグラフにした場合の曲線を拡大すると「直線になる」とは言っていないなかった気がします。あくまでも「直線に見える」だったと記憶しています。

「見える」なんて、すごくテキトーじゃありませんか。それとも、そんなことはないのでしょうか。この種の疑問を質問できる相手がいないので、どうなのかは分かりません。

点・ツー

まばたく、またたく、きらきらひかる
まぶた・目蓋・瞼・まなぶた・目の蓋・めのふた

「目を閉じる」と「目を開ける」、オンとオフ、これがまばたきの最小単位です。これが繰り返されるのです。

＊

「まぶた」と言えば、あれは冷戦時代の話だったか、敵が報道した映像での捕虜のまばたきがモールス信号だったという話を思い出しました。たしか「torture（拷問）」という単語だったとか。

捕虜への拷問は国際法違反ですから、それが切っ掛けで捕虜釈放への機運が高まったとか、なんとか.....。

ぴくぴくか、ひくひくか、ぱちぱちか、その辺のところは分かりませんが、まぶたの動き、つまりまたたきでモールス信号が送れるのですね。

＊

検索を続けていたら、動画が見つかりました。

百聞は一見にしかずという感じの興味深い映像です。

(動画省略)

なお、この動画では、「まばたきする」に wink では blink という動詞がつかわれています。

ジーニアス大英和辞典によると、blink の語源は「ひるむ・たじろぐ」で、「(まぶしさなどで無意識に) まばたきする《wink は意識的》、目をぱちくりして見る、驚いて見る」とあります。

勉強になりました。

＊

以下の動画の 0:30 あたりからアルファベットの打ち方が出てきます。点と短い線の数を組み合わせているようです。

(動画省略)

Aが「・ー」で、Bが「ー・・・」みたいです。私には、Aが「点・ツー」で、Bが「ツー・点・点・点」みたいに感じられます。

たしかにまばたきをすることで、アルファベットがつづれる、つまり単語ばかりか文章がつづれそうです。

＊

ということは、シェイクスピア全集がモールス符号で送れるということになりそうです。でも時間がかかりかかりそうですけど、きっと名人がいるはずですよ。

日本の電報も同じ原理で信号を送っているのでしょうか。「サクラサク」や「サクラチル」が送れるなら、源氏物語も送れそうですね。ただし、かなり遅れそうです。

＊

思い出しました。

ちいちいぱっぱ、ちいぱっぱ

このリズム、躍動感。生き生きとしたリズム。波打つリズム。

思わず、こどものように手を打っている自分がいます。

ちーちーぱっぱ・ちーぱっぱ

ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

「ちーちー」と「ツー・ツー」の部分では、手を打つ私の手はわずかのあいだですが合
わさっています。

これは間（ま）というか、持続する間というか、空っぽではありません。オン・オフで
いうなら、オンが続いているのです。わくわくが続いている感じ。

ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

なにもモース符号とか信号とか、難しいことを考える必要はないのです。自分の体
に聞いてみましょう。体から出てくるリズムに耳を傾けましょう。

ちーちーぱっぱ・ちーぱっぱ
ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

*

*びくびく、on・off、0・1——。

どこかデジタル的な、

*びくびく、ひくひく、びくびく

よりも、

*ちーちーぱっぱ・ちーぱっぱ

とか、

*ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

でいいのです。

こちらのほうに生命っぽさを感じます。

*

点だけでなく、それに加わる「ツー」という時間の長さ、間（ま）とでもいうのでしょうか、瞬間の持続感——これがリズムの素ではないでしょうか。

次の点を「待っている」「間（ま）」なのです。「待（ま）つわ～」という感じの「ま」。

間（ま）には、期待が詰まっているのです。空（から）の時間ではありません。わくわくが続いています。

点と線から面へ

ー・

ツー・点

持続、休止

息を継ぐ、息を止める、息を吐く、息を吐き続ける

つづる、つづける、つぐ、つぎはぎ

綴る、続ける、継ぐ・接ぐ、継ぎ接ぎ

beat（ビート・打つ・たたく・打ち勝つ）、bat（バット・打つ）、battle（バトル・戦闘・戦う）

period（ピリオド・期間・周期・生理・終止符・休止）

stop（中断・止める・止まる・停留所・句点）

*

上の例は、点と線からなる筋とか、線状っぽいですが、このリズム感は面にもなりそうです。

点と線から面へ、つまり二次元の模様です。

継ぎ接ぎ

つづれ、綴れ、綴れ織り

パッチワーク、織物、引用の織物

まばら・まあら・間疎・間があらひ・疎ら

まだら・斑・ぶち・むら

音を見る、模様を聞く

時間的な線状の断続と、空間的なまだらでまばらな感じがシンクロしているように感じられます。

ちー・ちー・ぽっぽ・ちー・ぽっぽ
ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

上の文字列を模様として見てください。

時間的な断続を文字にすると、その模様が浮かんでいるようにも見えてきます。

「……のように見える」という感覚が大切なようです。見えなければ、時間的な継続や断続が記憶として残らないからかもしれません。

文字に似ています。というか、上で並べた文字列は模様であると同時に全体が文字そのものです。

*

音を見る、模様を聞くが起きている気がします。

既視感を覚えます。

レコードと磁気テープです。

レコードはよく見るとぎざぎざした溝である細い線が渦を巻いています。私が初めてカセットレコーダーを買ってもらったのは、むき出しの磁気テープである帯を巻いた、オープンリールという方式からカセットテープに移行する時期でした。帯が細くなり小型の箱に収められたのです。

(拙文「文字や文章や書物を眺める」より)

レコードの溝のぎざぎさを拡大鏡で見れば、音が見えます。ぎざぎざは模様であり暗号であり文字ではないでしょうか。

磁気テープは磁気を帯びた粒子がフィルムに張りついたもののようです。たぶん粒子は模様を描いているのでしょう。そうだとすれば、私たちは模様を聞いているのです。

置き換えの結果としてのリアルとリアリティ

音を見る、模様を聞く——これは奇をてらったレトリックではありません。じっさいに現実で起きているのです。

私たちはそうした現象に囲まれて生きています。とりわけ、広義のテクノロジーと工学が進歩して日常に入りこみ溶けこんでいる、いまはそうです。

溶けこんでいるので気づかないのです。

文字を聞く、楽曲を見る、映像を嗅ぐ・触る・舌で味わう、手ざわりで見る・聞く・嗅ぐ・味わう——ほら、こういうことってあるじゃないですか。

本やテレビや映画やパソコンやスマホと付き合っている私たちは、これらのことを日常的に体験しているのです（パソコンもスマホも手指で操作するものだということを思い出しましょう、頭というより指が操作を覚えているのです）。

置き換えと、それによる連動のことです。

不正確な記述になりそうなので立ち入ることはできませんが、点字や指点字もそうだと考えられます。

点字 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

指点字

www3.nit.ac.jp

私は障害者手帳を持つ（中途）難聴者なのですが、常時装着している高性能の（しかも高価な）補聴器でも置き換えが起こっているはずですが。私は人工の音声を聞いて生活

しています。

*

仮想現実に行かなくても、すでに私たちは置き換えを体感して生きています。私たちにとっての「リアル」は置き換えられたものなのです。

Aの代わりにAとは別のもので済ませる。

たとえば、見えるものが聞こえるものに、聞こえるものが見えるものに置き換えられています。

それだけではありません。遠いが近いに（たとえばテレビやラジオ）、厚いが薄い（たとえば本や絵や写真や映画やスマホ）に置き換えられています。

要するに、Aの代わりにAとは別のもので済ませて澄ましている。しらっと澄ました顔をしてやっているのです。知覚と錯覚をうまく利用しているわけです。

（拙文「文字や文章や書物を眺める」より）

現実の文法、言葉の文法

繰り返します。音を見る、模様を聞く——これは奇をてらったレトリックではありません。

言葉の世界と現実の世界には、それぞれ独自の文法（比喻です）があるからです。

食い違いや齟齬や矛盾が生じて当然なのです。言葉は事物ではありません。言葉は現実ではありません。たとえ、事物や現実の影であったとしても。

現実には現実の文法（比喻です）があって、それは言葉の文法や言葉の慣用とは重ならないし、ずれていてもおかしくはありません。

（拙文「影の文法」より）

まばらに、まだらに読む

私にとっては、小説も、詩も、言葉を並べた文字列も模様に見えます。細部を見れば区別はできません。

文字列が長いか短いかなのかもしれませんが、細部や部分を見ているかぎりは区別することはできませんし、する必要もない気がします。

誇張ではなく、私には以下の動画——杉浦康平さんのブックデザイン、タイポグラフィの作品です——のように文章が見えます。

(動画省略)

このデザインが好き # シンクロ # 語源 # 英語 # デジタル # 数学 # 二進法 # リズム
電報 # モールス信号 # モールス符号 # 杉浦康平 # タイポグラフィ # 点 # 線 # 持続

04/09 連想でつなぐ、うたう

＊

連想でつなぐ、うたう

星野廉

2023年4月9日 07:45

ちーちーぱっぱ・ちーぱっぱ
ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

＊

＊びくびく、on・off、0・1——。

どこかデジタル的な、

＊びくびく、ひくひく、びくびく

よりも、

＊ちーちーぱっぱ・ちーぱっぱ

とか、

＊ツー・ツー・点・点・ツー・点・点

でいいのです。

こちらのほうに生命っぽさを感じます。

＊

点だけでなく、それに加わる「ツー」という時間の長さ、間（ま）とでもいうのでしょうか、瞬間の持続感——これがリズムの素ではないでしょうか。

次の点を「待っている」「間（ま）」なのです。「待（ま）つわ～」という感じの「ま」。

間（ま）には、期待が詰まっているのです。空（から）の時間ではありません。わくわくが続いています。



以上は、拙文「音を見る、模様を聞く」からの引用です。この文章を書きながら既視感を覚えていたのですが、過去にも同じようなことを書いていたのをようやく思い出しました。

以下は「うたう」2009-07-02 というブログ記事に加筆したものです。いまとはかなり違った文体とレイアウトで書かれていますが、当時の勢いを殺がないために加筆は最小限にとどめました。

うつせみのあなたに 第7巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

目次

目が舞う、目まい

目が回る、目まい

連続性、持続性

お任せ感、無責任状態

うたう、うた、うち

どこかへ連れて行ってくれる乗り物

「いまいるここ」がびろーんとのびる

待つ、まつ

うたう、前の「歌う」と重なる、ずれる

うたう、回、ing

目が舞う、目まい

この数日間、

*連続性=持続性という視点から時間を考える

みたいなことをしています。この視点から考えると、

*直線的な時間のイメージと、円環的な時間のイメージという2項対立が、あまり気にならない

からです。気にならないのは、鈍いからかもしれません。その鈍さを前提に、話を進めます。

*

このところ、かなり本気になって、

*物理的な「時間」、および、ヒトが意識している「とき」

について、考え続けているのですが、当初は、直線的なイメージと円環的なイメージという2項対立をさうとう意識していました。

で、お勉強が嫌いなので、あらためて本を読んだり、検索したりはせずに、高校生くらいまでに理科や社会科で習ったことや、物心ついてから現在にいたるまでに見聞きしたり、経験したことを思い出しながら、

*たぶん、時間って円環状なのではないか

という考えに傾いていきました。

温帯にあるとされる列島に生まれたせいかな（※最近では亜熱帯じゃないかと、夏になるときに思いますけど）、

*季節の繰り返し=サイクルを何度も体験してきたこと

が、その考えの大きな支えになっています。

*アナログ時計を見たり、カレンダーを取り換えたりしたこと

は数知れません。先日の記事では、ごり押しに、

*ぐるぐる運動にこだわる

なんてことをやっていました。夢にまで、ぐるぐるを見ました。ネコ（猫の名前です）を相手に、ぐるぐるをして遊びました。目も回りました。そんなわけで、うんざりしてきたのです。

*めまい＝「目が舞うから、めまい、でしょうか？」

を思い出しました。

*

みなさんのなかに、めまいに見舞われた経験をお持ちの方はいらっしゃいませんか？
軽いものから、激しいものまであるようです。

だいぶ前のことですが、

*ものすごく激しいめまい

に襲われました。マジで死ぬかと思いました。大きな病院で、X線検査、CTスキャン、MRI検査を受けました。けっきょく、脳には異常はみとめられないので、耳のほうに
関係する症状ではないだろうか、

*しばらく様子を見ましょう

という感じで、検査は終わりました。症状もそれ以来、起きていません。

*変だな

と感じたら、飲むようにと医師から言われて、予防薬？　みたいなものを処方されま

した。

目が回る、目まい

激しいめまいについては、もう1つ、経験があります。大学に進学して間もなく、耳の聞こえと耳鳴りが気になっていたにもかかわらず、横着をして放置し、大学卒業後に初めて耳鼻科のお医者さんに診てもらったさいに、

*耳に水を注がれる検査

をされたことがありました。その検査の時にも、

*世界がひっくり返っているのではないかと思うほどの激しいめまい

に見舞われました。どうやら、それは

*平衡機能検査

とって、わざとめまいを起す検査法だと、後になって知りました。めまいはそれほど頻繁に誰もが経験するものではないようですが、嫌なものですよ。

*

もっとも、次のようなこともあります。

*こどもは、自分から目を回すような仕草や運動をしたり、他人によって目を回すような状態にしてもらうのを好む

ということをご存知かと思います。みなさんご自身の、かつてのそうした経験を覚えていらっしゃいませんか？

*メリーゴーラウンド、ティーカップ

なんかも、基本的に、めまいを誘う装置です。

*観覧車

も上部に行けば、怖くてめまいがするかもしれません。

*ジェットコースター

なんて、もろに目が回ります。

乗り物酔いという症状があるように、

*自分が動く、動くものに乗る

ことにより、

*気分が悪くなる

とか

*目が回る

という生理的な現象が起こります。

また、

*お酒による酔い

も度を越すと同様の現象をもたらします。いわゆる

*「危ない薬」

でも、同様の体験ができるかもしれません。もちろん、個人差はあるでしょうが、

*ヒトは、目が回るような体験を好む

と言えそうです。

連続性、持続性

で、

*円環状の時間というイメージ

については、こんな感じで、もうたくさんという思いが強いのです。一方の

*直線的な時間というイメージ

に関しては、今のところ、どうでもいいという感じです。それよりも、

*連続性=持続性という視点から時間を考える

ほうに、現在は興味があります。で、思い出すが、

*アンリ・ベルクソン（アンリ＝ルイ・ベルクソン：Henri-Louis Bergson：1859-1941）
というフランスの哲学者

です。なぜか、ノーベル文学賞の受賞者でもあります。なんででしょう？ この人については、知りません。ただ、

* durée（＝「持続・持続性」：「デュレ」みたいに発音します）

という語の出てくるベルクソンの文章の一節を、大学生時代にフランス人の先生の指示で暗唱させられた。だから、たまたま覚えていて、その語がいまになって気になるのです。

フランスという国の

*国語観

つまりは「フランス語観」ですけど、これには独特のものがあ、詩であろうと、小説であろうと、哲学者の書いた論文であろうと、数学の論文であろうと、科学論文であろうと、

*美しければ暗唱するに値する

みたいな感じなんです。少なくとも、昔、指導してくれたフランス人の先生は、そう言っていました。

*「だから、どんどんいい文章を暗唱しなさい」

と何度も言われました。

お任せ感、無責任状態

で、その

*持続性という考え方

ですが、そっちのほうが、物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」を考える時に、

*個人的にはしっくりくる

のです。さらに言うなら、

*快い=気持ちよい=うっとりする=うっふん=あっはん=ほあーん=でれー

という感じなのです。たとえば言うとはかの言葉に置き換えると、

*音楽=旋律=歌=うなり=流れ

です。

要するに、エコーなんか効かせて

*カラオケで気持ちよく声を響かせながら歌っている自分

を思い出していただければ、よろしいかと思います。それです。

歌や音楽には、

*旋律=メロディー=節という道筋みたいなもの

があって、

*それに導かれて=それに手を引かれて=それに乗って=それに運ばれていうという感

覚

がありますよね。この記事を書いているオンチでも、それなりに

*旋律というものに沿って=乗って歌っている

つもりになります。その

*ある種のお任せ感=無責任状態

が心地よいのです。

うたう、うた、うち

*「うたう・うた・うち」

を、広辞苑をはじめとする手持の複数の辞書で調べてみましたので、自分の好きなように以下に、まとめて=散らかしてみます。

*うたう・歌う・謡う・唄う・謳う・詠う・歌+合う・打ち+合う・訴ふ・訴える

*うた・歌・節をつけて言葉をうたう・音律に合わせる

*うち・打ち・その意味を強めたり、音調をととのえる・打ち興じる（おもろしろがる）の「打ち」・打ち続く（次々と続く）の「打ち」・瞬間的な動作を示す・打ち見る（=ちらりと見る・見るを強調した言い方）の「打ち」

で、

*「うたう」がどうして気持ちよいのか

を考えてみました。いろいろな思いが浮かびましたが、結論から申しますと、

*いま、ここにある・いる、それが続く期待・喜びを、全身で感じる・味わう

という感じですよ。

*持続性を分節化する

なんて、野暮・無粋・興ざめ・どっちらけなことをするのは、気が引けますが、上のような言語化＝分節化も可能ではないかと思えます。

どこかへ連れて行ってくれる乗り物

早い話が、みなさん、

*好きな歌をうたってみてください。

それが

*持続性体験＝いまを生きること

なのです。実際には、

*鼻歌でも、ハミングでも、うなるだけでも、十分だ

と思います。要は、

*旋律に乗ること

なのです。

*旋律は今という瞬間を引き延ばし、どこかへ連れて行ってくれる乗り物みたいなもの

です。

「いまいるここ」がびろーんとのびる

*「どこか」は「彼方（かなた）」といった遠い＝抽象的な場所ではない

という点が大切です。

*「どこか」は、あくまでも「いまいるここ」であり、「いまここで、期待する＝待つ」ことである

* いまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまい
まいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまい
まいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまいまい
まい.....

なんて感じです。

* 「物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」＝「持続性」という考え方＝フィクションは、あくまでも具体的な体験を志向している。一方、「円環状あるいは直線状の、物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」という考え方＝フィクションは、抽象的なレベルにある。

と対比することも可能だという気がします。なぜなら、

* 「物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」＝「持続性」という考え方＝フィクションにおいては、「現在＝今を生きているという意識」が現前している。一方、「円環状あるいは直線状の、物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」という考え方＝フィクションにおいては、年(365日)・時刻(「とき」を「きざむ」)・人生(空間的イメージにたとえられやすい、たとえば川、階段、植物、長い物体)・年代(空間的イメージに置き換えられやすい、たとえば年表)・世代(空間的イメージに置き換えられやすい、たとえばトーテム・ポール、系図)、歴史(空間的イメージに置き換えられやすい、たとえば年表、植物)、過去現在未来(空間的イメージにたとえられやすい、たとえば、円、輪、線、紐、縄、川の流れ)という分類＝分断された言葉＝イメージとして個別に扱われる。

からです。

うたう、前の「歌う」と重なる、ずれる

次の点がきわめて重要です。

* 「物理的な「時間」およびヒトが意識する「とき」＝「持続性」という考え方＝フィクションを、空間的イメージでとらえるとすれば、それは「重なる・かぶる・ダブる／ずれる・ゆがむ・はずれる」という映像になる。

と言えそうです。歌にたとえて考えてみましょう。

*歌は、前の「歌う」の「再現・再演・模倣」＝「重なる」、あるいは、「変奏・編曲・改変」＝「ずれる」という形で現前する。

そして、

*「うたう」という行為は、前の「歌う」の「再現・再演・模倣」＝「重なる」、あるいは、「変奏・編曲・改変」＝「ずれる」という形で、具体的に体験される。

のではないのでしょうか。

うたう、回、ing

うたう

「歌う」ではなく、うで始まってうで終わって、さらにうに続く予感をはらんだ「うたう」。三文字ですから最短の回文ではないのでしょうか。

うたうに漢字を当てろと言われたら、私なら、

回う

にします。

回はレコードとか蓄音機とかオルゴールに似ていませんか。えんえんと同じ調べを奏でる、円盤、歯車、箱、円柱です。

*

「うたう」は永遠の現在

明視感と存在感の強い漢字で固定すると嘘くさく感じます。

「うたう」は永遠の今

これも抽象です。美辞麗句っぽい。そもそも永遠という言葉を持ちだしたことが嘘くさいのです。

「うたう」はとわのいま

「とわ」とか「とこしえ」と言ったところで嘘くさい。

うたう、いまをびろーんとのぼす

うたう、いまがびろーんとのびる

これでいいと思います。

*

* durée (=「持続・持続性」:「デュレ」みたいに発音します)

これもぴんと来ません。

during を連想します。たぶん、語源的につながっています。

during はなんとなくしっくりします。

ing

これだけでいいと思います。

うたう

回

ing

イメージの韻を感じます。見た目は似ていませんが、余韻を残したまま目をつむると似ています。

この韻、つまり「似ている」は視覚的でも聴覚的でもない気がします。からだの揺れとか振れなのではないでしょうか。文字とか音声とか、要するに言葉ではないのかもしれない。

これ以上、言葉にするとますます嘘くさくなりそうなので、ここでやめておきます。

#めまい # 時間 # アンリ・ベルクソン # 歌 # 歌う # 待つ # ずれる # ずれ

04/10 連想でつなぐ、まつ

＊

連想でつなぐ、まつ

星野廉

2023年4月10日 07:38

＊「待つ」・「期待する」、そして「うたう」とは、「いまある・いる自分」を具体的体験として生きる、つまり、「いまを引き延ばし続ける」行為である。

と言えそうです。待っている・期待している・うたっているあいだの、「あいだ」＝「間」＝「時間＋空間」＝「時空」にぎっしり、「いま」が詰まっている。そんな気が、個人的にはします。

(拙文「連想でつなぐ、うたう」より)



本記事は、上の記事の続編で、「まつはいつまでも、まつ」2009-07-03 というブログ記事に加筆したものです。いまとはかなり違った文体とレイアウトで書かれていますが、当時の勢いを殺がないために加筆は最小限にとどめました。

うつせみのあなたに 第7巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

目次

まつ、間を打つ

durée、during

わくわく、ドキドキ、じりじり、待つ
フィクションはリベンジ
筋、ストーリーのあるもの
ヒトのフィクションへの偏愛
つなげる仕組み、つなげるフィクション
『大いなる存在の連鎖』(The Great Chain of Being)

まつ、間を打つ

*「まつ」

ですが、この言葉・イメージについて、このところ

*「うたう」と「持続性 = durée」

とともに、いろいろ考えていました。その過程で「まつ」を、広辞苑などの辞書で引いてみたりもしました。

*まつ・待つ (来ると予期される人や起きるはずの物事を迎えるために時を過ごす・これからの出来事について様子をうかがう)・俟つ (たのみにする・期待する・なにごとかの事態の進展をこれからの展開にまかせる)・松 (神がその木に降り立つことを「まつ」という説あり・葉が二股に分かれるさまから「また・股」から転じたという説あり)

以上が調べた結果ですが、個人的には、

*まつ・間つ・ま+うつ・間を打つ

とも、感字=当て字をしたい気持ちが強くあります。

*正しくない

に決まっています。でも、それでいいのです。

*言葉とは、ヒトがつくった、正確に動くとされる機械がつくったものではなく、きわめてテキトーで、ぼけーとする習性があるヒトがつくったものであり、この時点でも、いろいろなところで、いろいろなヒトによって、つくられつつある「動的な=ダイナミックな=動きつつある=変化の」過程にあるものである。

と思います。もちろん

* 「正しい」もある

でしょう。でも、

* 「正しくない」もある

のです。ひょっとすると

* 「正しくない」のほうが多い

かもしれないのです。いや、きっとそうです。そうお思いになりませんか？ ヒトって、

* 綱渡りをしている = 宙ぶらりんの状態にある

のではないのでしょうか。

* ヒトは、すべて「何か」におまかせの「状態 = 常態」にある。その「何か」が何なのかについても、「何か」にまかせてある。

という感じがしてなりません。

durée, during

で、さきほどの

* まつ・間つ・ま+うつ・間を打つ

ですが、

* ま・間・あいだ・あわい

という大好きなイメージ = 言葉が、あたまたに浮かんで仕方がないのです。

学生時代に、暗唱させられて、言葉の断片として、このアホのあたまに残っている＝
こびりついている

* 「durée = 持続性・持続期間・期間」

という言葉ですが、フランス語の名詞でして、動詞形は

* durer = 持続する・続く・長持ちする・しんぼうする・じっとしている

です。英和辞典を引いてみると、古い英語でも、durer が、フランス語とほぼ同じ意味で
存在していたみたいです。みなさんのなかには、ここで

* during に似ている

とお感じになった方もいらっしゃるかもしれませんが、その通りのようです。なにしろ、
-ing がつけば、「～すること＝動名詞」、あるいは、「～しつつある＝現在分詞」です
よね。で、

* during = ～のあいだじゅう（ずっと）・ある特定の期間のある時に・～のあいだに

のほかに

* endure = 我慢する・持ちこたえる・持続する

も「dure = 固める」というラテン語から来ていると書いてある辞書もあります。

* 「固い・固める」と「続く・持ちこたえる」とが結びついている

みたいです。こじつけやすいイメージですね。

あと

* まつ・俟つ・期待する・たよりにする

の系列＝イメージですと、英語の

* expect = 語源は「何かを求めて外や前方をじっと見つめる」

や

* hope = 語源は「何かを求めて胸が高鳴る」:「ホップ・ステップ・ジャンプのホップ=ぴょんぴょん跳ぶと親戚らしい」

や

* anticipate = 語源は「先取る・先取りする・予想する」

や

* wait = 語源は「待ち伏せする ⇒見張る、見守る、じっと見ている」

がありますね。こうやって、日本語や英語における、ほぼ同義の言葉の語源を調べて、その

*言葉のもののイメージ=原風景

を、ながめる=みる=感じるのが好きです。だから、このアホは、

*言葉のフェティシスト

を、生意気に自任したりするのです。言葉を愛しています。

*話し言葉=音声、書き言葉=文字・活字、言葉の意味=イメージ

と、

*たわむれる（たわぶる=ふざけあう=じゃれあう）

とか

*あそぶ（浮世を離れて別の世界に身をまかせて、うたい、おどり、はしゃぐ=ハレつまり非日常的時空に身をゆだねる）

のが、唯一の楽しみなのです。

わくわく、どきどき、じりじり、待つ

で、この記事を書く

*時間=とき

が、そうした

*言葉との接触=付き合いの「持続しているあいだ =ま・間・あいだ・あわい」になっている

のです。だから、多少長い記事を書くことになっても、疲れはしますが、苦にはなりません。

*いい気持ちで、好きな歌をうたっていたり、ハミングしていたり、あるいは、好きな人を待っている

のと、似ています。

*待つ

に関して言えば、

*会った瞬間よりも、会うまでの待っているあいだのほうが幸せだ

という気持ち=心理が分かるような気がします。

*「durée = 持続性・持続期間・期間」

というのは、そんな、

*わくわくどきどきじりじり

ではないでしょうか。変なことを書きますけど、

*おしっこを我慢している状態にも相通じる

ものがありませんか？ あれって、まさに

*「待っている」「俟っている」

のですよね。わくわくどきどきじりじり、なんて感じつつ。

*サスペンス = suspense

にも通じるような気がします。あれこそ、

*宙ぶらりん=どうなるんだろう=この結果を知りたいなあ=この先を見たいなあ

ですよね。

*世界中の多くの人たちが、サスペンス小説や推理小説や謎解き、および、その種の映画・テレビドラマを好んでいる

というのは興味深い現象です。

フィクションはリベンジ

人は宙づりにされたいのではないのでしょうか。気持ちがいいから。

ただし、「待たされる」より「待つ」のほうが気持ちがいい。「快をもたらす待つ」には主導権が必要です。

同様に、宙づりにされるより宙づりになるほうが気持ちがいいのです。

では、「待つ」と「待たされる」、「宙づりになる」と「宙づりにされる」の違いはなんでしょう。フィクションであるかないかだと思います。

詳しく言うと、虚構を主導している気持ちになっているかないか、です。気持ちの問題です。

ところが、人間はややこしい存在であって、「待つ」よりも「待たされる」、「宙づりになる」よりも「宙づりにされる」ほうが快である人もいます。

最後は好みの問題のようです。

ただし、虚構を主導している気持ちだけは譲れないのです。実際はどうかは関係なくです。人は虚構の世界に生きているからです。

＊

虚構を主導している気持ちだけは譲れないというのは、リベンジなのです。何に復讐しているかというと、夢にです。

人は毎晩（昼間でもいいですけど）、夢の中で主導権を奪われます。夢の中で思いどおりに動けたら、それは現実です。

夢は、たったひとりだけ映画館にいて、最前列のど真ん中の席に縛りつけられて見るものです。強制鑑賞させられている映画、要するにフィクションなのです。

見ている者に、主導権なんてありません。たとえ、その映画＝夢に自分が登場していても参加できないのです。

悔しいと思いませんか。

だからリベンジするのです。この復讐が、虚構＝フィクション＝言語活動なのです。

詳しく言うと、フィクション＝話を作る＝自分の都合のいいように再構成する＝物語る＝語り・騙りです。

ままならない＝思いどおりにならない夢に対し、思いと言葉はある程度自由にいじれるために、いじりながら憂さ晴らしをしているとも考えられます。

＊

この復讐は記憶されると復習できます。「あれは良かったなあ」「あれは気持よかった」なんて、あとになって何度も復習できます。

何度も何度も繰り返す。ここがポイントです。嗜癖し依存しているという意味です。

人は記憶された虚構——たぶんループ状だと思われます——の世界に生きているようです。物理的世界——そんなものがあるとして、あるいはそんなものを人が知覚し想像できるのとしての話ですが——に生きているのではないという意味です。

筋、ストーリーのあるもの

で、このところずっと考えていることで、特に気になるものとして、

* 「歌・音楽＝音声の持続」における、「旋律＝経路＝進行方向＝運んでくれるもの＝乗物」

と

* 「歌・音楽＝音声の持続」における、前の「歌う」の「再現・再演・模倣＝重なる・かぶる・ダブる」および「変奏・編曲・改変＝ずれる・ゆがむ・はずれる・ぶれる」

があります。これを、「まつ」でも、考えてみます。

* 「まつ・待つ・俟つ・期待する・たのむ・頼む・恃む・当てにする・宙ぶらりんになる or される＝あいだ・間・サスペンスの持続」における、「予測・予見・予想・見込み・見通し・見積もり・先読み・下読み・シミュレーション」と、それに対する「演習・練習・訓練・リハーサル・予習・心積もり・けいこ・用意・準備・備え・ウォーミングアップ・段取り・対策・対応・地ならし・お膳立て・布石・身構え・心構え・心積もり・心得」

みたいなものを、あたまに浮かべています。

さらに、でまかせ＝こじつけ＝フィクションつくりをエスカレートさせてみます。とにかく

*筋＝広義のストーリーのあるもの

を列挙してみましょう

*歌・音楽・踊り・能・オペラ・演劇・物語・小説・神話・経典・映画・テレビドラマ・ゲーム・人生・生活・歴史・未来図

こうなると

*「何でもあり状態」

になってきます。実際、そうなのでしょう。何でもありい〜って感じです。

ヒトのフィクションへの偏愛

で、その

*筋=広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くつついていく・まねる・ならう」という運動・動作

が、すごく気になるのです。ひよっとすると、この運動・動作が、

*わくわくどきどきじりじりの正体

ではないでしょうか。で、上のフレーズをもっと長くしてみます。

*筋=広義のストーリーを「なぞる・あとをたどる・そう・つける・つきそう・くっつく・くつついていく・まねる・ならう」という運動・動作を、あたまのなかで、あるいは、身体を用いて、何度も繰り返す喜び・快感に、ヒトは取り付かれている=依存症になっている=離れられない=なしではいられない。

という気がします。これは、

*ヒトのフィクションへの偏愛=異常な愛着=依存症と深くかかわっている

とも言えそうです。

依存ですから、何度も何度も繰り返かえます。

つなげる仕組み、つなげるフィクション

*ミメシス・ミーム・模倣・擬態・コミュニケーション・伝達・学び・学習・共感＝感情移入＝empathy・思いやり・同情・関係性・引き寄せ・感染・反復・永劫回帰・円環・輪・鏡・複製・コピー・クローン・生殖・増殖・培養・細胞分裂・挿し木・再生・再演・認証・同定.....

という具合に、イメージと言葉とが、まさに「増殖」し続けます。

*増殖が増殖する。

ということです。で、上記の言葉たちに共通するのは、

*つなげる仕組み＝つなげるフィクション＝つなげるダイナミズム

という点かもしれません。いろいろなものが、つながってしまいます。というより、勝手につながってしまっているのですけど。いや、そうじゃなくて、

*実際につながっているらしき現象を、今度は言葉とイメージでつなげるという儀式＝操作によって、確認＝納得する。

というのが正確な言い方かもしれません。もちろん、

*「実際につながっている」かどうかは、検証不能だ

ですけど。

『大いなる存在の連鎖』(The Great Chain of Being)

いずれにせよ、これこそまさに、

*アーサー・O・ラヴジョイ (1873-1962) の著作『大いなる存在の連鎖』(The Great Chain of Being)

です。

ちくま学芸文庫 存在の大いなる連鎖

至高の存在である神から、非存在すれすれの被造物へ。この宇宙はあらゆる階層の存在で充満した、連続する鎖の環である。「存在の

www.kinokuniya.co.jp

大学生時代の私にこの本の存在を教えてくれたのは、

* 「学魔」の異名をとる高山宏氏

でした。

高山宏 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

*何でもつなげてしまう名人

です。私の何でもこじつける癖は、この方の影響も大きい気がします。高山氏は、

*由良君美（ゆらきみよし）（1929-1990）

の直弟子です。

由良君美 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

由良君美とは何者か？ 阿部公彦 | じんぶん堂

博覧強記の人て知られ数々の逸話を残す英文学者・由良君美（1929 - 1990）。「偏った本ばかり読む男」を自認する由良

book.asahi.com

由良君美については、「辺境としての人間」という記事に書きましたので、お読み願えれば幸いです。再評価されるのを、個人的に切望している人です。

#待つ #歌う # アンリ・ベルクソン # 時間 # サスペンス # フィクション# 筋 # 物語
アーサー・ラヴジョイ # 高山宏 # 由良君美

04/11 げん・限（うつせみのたわごと-8-）

＊

げん・限（うつせみのたわごと -8-）

星野廉

2023年4月11日 07:38

げん——。きになることば。からからきた、ことば。から、とおく、はて、はし、はしっこ、かぎり。よそやそととであう、ば。それが、さかい。さかいめ。わかれめ。きわ。へり。ふち。しきり。いま、このくには、さかいを、あたかもないものとしてみなそうとしている、くうきにみちている。あやういぞ。われ、くにを、うれえる。そういうひとたちにかぎって、よそをかえりみようとしない。それこそ、あやうい。うれえるにあたいする。

＊

げん・限。げんかい・限界。うち、そと、さかい。ひとはわかる。せんをひく。なわをはる。つちをなづける。しる。ここは、わたしのもの。これは、わたしのもの。あれも、あそこも、それも、そこも、どこもかしこも、なんでもかんでも、わたしのもの。ここ、そこ、あそこ、どこも。こそあどことば。かぎりをしらない。いや、かぎりをする、領るというべきか。いや、むしろ、かぎりをするす、というべき。きりをするす、というべき。きりが無い。このほしの、そとにまで、なかまをおくりこむ。そのかぎりにおいて、ひとはずれている。ずれまくっている。

＊

わかる、わからないは、わく。わくぐみ。わくにきづくものもいれば、きづかないものもある。また、きづくときもあれば、きづかないときもある。わくにきづいたときには、おもいのままにならない、おのれのみをなげく。きづかないときには、おのれのちからに、よいしれる。このほしをおさめているのはひとだと、おもいこむものもおおい。しる、しるす、そして、わかる、わかる。わかるがきわまると、ひとは、そうしたおごりにいたる。

＊

わくにしばられていないものはいない。くさき、けもの、いしころ、そらのくも、かわのみず——。すべてが、わくにしばられ、かぎりのこちらがわにあり、さかいをこえることはない。ひとは、ことばをえたことにより、さかい、かぎり、あわい、はし、ふちという、ことのはをおもうようになった。そうしたおもいをいだし、あたりをみまわすとき、ひとはことのはのさししめすものを、うごかせるとおもいこむ。おもいのままになると、おもいこむ。ことのはが、それがさししめすもののかわりであることをわすれる。ものやことやさまと、ことのはとを、とりちがえる。そのおもいこみと、わすれは、ねぶかい。それも、ひとのかかえる、わくにほかならない。ひとは、もはや、えらぶことのできないわなに、おちいつている。そのありように、おもいをめぐらすものもいる。だが、ここにかけないもののほうが、おおいだろう。

＊

もうひとつ、わながある。ことのはは、ものやことやさまのかずに、おいつけないという、かぎりがあること。ことのはは、つねにたりない。つまり、はてがある。たりないのはあたりまえ。ひとがわかるからにほかならない。わけて、わけまくれば、それだけなまえがいる。ことのはがいる。しるため、しるすため、わかるためには、ことのはがいる。はてしなくわけつづけければ、ことのはのかずがおいつくわけがない。ひとは、わすれやすい。おぼえるにも、かぎりがある。わすれる。わすれると、へる。はてしなく、へる。へりにへる。だから、ひとはつねにへりにいる。いくらわけてもおいつかない、わかりえない、へりにいる。へりくつ。だじゃれ。たわごと。

＊

わく。わくぐみ。ありとあらゆるいきものは、わくぐみのなかでいきている。からだのなかもわく。からだのそともわく。からだのからもわく。ひとも、おなじ。ひとのおもいもわく。おもわず、わく。おもわく。すべてのわくぐみは、うつりかわるのがつね。おそらく、ひとは、おのれのわくをずらすことができる。みずから、わくをずらすことができる。たとえば、おもいのわくをずらす。すると、それまでみえなかったものやさまが、みえるようになることがある。みえないこともある。それがわく。おもわくははずれるもの。わくはずれるもの。

＊

いま、このたわごとをつづっているあほ。このあほも、わくをずらそうとしている。だから、あやしげなやまことばづくしのかきものをつづっている。つづることのはの、わくをずらす。あさはかな、たくらみ。たわけた、こころみ。あほが、あほなりに、こころをこめてつづっている。わかっていただければ、さいわい。からことばのかわりに、できるかぎり、やまことばをもちいようとつとめる。これは、たくらみ。うちのことばにあらがいつつ、さからいつつ、つづる。いいかえるなら、うちのことばのわくのなかで、そとのことばでかたる。ややこしい。やまことばのわくのなかで、からことばでかたるということではない。そんなこと、できっこない。うちというわくのなかで、そのわくをずらし、そとというわくをくみたてる、とでもいおうか。うちのなかのそと。へりとも、いえるかもしれない。

＊

ひらがなづくしも、あほのたくらみ。おなじおとをもちいた、だじゃれも、あほのくわだて。いくとおりにもとれる、あつかきものをよむことの、あつみ。おもいことのはの、おもみ。おもいおもいの、おもみ。そうした、いくえにもかさなった、ことのはの、あつみとおもみのありさまを、ことのはにまってもらい、おどってもらう。それを、よむひとに、あたまだけではなく、からだで、あじわってもらいたい。あたまだけでなく、からだで、してもらいたい。こころに、おもいうかべてもらいたい。ひそやかな、ねがい。

＊

ものをかくことは、かけ、つまり、さいころをふるのとおなじ、ぼくちである。かかれたもの。かけたもの。かけられたもの。かけられたものをよんだときに、どんなめがでるか、わかったものではないことを、よむひとにかんじってもらいたい。かけばよめる、よめばわかるという、うそっぱちにゆさぶりをかけたい。これも、かけ。ぼくち。むちゃな、かけ。あさはかな、くわだて。おろかな、ねがい。ともかく、やってみる。やるっきゃない。だから、たわごとをつづりつつ、ことばのわくを、ずらす。それにつられて、よみのわくと、おもいのわくも、ずれるのではなからうか。あさはかな、たくらみ。ひとりよがり。ひとりずもう。だが、ほんき。ほんきだから、なおあやうい。

＊

そと、うち、へり。ことわけはできるが、それらのあわいはあわい。すべてがへりだと、かんがえるべきではなからうか。うちとおもっているものが、そとにみえる。そと

とみえるものが、うちにおもえる。すべては、ふち、へり、きわ、あわいにあるのではな
かろうか。くりかえすが、そと、うち、へりと、ことわりはできる。とはいえ、あくまで
も、ひとのくせ。ひとのすじ。おそらく、ひとにしかわからないもの。ねこにはねこのわ
けかたがある。うおにはうおのわけかたがある。とりにはとりのわけかたがある。どれ
がたしいというはなしではない。というわけで、すべてはへりだとおもう。これ、こ
とわりなり。ひとは、ひとのわくからでることなどできない。だから、へりにある。そ
れしか、いえない。

＊

よそとうちは、まがい。がせ。もの、こと、さま、すべては、へりにあるというのが、
まことにちかいのではないか。へり、ふち。がけっぶち。あわい、あやうい、あぶなっか
しい、はらはら、どきどき、ゆらぐ、まよう、あてにならない、ごちゃごちゃ、ごちゃま
ぜ。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち。幻界、言界、現界、限界。さだかなものなし、
わけなし。

＊

わかる。わかる。というか、わかったつもりになる。おもいこむ。いずれにせよ、こと
わりは、すっきりしている。だが、ことわりは、どこかむなし。なぜかむなし。ひと
であるかぎり、わかることなしには、いきられない。わけなしには、いきられない。い
きにくい。それが、ひとのさが。ひとにとって、わかることこそが、らくないきかた。へ
りは、あらいのぼ。たたかいのぼ。へりにみをおけば、いきにくい。いきがたい。かど
がたつ。きわは、であいのぼ。なににであうか、わからないところ。おそろし。

＊

ふちにいれば、おちつくことなし。いごち、わるし。だから、ひとは、そと、うち、
きわとわかる。わけて、かたる。そして、かたよる。よそ、なか、へりとわけて、かた
る。そして、かたよる。とりわけ、よそとうちは、まがいくさい。かたり、だまし、なづ
け、てなずける。かたって、こころのやすらぎをえる。だが、だからこそ、ひとはへりに
あるといえる。ひとは、きわにいきる。きわどし。きわなし。はなしは、ここできわま
る。ことのはは、なし。はなし。は、なし。はな、し。は、な、し。いくとおりに、よ
めるし、よめない。たわかる。たわけ。たわけごと。

＊

ことのはは、ことのはてにおいて、ひとのてから、はなれる。ひとが、はなしたのではない。かってに、はなれただけ。ことばは、ひとのしもべにあらず。げんかい、幻界、言界、現界、限界。いずれにおいても、ひとはあるじにあらず。おさにも、かしらにも、あらず。もてあそばれるだけ。あるじとおもいこむのは、ひとの、かって。くせ。さが。

＊

やまい、けが、わざわい、おい、あしこしのおとろえ、きのふさぎ。そうしたものにみまわれるとき、ひとは、かぎり、はて、おわり、すえをおもう。このよと、あのよとのさかいをおもう。ひとであることのわくをおもう。ふちにたち、おのれではない、ことやものやさまを、おもいやる。おもいをめぐらす。うつつ、ゆめうつつ、まぼろし、ことのは。幻界、言界、現界、限界。すべてがまじりあったなかで、ひとはとなえる。おそらく、なにかのなを、となえる。ふしをつけて、となえる。うたう。とりやむしやあかんぼうが、なくように。なく。うたう。まーあ。あーむ。そのこえも、やがてやむ。なぐ。なくなる。かたわらで、ほかのひとがつきそおうと、たったひとりで、なくなる。

＊

ひとがいるかぎり、かたることばがあるかぎり、ものがたりは、まだつづく。はてしなくつづくのではなく、はてまでつづく。やがて、このほしから、ひとびとのなきごえがやむ。うたがとぎれる。いきのねが、とだえる。なぐ。なくなる。みんなして。このままゆくかぎり、おそらく、いや、きっと、ひはかげる。そして、いなくなる。いま、ひとだけでなく、このほしのほかのいきものたちもふくめ、やみにもにた、こいかげりのもとで、みながへりにたっていないと、いいきれものはいらるうか。



以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」(うつせみのたわごと-5-)
- = 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」(うつせみのたわごと-6-)
- = 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」(うつせみのたわごと-7-)
- = 4) 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」

- = 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
- = 6) 「げん・Gen (※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
- = 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見 (げん・けん)・みる・みわける・わかる・わかる・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
- = 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
- = 9) 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・〇・輪・和・わ」
- = 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



「うつせみのたわごと-8-」(全 14 回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせる説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

*

今回のテーマは、「かぎり・へり・げん・限」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「限界」です。ヒトをはじめ、あらゆる生き物は、それぞれに備わった枠の中で生きている。その枠組みを意識できるのは、おそらくヒトだけである。

しかし、ヒトを縛る枠は多種多様であり、それらの枠を意識することは難しい。枠はヒトを縛るが、枠をずらすことで、その縛りから一時的にでも逃れることが可能なのではないか。

外・内・へりという分け方は、うさん臭いものであるが、あえてその分類を受け入れるとすれば、ヒトはへりにいると言える。

以上のように要約できると思います。

標準的な表記に直したキーワードは、「線を引く」「縄を張る」「土地を名づける」「分ける」「名づける」「名が足りなくなる」「あわい・間」「境目」「言葉という枠」「体という枠」「種(しゅ)という枠」「書くという枠」「分かるという枠」「生死という枠」です。

直接書かなかったキーワードは、「近親憎悪」「狂気」「フリードリヒ・ニーチェ」「アントナン・アルトー」「ジェラルド・ド・ネルヴァル」「フリードリヒ・ヘルダーリン」「フランツ・カフカ」「ジャック・デリダ」「ジル・ドゥルーズ」「ヒュー・ケナー」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.09 うつせみのたわごと-8-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

#日本語 # 言葉 # 大和言葉# 和語 # 漢語 # 自分語 # 言の葉 # 言語 # 枠 # 辺境 # 限界

04/12 身をかわして相手を制する

＊

身をかかわして相手を制する

星野廉

2023年4月12日 08:04

目次

大きくて力の強い相手と向かいあったとき

素読

漢文の読み書きはエリートに必須の条件だった

自分が動くことで動かない相手を動かす

遠くにあるものを想像の中で遠隔操作する

現物や実物や本物ではなく、複製を鑑賞する

身をかまし反らせて相手を制する

大きくて力の強い相手と向かいあったとき

自分とは比較にならないほど大きくて力の強い相手と向かいあったとき、どうすればいいのでしょうか。まともに向きあえば、こちらがやられるのは目に見えています。

死んだ振りをする、逃げる、無視する、睨む、にやにや笑う、おべっかをつかう、へそ天になって戦う意志がないのを身をもって示す。

相手とじゃれる、あま囁み程度の囁み合いにとどめる、目を合わせたまま後ずさりする、いざとなったら「窮鼠猫を囓む」でいく。

相手の動きに合わせて、こちらが体を動かし、相手の力を分散する——。そんな武道があると聞きます。

素読

いま頭にあるのは漢文なのです。

私には縁遠い話なのですが、かつてこの国には幼い頃から漢文の素読をやらされて育った人たちがたくさんいたらしいという話を見聞きした覚えがあります。

異国から来た文字で、異国の文法に沿って書かれた異国の文章を、この国の言葉の語順で、ひたすら声に出して読む。形と模様である文字を音に置き換えて（当てて）読む。意味はさておきとにかく音読する。それを何度も繰り返す。これが素読だそうです。

たとえば、夏目漱石や森鷗外はそうした体験というか訓練を受けたそうです。

漢文の素読や漢文の教育の詳細については知りません。私の漠然としたイメージでは、かつてこの国には古代中国語の文語が土着の言葉と並行して使われていたらしい。

具体的に言うと、古代中国語がこの国の為政者たちの作成する公文書に用いられていた。さらに言うなら、いわゆる古代中国語の文字、つまり漢字からひらがなやカタカナが作られた。

簡単ですが、そんなことを学校で習った覚えがあります。

漢文の読み書きはエリートに必須の条件だった

古代中国語が主に書き言葉としてこの国で使われてきたというのですから、それを教えるという習慣があり手法が生みだされたに違いありません。

それが綿々と続いてきて、たとえば慶応3年（1867年）に生まれた夏目金之助（漱石）が漢学私塾二松學舎で漢文を習い、後には漢詩をたしなむまでの素養を身につけたらしいのです。

さらに興味深い話として、漢文を習った後に、漱石が英語を、鴎外がドイツ語を身につけるさいに、漢文の素養が素地になって学習を容易にしたらしいのです。

言われてみれば、西洋の言語と中国語は語順という点で日本語にくらべれば重なる部分が多い気がします。

それだけでなく、理（ことわり）、つまり形式的な論理を支えとする思考という点でも、両者は共通部分が多いと思われまます。

漢文の素養がヨーロッパの言語を学習するさいの素地になる。この説には説得力を感じます。

＊

もっとも漢文の読み書きはエリートに必須の条件であり、ごく一部の国民がその素養を身につけていたことを忘れてはなりません。

昔の人は誰もが漢文を読めたわけではないという意味です。まして漢詩を作れたのは、エリートのうちでもさらにごく一部の文人であったと考えられます。

まことに大雑把な図式ですが、そんな伝統というか「制度」があったようです。

＊

いずれにせよ、現在の日本語と現在の日本の諸制度は漢文なしには、この形では存在していないのであり、漢文を日本語の一部、さらには漢文による古文書を日本文化の一部と見なさないほうが無理があるのではないかと思われまます。

自分が動くことで動かない相手を動かす

自分が動くことで動かないものを動かす――。

漢文のことです。

大陸から持ってきた異物である漢字からなる文章を、列島にある言葉が迎えた。想像するとぞくぞくします。ここからは学校（小学校から高校までです）で習ったことの記憶を頼りに想像します。

文字のなかった列島で話されていた言葉で、文字という異物からなる文字列を読めるようにしたらしいのです。漢文の素読をイメージしているのですが、具体的にどんなことをしたのかは知りません。勝手に想像というか、空想します。

＊

漢字からなる文字列を動かさなくて、自分が動いて読んだらしいのです。上から下という順で書かれている文字を、目を上下に何度も動かしたりして、列島で話されていた言葉で読めるような工夫をしたのは、はじめのうちはバイリンガルの人たちだったにちがいません。

バイリンガルではない人たちに、中国語の文章の内容を伝えるためです。さらにはその読み方をなんとか教えるためにでしょう。

しかもエリートだったにちがいません。ごく一握りの文字どおり頭のいい人たちだったと想像できます。

頭がいいというのは、記憶容量が大きく、情報の処理が素速いという意味です。直感力（直観力）や洞察力にも優れていたにちがいません。

素読によって積みかさねられた漢文の素養が、鎖国が終わった明治以降に西洋の言語や文物を取り入れるさいの素地になった。粗っぽい素描というか粗描ではありますが、想像するとぞくぞくしないではられません。

遠くにあるものを想像の中で遠隔操作する

自分が動く、つまり自分の目を上下に動かす（おそらく同時に頭の中と体でなぞる）ことで、自分の外にある動かないものを動かす（もちろんそう思い込むのですが）ことに成功したのです。

自分の外にいる異物を手なづけ、飼いならしたとも言えるでしょう。こう考えるとすごい話です。

＊

「自分が動くことで動かないものを動かす」とは、漢文だけでなく、人の知覚と認知のあり方のことではないかなんて大風呂敷を広げたくくなります。でも、そうじゃないでしょうか。

動か「ない」ものを目で追って、それが動いて「いる」と感じる、言い換えると「ない」を「いる・ある」にするのは、赤ちゃんがふつうにやっていることではないでしょうか。

さらに言うと、赤ちゃんに限らず私たちがふつうにやっていることではないでしょうか。

人は「ない」を「いる・ある」として想像しながら生きています。広義のフィクションのことです。

本を読む、映像を見る（音や声を聞くも含まれます）、音楽を聞く——こうした行為をしながら、人は自分が動いている、世界が動いていると感じますが、活字も映像も音源も見たり聞いている人とは関係なく存在（「いる・ある」）しています。

その意味で、フィクションは「人の外にある外」（人が放ったとしても人から離れて存在し、人の思いどおりにならない）だと言えるでしょう。

読書（読む・見る）や映像の閲覧（見る・聞く）や楽曲の鑑賞（聞く）における、あそ

ここにあれが「ある・いる」、あそこであれが動いて「いる」——これらはそう見える、聞こえるだけであり、人がそういうふうに想像しているだけなのです。

本も映像も音楽もその目的のために、人が、人の外につくった具体的な物に他なりません。抽象や概念ではなく物です。

「外」と「物」という点が決定的に大切です。「人の中にある中」（もしそういうものがあれば他人には見えないでしょう）ではないからこそ、他人と共有できるのです。

現物や実物や本物ではなく、複製を鑑賞する

絵や写真が添えてある本はさておき、おもに文字からなる本を読む行為と、映像や音楽を鑑賞する場合とは大きく異なる点があります。

本では時間的な拘束なしで読めます。好きな時に好きな部分を読めるという意味です。その意味では、文字からなる文章は一人で楽しむのに適しています。

たとえば、マルセル・ブルーストの『失われた時を求めて』や紫式部の『源氏物語』を数年かけて読む人がいます。

こうした長い作品は長時間の読書向きではなく、むしろ長期間の読書向きだと言えます。もちろん、一人で。

*

一方の映像や楽曲は、時間的な拘束があり、途中で止めることもできますが、それでは興ざめするだろうと私は思います。

もっとも、最近は倍速での鑑賞もあるそうですね。それはそれで興味深い現象だと思います。

そうした鑑賞が可能になり普及してきたのは、複製で鑑賞するのが一般的になってきたからだと考えられます。

絵、写真、映画、動画、楽曲、演劇——こうした作品を、実物や現物や生演奏や実演で鑑賞するのは、その場に出かけて行く必要があります。

大変ですね。手間も暇も、そして費用も掛かります。

そうであれば、自分が移る、つまり移動するのではなく、対象を移す、つまり映したり写したりすればいいのです。それが複製（模写、複写、録音、録画）です。

げんに、いまは複製での鑑賞が一般的になっています。

*

ところで、本も複製です。たとえば小説は複製で読むのが普通です。

その意味では、映像や楽曲は本に近づいてきていると言えそうです。

生演奏や実演は時間的に拘束されます。他の人たちもいっしょに鑑賞しているでしょう。本のように一人で独占できるものではないのです。

いまは違います。

演奏や実演を複製で鑑賞できるようになったために、いまでは演奏や実演を自分の好きな時に、自分の好きなタイミングで止めたり、自分の好きな倍速で楽しめるようになったのです。

一人で、です。

映像や楽曲の鑑賞の仕方が、本の鑑賞の仕方に近づいてきている、もう近づいてほぼ同じになっている、そんなふうと言えるかもしれません。

話を戻します。

身をかまし反らせて相手を制する

読書（読む・見る）や映像の閲覧（見る・聞く）や楽曲の鑑賞（聞く）における、あそこにあれが「ある・いる」、あそこであれが動いて「いる」——これらはそう見える、聞こえるだけであり、人がそういうふうに想像しているだけなのです。

本も映像も音楽もその目的のために、人がつくったものに他なりません。

広い意味でのフィクションと言えるでしょう。

*

言い換えると、人は世界という、自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）を「自分が動く」（たぶん体と頭の中で動いてなぞる、です）ことで手なづけ、飼いならしている、つまり自分の思いどおりに「動かしている」つもりになっているのであり、それが人として生きることだという気がします。

自分の外にあるどころか、遠くにあるものを想像の中で遠隔操作すると言えば分かりやすいかもしれません。夢を見ているのと同じです。

たとえ自分が出てくる夢であっても、人は積極的に夢には参加できません。積極的に参加して夢の世界の事物に働きかけることができるとすれば、それは夢ではなくて現実です。

*

夢は、たったひとりだけ映画館にいて、最前列のど真ん中の席に縛りつけられて見るものです。強制鑑賞させられている映画、要するにフィクションなのです。

強制参加ではなく、強制参観、または傍観ですから、見ている者に主導権なんてあり

ません。たとえば、その映画＝夢に自分が登場していても参加できないのです。

悔しいと思いませんか。夢の中でどんなに走っても前に進めない、藻掻いても藻掻いても藻掻けないもどかしさを思いだしてください。

だからリベンジするのです。この復讐が、虚構＝フィクション＝言語活動なのです。

詳しく言うと、フィクション＝話を作る＝自分の都合のいいように再構成する＝物語る＝語り・騙りです。

ままならない＝思いどおりにならない夢に対し、思いと言葉はある程度自由にいじれるために、いじりながら憂さ晴らしをしているとも考えられます。

しかも、フィクションは人の外にある外ですから、つまり具体的な物——文字であったり映像であったり音声であったりする——ですから、他人と共有できます。

人はみんな夢への被害者同盟を組んでリベンジできるというわけです。というかじっさいにそうなっています。

でも、この憂さ晴らし、つまり夢を相手にした被害者同盟の活動も、じつは夢みたいなものなのです。フィクションをつくるために、思いと言葉をある程度自由にいじったとしても、「ある程度」でしかないからです。

思いと言葉の世界は、夢の世界と同様になかなか思いどおりにならない、ままならないという意味です。

たしかに、世界——現実のことです——という、自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）に比べれば、思いと言葉はずっといじりやすいですけど。

夢と現実、この二つの世界のままならなさ、つまり人の思いどおりにいかないという

性質に対し、人はなすすべがないようです。

全面降伏しかないようですが、人は現実では目が覚めているつもりでいる——酔っ払いに素面かどうかを尋ねるようなもので人自身に確認も検証もできそうにありませんけど——ようなので、そこに賭けるしかない、言い換えれば、そこに賭ければなんとかなるかもしれないとも言えそうです。

＊

ところで、上で述べたリベンジ＝復讐は記憶されると復習できます。「あれは良かったなあ」「あれは気持よかった」なんて、あとになって何度も復習できます。

何度も何度も繰り返さず。ここがポイントです。嗜癖し依存しているという意味です。

人は記憶された虚構——たぶんループ状だと思われま——の世界に生きているようです。

＊

以上、身をおかし反らせて相手を制するというお話、言い換えると、相手を動かす代わりに自分が動く、自分が動くことで相手を動かしている気分になるというお話でした。

読書、そして映像や楽曲やVR（広義のフィクション）の鑑賞（および創作）の話です。

念を押しますが、人が世界——自分の思いどおりに「動かない」異物（怪物でもいいです）——に働きかけるとい話——そんな話はできそうにありません——ではありませんので、無いものねだりはなさないでくださいね。

#レトリック # 言葉 # 文字 # 日本語 # 漢文 # 漢語 # 素読 # 夏目漱石 # 森鷗外 # 遠隔操作 # 想像 # 創作 # フィクション # 読書 # 幻想 # 現実 # 仮想現実 # VR # 夢

04/13 げん・原（うつせみのたわごと-9-）

＊

げん・原（うつせみのたわごと -9-）

星野廉

2023年4月13日 07:56

げん——。きになることば。からからきた、ことば。もとをただせば、おおきなりくからきた、ことのは。ところで、ことばのみなもとを、たどろうとするひとたちがいる。そうしたひとたちの、むれがいる。なぜか、むれると、わかれるとは、ちかい。ひとは、むれると、たちまち、わかれる。みなもとは、ここ。いや、みなもとはあっち。ここ。いや、むこう。なかたがい。どういうわけなのだろう。みなもとにしろ、えだわかれしたはしにしろ、よそではなくここだ、つまり、うちだ、というのは、ちがうと、このあほはおもう。うちもそもそもなく、どこもが、へり。しいて、わけることなし。ことなるものたちがであう、きわ。まじりあう、あわい。

＊

ちなみに、このことは、このしまじまのことか。ひのでるもと。ひのもとのくに。それがいつのまにか、ひのいるくにのことばのよみで、よばれている。にっぽん。にほん。やまとにあらず。ややこし。やっぱり、へりではないか。ことなることのはたちが、あわいで、まじりあったにちがない。いまある、このしまじまのもじのつくりとしくみをみるだけでも、あきらか。ごったませ。ほどくに、ほどけない。ゆたか、というひとたちもいる。それで、いいではないか。もと、つまり、うちのうち、なかのなかなどない。もどるところなどない。そもそも、もどるにもどれない、かえるにかえれない。それが、ひとのさが。

＊

ことばがえだわかれしていったという、ものがたりがある。おとずれたこともない、とおくに、おのれのはなすことばのみなもとがある。そこから、わかれて、ちっていった。ちるにつれて、であい、まじり、うつりかわっていった。どのことばにも、つきまとう、

ものがたり。かたり。もどって、まことかどうかをしらべるすべはない。ときをさかのぼるのりものをまつしかない。ことばだけではない。おやのおや、そのまたおや。ちのすじや、ねっこをたどろうとする、ものがたりにも、ことかかない。みな、みなもとがきになるらしい。だが、もどれない。もどる、とは、もとほる、からきたかもしれないと、じびきにある。もとほるとは、なんのことか。ややこしい。このあほも、ひとはしくれ。もどるの、みなもとが、きになるが、やはり、わからずやのあほには、わからない。ほってもほっても、もとはほりだせない。ほっとけ、ほっとけ、ほうっておこう。

＊

げん・原。げんかい・原界。からことばを、ずらしてみよう。原、源、元。もじのはなつ、ちからをうけとめてみよう。もと、みなもと、本、基、原子、元素、根っこ、ルーツ、泉、湧く、わく、わくわく、出る、でるでる。これ、みんな、でまかせ。とはいうものの、いま、しているはなしは、でるという、うごきときはなすわけにはいかない。こちらも、ずらしてみよう。でる。はらからでる。はらから。なかからでる。なかま。なかまはずれ。なかまわれ。うちからでる。みうち。あつまる。よる。みより。むれる。むれ。むれからでる。むらはちぶ。しっぽのないさるたちのなかまから、でる。さる。ひと。にんげん。にんじん。ずれる。はずれる。はみでる。いえからでる。いえで。いえでびと。さまよいびと。ながれもの。たびびと。たびあきんど。たびやくしゃ。しまながし。わたりもの。いっぴきおおかみ。みんな、でまかせ。それにしても、おもしろい。

＊

むれをでてからも、つながりをおもんじるものたちもいる。そうしたひとたちは、ふるさとをでたのちも、たすけあいながらいきる。ときおり、おおきなあつまり、よりあいをひらくこともある。いつのひか、ふるさとやむれにかえることを、ゆめみるものたちもいる。にしきをかざる、といういいかたが、ある。おちぶれてかえるわけには、いかないのか。でるとかえるは、ふかくむすびついている。でたものには、かえるというおもいが、つきまとっている。かえることはゆめであり、つねにいただいているまぼろしでもある。そうしたうつつのなかで、でたものたちはいきている。かえるをささえに、いきてゆく。ふちとへりをわたりつづけ、いつか、ふるさとやむれに、もどることをゆめみている。

＊

かえるというおもいなしに、ながれつづけるひとやむれもあるだろう。たびげいにんが、あたまにうかぶ。かつて、そうしたひとたちは、たずねるさきぎきで、こどもにも

おとなたちにも、わくわくしたきもちをわかせたのではないだろうか。まつり。はれのとき。ながれものたちが、どこからともなく、おとずれる。ながれつづけるたみのなかには、やむをえずふるさとをでることになった、とおいおやたちのものがたりを、かたりついでいるものもあるときく。いずれにせよ、あわれみをさそう。

*

でたものは、うごきにうつり、いたるところにある、そととうちとのさかいをかきみだす。であう。にらむ。みつめあう。まじる。きそう。あらそう。あやめる。かえる。つくる。つくりかえる。ほろぼす。くずす。つぶす。ずらす。ゆがめる。こわす。うむ。うみだす。さる。とどまる。ことなるものは、よそものとなり、おとずれたところで、うごきをさそい、うごきをなす。そのさまは、さまざまだ。いずれにせよ、かきませる。かきまわす。幻界、言界、現界、限界、原界は、まじりあっている。せっしあっている。てあかのついたたとえだが、ひとはだれもが、たびびとだといえる。だれもが、ふちにあるともいえる。みなもとなし。みなが、界から界へとかってにゆききし、たびをつづける。おちつくころなし。

*

もと。ものやことが、おこるところ。きにたとえれば、ねっこにあたる。はら。いのちのめのやどるところ。ははのはら。はらからのでるところ。でるにまかせて、ずらしてみよう。はら。はらむ。のはら。しんのすけ。くさはら。かわはら。かわら。さいのかわら。さい。さいのめ。まらるめ。うなばら。こはま。おはま。おばま。はま。はまべ。うみ。うみは、このほしのいのちのみなもと、とならったことがある。うむうむ。うむ。うまれる。これ、でまかせ。だが、いえてるきがする。ははのはらのなかは、みずたまりとか。ちいさなうなばら、ではないかいのう。みずのなかでゆれる、いのちのめ。うつくしい、さま。うつくしい、まぼろし。およぐ、ちいさなちいさなこ。やがて、あなからでる。うまれる。おぎゃー。

*

しをおもう。そのとき、ひとは、もとにかえるとかんがえる。たしかに、くちたからだは、つちにもどるらしい。それが、あらたないのちのもとなる。よくみききする、ものがたり。おそらく、そうなのだろう。しぬ。なくなる。もどる。かえる。また、うまれる。いないいないばあ。うまれかわる。いきかわり、しにかわる。いないいないばあ。でるときえるが、わをえがく。ぐるぐるまわる。めまいをさそうおもい。

＊

ひとは、なにに生まれかわるのか。ひとは、ひととして、ふたたび生まれる。そうして、うたがわれないひとが、なんとおおいことか。なんとみがってな、かんがえなのだろう。ひとは、そんなにえらいのか。ぐるぐるわっかごっこを、しんじないものとしては、あまりにもあさましいはなしに、あきれはててしまう。いきて、なお、またもや、もとをとりもどそうというのか。いやし。生まれかわるとしんじて、このよで、いやされたいのか。いやし。いじきたなし。よくぶかし。いまをしんじる。いまをいきる。それだけで、いいではないか。



以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・（隔たったものを）近くする・知覚する」（うつせみのたわごと-5-）
= 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」（うつせみのたわごと-6-）
= 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ（全・空・虚）をうつ・うつうつ」（うつせみのたわごと-7-）
= 4) 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」（うつせみのたわごと-8-）
= 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」
= 6) 「げん・Gen（※ドイツ語）・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
= 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見（げん・けん）・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわぼり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
= 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
= 9) 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・○・

輪・和・わ」

＝ 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



「うつせみのたわごと-9-」(全 14 回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

*

今回のテーマは、「もと・はら・げん・原」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「原界」です。ヒトは何ごとについても、その始原を求めようとする傾向がある。それは、「戻る」「帰る」という運動へとヒトを誘う。

源に帰ろうとするという動きの前提には、枝分かれしている形態の存在と、「出た」という過去の出来事が想定されています。「出る」「出た」は、流れる、移る、渡る、回るといふ運動の源です。動きと動くものが、「出る」と「もと・はら」という場で重なります。もの、こと、さま、うごきが、重なる。それが「原界」ですが、「混沌」とも言えるでしょう。

以上のように要約できると思います。個人的には、苦手な物語です。どうしても馴染めません。信じていないせいか笑ってしまうのです。この種の話とは相性が悪いのでしょう。

標準的な表記に直したキーワードは、「群れ・群れる」「分かれる・別れる」「親」「母」「子」「旅」「つながり」「はらむ・孕む」「産む」「生まれる」「海」「死」「生まれ変わる」「輪」「めまい」です。

直接書かなかったキーワードは、「うんち」「神話」「叙事詩」「経典」「聖典」「カール・グスタフ・ユング」「エミール・パンヴェニスト」「フェルディナン・ド・ソシュール」「インド・ヨーロッパ祖語」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.10 うつせみのたわごと-9-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パブー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

#日本語 # 言葉 # 大和言葉# 和語 # 漢語 # 自分語 # 言の葉 # 言語 # 群れ # 分れる
出る # ルーツ

04/14 「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来
する

＊

「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する

星野廉

2023年4月14日 07:50

目次

「連想でつなぐ「2・二・II」

ひと・ひとり・ひとみ・ふたり

ひとりがふたりになった

瞳、鏡、見る、見られる

見入る、魅入る

目の中の目

ただ見られているだけ

自分の目という異物

「連想でつなぐ「2・二・II」

ところで、どうして私が「二人になる」にこだわるのかというと、人は思いの世界で常に「自分を見ている」からであり、そのときの人は意識の中で二人になっていると考えているからなのです。

(拙文「人工〇〇になりたい」より)

意識の中で二人になっている——夢と同じです。夢の中で、人は「自分の出ている夢」をもう一人の自分の視点から見ている気がします。

夢と、夢うつつと、うつつ（現実）の思いは、緩やかにつながっている。たぶんグラデーション状に連続している。そんなふうに私には感じられます。

とはいうものの、あくまでも以上はどれもが「思い」の中での話であり、現実には人は「一人である」という枠の中にいるわけです。

思いの中では自由に出ていながら、現実の中では決して出ることのできない枠であるからこそ、「一人である」という枠にこだわっているとも言えそうです。

「二人になる」と「二人である」は、私にとってオブセッションなのです。だから、「2・二・II」が気になるのでしょう。

*

「数・かず・すう」の「2・二・II」と、その影とも言える、文字や記号である数字の「2・二・II」は私の中では異なります。

前者（数・かず）は見えない抽象で観念であり、後者（数字）は見える具象であり具体的なものとして立ちあらわれています。後者は私にとって象形文字みたいなものです。

ややこしいことを言いましたが、簡単に言えば「二・に」や「ふたつ・二つ、ふたり・二人」を出発点にして連想ごっこをやっている、それだけです。

「連想でつなぐ「2・二・II」」ですから、かならずしも数学や語源でつないでいるわけではありません。数学や語源よりも個人的なイメージで言葉と思いと世界を掛けて遊んでいます。

要するに掛け詞です。

「に」「ふたつ」「ふたり」と来ると、「ふたまた・二股」なんて連想します。

「また・股」の「また」は、「また来たよ」の「また」と似ています。辞書で調べれば、ひょっとしてつながりそうな気配がしますが、このまま連想に任せましょう。

（拙文「連想でつなぐ「2・二・II」」より）

以上のような調子でやっています。

楽な気持ちで読んでいただければうれしいです。

ひと・ひとり・ひとみ・ふたり

人はひとりです。「うつつ・現」、つまり現実の世界ではひとりです。物理的にひとりであると言ってもいいでしょう。

人は目の前にいる別の人の目の中に人を見ます。自分のことです。

相手に目を近づけて、つまり間近で見ている場合には、相手の目に映っているのは自分です。

いま「相手の目に映っている」と言いましたが、正確には「相手の瞳に映っている」でしょうか。瞳、瞳孔、虹彩、水晶体、角膜というふうに深い入りはしないでおきます。

私は連想を楽しみたいからです。連想は個人的なものですから廉想という感じです。

＊

瞳に人が映る。

こう言うと、「ひとみ・瞳」の語源には日止視と人見の二説あり、なんて話を思いだしますが、語源には「正しい」「正しくない」という、きな臭さがあるのでどっちでもいいというのが私の意見です。

人見が分かりやすいですね。間近で相手の「瞳・鏡」を覗きこめば、ひとりの人が見える。

それが「自分・私・I・eye・おめめ・meme・ミーム・MEM（フランス語）・……自身・同じ・同一」という人だという具合に話は簡単です。

連想しやすいということになります。

嘘だと思ったら、鏡を見てください。そこには鏡瞳があるはずです。そこには自分あ

01/11 ひとりごと ふたりごとのあいたしづと東洋文庫

なた= I eye という他者自分=眼 meme が映っているはずです。

ちなみにだから何？、ひとみは人見から来たという説もあるみたいですか？。さらに言えばもう、やめたら？、虹彩は英語で iris ですがふーん、iris の二つの ieye の点が目に見えませんか？ 目が点ですわ ぜんぜんそうは見えませんが鏡を前にして乱れて（分裂して）失礼しました。

（拙文「異物を入れる、異物を出す」より）

ひとりがふたりになった

太古の人や、いまの赤ちゃんやこどもが、誰か相手の瞳を覗きこんだときを想像しないではいられません。

単純に考えましょう。

ひとりがふたりになったという気がするのではないのでしょうか。

自分のことです。自分のことなのですが、そこに映っているのは自分と意識されないかもしれません。

ひとりがふたりになった——この場合の「ひとり」と「ふたり」を見ている（感じている）目があるのです。

その目が自分でしょう。でも、その目はこちら側にあって、あっちにはないはずなのです。

*

そもそも自分という意識がないかもしれません。

いまの人が意識する自分と、太古の人が意識する自分、または赤ちゃんやこどもが意識している自分が同じだと言う勇氣は私にはありません。

同じだと言うのは無謀ではないのでしょうか。抽象ではないのでしょうか。

＊

ひと・ひとり・ひとみ・ふたり
ひと、ひとり、ひとみ、ふたり。

人一人が、人の瞳に人を見て、二人になる。

人が、ひとと読まれ、ひとりと似ていて、ひとみと重なる。人（ひと）には、ヒト、世の中の人、他人、あなた、おとな、特別な関係にある人、人柄、人の気配という語義がある（広辞苑）。

そんな「人・ひと」と言う言葉が私は好きです。

瞳、鏡、見る、見られる

人の瞳に人が映る。
人（相手）の瞳に人（自分）が映る。

鏡を覗きこんでも、似た体感を得ることができます。

面と向かって相手の瞳を覗きこむよりはリラックスできるはずですが。誰かが息の掛かるほどそばにいては緊張するでしょう。

なにしろ、自分ではない人の目の中にある瞳に自分が映っているのです。しかも見られているわけです。

誰に見られているって、相手と、その相手の瞳の中にある自分の目に、です。

不気味です。不気味なのですが、人はそういう不気味を感じないように学習して生きているようです。さもないと、心が壊れてしまうからでしょう。

見入る、魅入る

相手の瞳に魅入る。

鏡に見入る。

「見入る」は、「覗きこむ」とか「じっと見つめる」ことです。

一方で、「見入る」は「魅入る」、つまり「(執念深く) 取り憑く」「たたる」という意味にもなると辞書にはあります。

目の中の目

相手の目の中の瞳に見入れば、自分の顔や姿が映っているのですから、その顔には目もあるはずです。

目の中の目。目の中に見える目。眼の中に見える目。

見入るは見入られるであるわけですが、あっちで見ているのは、相手の目とその中に映っている自分の目ということになります。

やっぱり不気味です。

しかも、目は一对、つまり二つあるのですから、倍倍、bi- (2) (E2 で 4 です。

不気味の倍増。

あっちに映っているほうではなくて、こっちにある自分の目も数に入れなければなりません。忘れていました。

さらなる不気味の倍々。bi- bi-, bye-bye, baby。

*

それぞれの目に映った目が、さらに……。まるで鏡地獄のようです。

江戸川乱歩の短編に『鏡地獄』があります。大好きで何度も読みました。

江戸川乱歩 鏡地獄

＊

なんだか、取り憑かれた気分になってきました。何に取り憑かれているのでしょうか。目に、瞳に、「映る」に？ 自分に？ 相手に？

分かりません。

取り憑かれたという気配があるだけなのです。主語のない気配ほど不気味なものはありません。

ただ見られているだけ

「魅入る」に話を戻しましょう。

「魅入る」の例文としては「悪魔に魅入られる」（広辞苑）や「死霊に魅入られる」（デジタル大辞泉）が見えますが、穏やかではありません。

とはいうものの、「ただ見入られている」とか「ただ見られている」だけでも、私にはじゅうぶんに不気味です。何に（または誰に）見られているのか不明な「見られている」の事です。

「ただ見られている気配」、相手という主語（主体）のない気配ほど恐ろしいものはないように思います。

それが、瞳や鏡を覗きこんだときの気配ではないでしょうか。

＊

それが、瞳や鏡を覗きこんだときの気配ではないでしょうか。

考えて、理屈が浮かんで、それで解決するとか解消するといったたぐいの不気味さではないのです。

気配とは体感なのですが、「ただ見入られているだけ」という気配は、どの知覚で感じているのかさえ不明なのです。

目、匂い、音？ 声、味、肌や皮膚？

特定できない体感による気配——。

主語・主体・相手のない気配なんですから。名づけようがありません。名づけて手なずけることもできない。名指して、指で指し、尖ったものを持ってきて刺すこともできないのです。

それが「見られる」です。

自分の目という異物

整理しましょう。

そもそも覗きこんだのは自分です。自分が相手の瞳や鏡を覗きこまなければ、こんな変な事態におちいらなかったわけですから。

ということは、出発点は自分の目という理屈になります。言い換えると自分が見ていることに原因があります。

自分の目こそが異物なのではないでしょうか。

というか、自分という異物の目というべきか。

＊

自分という自明な存在が、相手の瞳を覗きこむことによって異物となるかのようです。

瞳だけではありません。水面や鏡面を覗きこむことによっても、自分の異物化が起こ

ります。

自分の異物化を簡単な言葉にするなら、「二人になる」、「二人である」、「ひとりがふたりになった」ではないかと思います。

*

自分の異物化という、いかにもおどろおどろしげですが、誰もが日常的に体験していることなのです。

鏡を覗いて見てください。誰かの目を間近で見てください。人の写っている写真でもいいです。さらに言うなら、テレビでも映画でもネット上の動画でもかまいません。

そこに映っているのは他・多であり自・二でもあるのです。

そこには異物化した自分が映っています。誰もが「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来しているのです。

#見る # 目 # 瞳 # 鏡 # 夢 # 現実 # 連想 # 江戸川乱歩 # 異物 # 顔

04/15 鏡、境、界

＊

鏡、境、界

星野廉

2023年4月15日 07:41

自分の目こそが異物なのではないでしょうか。というか、自分という異物の目というべきか。

自分という自明な存在が、相手の瞳を覗きこむことによって異物となるかのようです。瞳だけではありません。水面や鏡面を覗きこむことによっても、自分の異物化が起こります。

(拙文「「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する」より)

目次

かがみ・かげみ・ふたり

鏡、境、界

こっちとあっち、こちらとかなた、これとあれ

あなた、彼方、貴方

幻界、言界、現界、限界

思考まで外に委託しはじめたヒト

幻界も言界も現界も限界である

かがみ・かげみ・ふたり

鏡を覗きこんだときには、見られている気配を感じますが、見ているのは自分です。同時に自分は見られてもいるのです。

赤ちゃんや幼いこどもは鏡の前でびっくりするでしょうね。少し大きくなったこどもも、ときどき不思議な気持ちになるでしょう。おとなも、ときどき不思議な気分になるのではないのでしょうか。

もっとも、お化粧をするときには不思議がる余裕はないだろうと、お化粧の経験のない私は想像しています。

＊

鏡の語源については調べるのを避けていました。鏡は私にとっては気になるものにはちがいないのですが、ああでもないこうでもない、ああだこうだとわくわくしながら考えたい気持ちが先立つのです。

でも、このさい調べて見る気になって、辞書を引いたり、ネットで検索してみました。

和語だと、耀見・かがみ、影見・かげみ、神・かみ。
漢字の鏡だと境。

わくわくしましたよ。ぞくぞくもしました。

＊

私は長いあいだ、「かがみ・鏡」で「かがむ・屈む、かんがみる・鑑みる、かんがえる・考える」を連想してきました。

第一には音の類似があるからですが、それに加えて鏡の前で首を傾げたり、かがみこんだりするさまが浮かんでくるからでもありました。

人類にとって最初の鏡は水面ではないか。水面では身をかがめなければならない。そういう安易な連想もありました。

＊

それにひきかえ、「和語だと、耀見・かがみ、影見・かげみ、神・かみ。漢字の鏡だと境。」という辞書とネット検索から得た結果は魅力的なイメージを放ってくれます。

とりわけ惹かれるのは「かげみ・影見」です。

影には地面や壁面や水面に映る姿という意味もありますから、これに鏡面が加わると完璧な説明に思えるほどです。

映った姿を見るから影見。

完璧すぎて面白くない気もします。余白がなく余韻が感じられないのです。

一方で、「神」——例の御神体のことでしょうか——までに行ってしまうと、これまた真に迫りすぎて連想を楽しむ心の余裕がなくなります。

また「神」は思考停止をもたらしもします。ここでは連想ゲームをしています。ゲームに神はそぐわないと思います。

そんなわけで「神」の話にはこれ以上立ち入りません。悪しからず、ご了承願います。

鏡、境、界

和語ではなく、漢字、つまり大昔の中国語の文字としての「鏡」が「境」と関連しているらしいという話は、想像力をかき立ててくれます。

鏡は境。鏡は「さかい」。さらに界も付けくわえましょう。

鏡、境、界。

鏡を「きょう」という音読みではなく（つまりかつての中国語の音ではなく）、勝手に訓読みして「さかい」と読んだときのイメージは魅力的です。

さかい、きわ、あいだ、はざま、わけめ、わかれめ、しきり。

*

さかい、ふち、はし、へり。

「辺境」や「周縁」とも重なってきます。

縁（ふち）は縁（えん）、さらには縁（よすが）。ど真ん中ではなく、ふちにいることで、他者やよそ者と出会ったり交わりが生まれるかもしれません。

わくわくするイメージです。

鏡に近づくときのドキドキ、鏡の前にいるときのわくわく、鏡を覗きこんだときのぞくぞく。これは「かがみ」という「さかい」で他者との出会いが起きるからではないでしょうか。

でも、その他者は自分でもあるのです。

こっちとあっち、こちらとかなた、これとあれ

要するに「こっち」と「あっち」のあいだの線であったり帯であったりするイメージです。

具体的には川とか道です。塀や壁かもしれません。山や海であってもかまいません。

そこが、「こちら」と「あちら」の、「こちら」と「かなた」、「これ」と「あれ」のあいだにあれば、それが「さかい」なのです。

山の向こうに、川の向こうに、海の向こうに。
山のあなたに、川あなたに、海あなたに。

あなた・彼方・貴方。「あなた」に over there と you の意味が重なっています。

境のあなたを思うことは、ひとりのひとが思いの中でふたりになることではないでしょうか。

01/10 鏡・窓

思いの世界の中でだけ、です。現実、うつつの世界では人はずっと一人です。

人は「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する「から・空・殻」の器なのかもしれません。

人は、つねに、ふち、きわ、へり、さかいにいるとも言えるでしょう。つまり、境、界、鏡です。

境のあなた
鏡のあなた
堺のあなた
界のあなた

境界
鏡界

「世界」のイメージは、私にとって球体の地球ではなく、海の向こうにある縁（ふち）で深淵へと海水が流れていく果てのある人の世です。

縁から淵へ
淵から淵へ

あなた、彼方、貴方

人と人との間には距離があります。好きあっている同士でも一心同体は夢でしかありません。

というか、同床異夢という言い回しの本来の意味とは違いますが、いっしょに寝ているでも二人が同じ夢を見ることなどまずないでしょう。

同じ床にいる二人は寝入った瞬間に一人になります。夢は徹底して一人だけの世界なのです。同床同夢も異床同夢もかなわない夢でしかありません。

たとえば、恋人同士や夫婦間や家族間であっても、距離は避けられません。誰もが基本的には「別人」という意味での「他人」同士です。それでいて、つながっているし、似ていたりもします。

とはいえ、いや、だからこそ、愛していればいるほど、その距離を埋めたくなるのが人間でしょうね。

＊

「あなた」という日本語の言葉には、「遠く離れた愛しく近しいあなた」という意味が込められています。

あなたは近くて遠い、まぼろし。美しく哀しい言葉——。

ひらがなの「あなた」を「彼方、貴方」と表記すると、その美しく哀しい意味が立ち現れる。まるで魔法のようではありませんか。

次にその文字を口にすると、今度は二つの意味がいっしょになる。

音でいっしょなのに、文字ではべつ。

生きているとしか考えられない言葉の身ぶりや表情。そんな文字と音のある日本語が私は好きです。

幻界、言界、現界、限界

幻界、思いの世界

言界、言葉の世界

現界、現実の世界

この三つの界のうち、「幻・げん・まぼろし・思い」と「言・げん・言葉」の界では、人は「一人から二人になる」ことができます。思いの中で想像や空想することと、言葉をいじることで二人になります。

二人とは、自分と他者=多者=世界の事です。

＊

思いの中で「二人になる」というのは、ぼーっと空想していたり（夢うつつ）、夢を思いだしたり思いうかべることだ言えば、イメージしやすいと思います。

言葉の世界で人が「二人になる」というのは、人が言葉を現実や思いの鏡や写しと見なしていると言えば、分かりやすいかもしれません。

例を挙げます。

私は蝶だ。私は空を飛べる。あの人は私を愛している。世界は私のものだ。私は決して死なない。私は自由に時空を移動できる。

このように言葉をつかうと何とでも言えます。何とでも書けます。自分という枠を出て、二人になっているのです。二人とは、自分と他者=多者=世界の事です。

＊

つまり、言葉はいじりやすいのです。一方で、思いはなかなか思いどおりになりません。現実はずっと思いどおりになりません。

夢を忘れていました。夢もなかなか思いどおりになりません。夢で自由に動けたら、それは現実です。

思い、現実、夢——どれもままならないのです。それにひきかえ、なんとでも言える言葉は、なんといいじりやすいことか。

だから人は言葉に嗜癖し依存するのです。この場合の言葉には、話し言葉と文字だけでなく、映像や楽曲も含まれます。

思考まで外に委託しはじめたヒト

いじりやすい——創作、編集、加工・改ざん、配信・投稿、複製、再現・再生、拡散、保存——のが広義の言葉の特徴です。人以外（機械や AI）に外注・委託することもできます。

人以外（機械や AI）に外注・委託することが可能なのは、広義の言葉（話し言葉・書き言葉つまり文字・映像・楽曲）が「人の外にある外」——人を離れて独自の文法を持ち自立して人の思いどおりにならない——だからに他なりません。

（※「人の外にある外」である、広義の言葉（話し言葉・書き言葉つまり文字・映像・楽曲）が、人の思いを離れた「独自の文法」を持っている点がきわめて大切です。独自の文法を持っているからこそ、機械や AI でも扱えるのです。言葉は人の専有物ではない（専有物でなくなったのではなく、そもそも人を離れている）、という意味です。）

「外にある外である」とはニュートラルで非人称的なものとも言えるでしょう。

だから、機械や AI にも文章が書けるのです。書いていると、書いているように見えるのさかいはないのです。さかいがあるのは人においてだけであり、さかいはおそらく外にはないのです。

（拙文「素描、描写、写生」より）

最近では、人は言葉の制作だけでなく、思いすらも、人以外（機械や AI）に外注・委託するようになってきたようです。思考まで外に委託して、ヒトはいったい何をするのでしょうか。

文字どおりの「ホモ・サピエンス」ではなくなります。どうせあいつらには負けるからと、学んだり考える意欲を喪失したのでしょうか。

*

じっさいには人が学んだり考える意欲を失ったというよりも、敵や競争相手（敵もライバルも人です）を打ち負かすために、機械や AI に思考を委託しているように私に

は見えます。

要するに、自分のため、または自分の仲間や身内のために、心や魂までヒト以外に託そうとしているようなのです。

ただし、その結果がどうなるかが必ずしも分かっていないし予測できていないようにも見えます。

思考をヒトの外部に全面的に委託するという状況はいま始まったばかりなので、致し方ないのかもしれませんが、きわめて危険だという気がしてなりません。

そう思う一方で、敵やライバルを打ち負かしたり殺めるために、自分の手を汚さず、また労を省くために、道具（武器を含む）や機械をもちいるというのは、人類の常套手段であり、人類の歴史そのものだったことを考えると、妙に納得してしまう自分がいるのも確かです。

人類には学習機能が備わっていないのかもしれませんが。というか、それが強みなのかもしれません。

幻界も言界も現界も限界である

話を戻します。

いじりやすい言葉ですが、いったん口にしたり、文字にすると、一瞬だけ、人はそれを信じます。信じないことには、話すことも聞くことも、書くことも読むこともできないからです。

嘘だ。馬鹿らしい。空想にすぎない。妄想だ。訂正しよう。書きなおそう。いや、それとは真逆だ。

こうした評価や判断は、いったん言葉を信じたあとの後付けなのです。そのままずる

ずる信じつづけたり、言ったことや書いたことや聞いたことや読んだことを忘れる場合もあります。

つぎからつぎへと話さなければならない、書かなければならない、聞かなければならない、読まなければならない。これが人の現実です。人は忙しいのですが、ますます忙しさに拍車が掛かっているのが現在でしょう。

＊

現実の世界だけで、人は一人になります。

しかも思いどおりにならないし、言葉のようにいじることもできません。

とはいうものの、人は一つの界にとどまっているわけではなく、行ったり来たりを繰り返しているだろうし、一度に二つの界にいることもある気がします。

幻界、現界、言界、このうちのどれがベースにあるのかは、人それぞれだという気がします。

＊

「行き来する」という言い方は言界の慣用的な言い回しであって、私としては三つの界は濃淡としてあるようにイメージしています。グラデーションとか「まだら」とか「まばら」という感じです。

三つの界は別個にあるわけではないという意味です。その意味で各界が、さかいにあり、さかいである、つまり限りがある限界なのです。

幻界も言界も現界も限界である。
げんかいもげんかいもげんかいもげんかいである。

音にすると同じです。そもそも別個にあるわけではないので、分ける必要はないのです。

あるときには、ある界の濃度が高くて、別の界の濃度が低いというぐあいです。三つの界が混在しながら、それぞれの濃度が変化しているという言い方もできそうです。

この辺のイメージも人それぞれでしょう。お好きなイメージで想像してみてください。

あほらし、付き合い切れんわ、とお感じになる方は、忘れてくださいね。

#鏡 # まぼろし # 幻 # 言葉 # 現実 # 漢字 # 日本語 # 和語 # 大和言葉 # 多義性 # 両義性 # AI # 人工知能

04/16 わたし（ぼく）が二人いる

＊

わたし（ぼく）が二人いる

星野廉

2023年4月16日 07:47

瞳だけではありません。水面や鏡面を覗きこむことによっても、自分の異物化が起こります。

自分の異物化を簡単な言葉にするなら、「二人になる」、「二人である」、「ひとりがふたりになった」ではないかと思います。

(拙文「「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する」より)

目次

「わたし（ぼく）が二人いる」

「そんなことを言うと人に笑われますよ」

たとえば、本を読む、映像を見る、人の話を聞く、音楽を聞くとき

擬装、偽装、変奏、変装

他者は多者

他者は人とは限らない

他者という名の自分

ほぼすべての〇〇中で二人

スマホは別格

なりきる、演じる、一人二役

人の外にある外

はずれる、ずれる

「わたし（ぼく）が二人いる」

人がつねに「二人である」というのは、物理的な意味ではなく、思いとか意識についての話です。

人が二人であるという常態の根っこには、誰かの瞳や鏡に初めて見入ったときの体験がある気がします。

「自分が二人いる」とか「わたし（ぼく）が二人いる」というフレーズは、あまり口にされません。口にするとすれば、酔っ払いか、鏡を覗きこむ行為に慣れていない幼児か、正気を逸脱した人（たとえば私です）でしょう。

＊

自分が二人いるとなんとなく感じるのと、自分が二人いるのを目の当たりにするのはかなり違います。

相手の瞳や鏡やガラスに映った自分の姿は、大きな衝撃をもって迫ってくるという意味です。ある意味で一目瞭然なのです。

その衝撃は言葉にしにくいだろうと考えられますが、あえて言葉にするなら、「まさか」とか「えーっ!」とか「なんだ、こりゃ」にまじって、「やっぱり」とか「ああ、そうか」とか「はじめまして、よろしくね」といった、納得に近いものがあるだろうと想像します。

「そんなことを言うと人に笑われますよ」

「わたし（ぼく）が二人いる」は、相手の瞳の中、鏡の中、水面の上、ガラスの表面に見えます。「見る」は「見分ける」です。見ることで分けています。

「自分が二人いる」を見る」とは、こっちにいる自分と、あっちにいる自分を見て分けて初めて言える言葉です。

大切なことを言います。自分を肉眼で見たことがある人はいないのです。これからも見ることはできないでしょう。

＊

自分の目で直接見たことがない自分が、そこに映っている。それが瞳、水面、鏡、ガラスの表面を覗きこんだときの体験なのです。

薄々感じていた「自分が二人いる」が目の前に立ちあらわれている——。この衝撃的な体感と、それが心に引きおこした動揺を、人は隠します。

最初のうちはひとりで大騒ぎをしたかもしれませんが、騒ぎ立てることではないと学習するようになるのです。

「そんなことを言うと、人に笑われますよ」

このようにして、「わたし（ぼく）が二人いる」は禁句となります。

＊

とはいえ、心（思いや意識）の中では、人は二人であり続けます。心の中で人はつねに二人なのです。

この場合の「二人」とは、「自分と他者＝多者＝世界」のことだと言えば分かりやすいかもしれません。

たとえば、本を読む、映像を見る、人の話を聞く、音楽を聞くとき

ややこしそうな話をしていますが、難しく考えないでください。

本を読む、映像を見る、人の話を聞く、音楽を聞くときを思い出してください。本の文字、映像、人の声、曲からの音や声が、自分に入ってきますね。

そのときには、自分の中にそれまでの自分とは異なる「何か」がいる、またはあると感じられると思います。それが他者です。

ただし、その他者は、自分が外から受け取った他者であり、外にある他者ではありません。自分の中に映っている他者です。

自分の中で起きていることですから、自分の一部だという意味です。

本を読んだり、映像を見たり、人の話を聞いたり、音楽を聞いている最中には、それに集中しているから、自分は半分お留守になっているようなものです。

もう一方の半分に他者の影が映っているのです。自分と他者の影が、自分を半分ずつ占めていると言えれば分かりやすいかもしれません。

ものすごく簡単に言えば、それが「わたし（ぼく）・自分が二人いる」状態です。

擬装、偽装、変奏、変装

ここで話を飛躍させます。

結論から言います。

禁句となった「わたし（ぼく）が二人いる」は偽装（擬装）され、変奏（変装）されるのです。

「わたし（ぼく）が二人いる」とは、つねに自分を見ている目があるということです。意識や思いや心においての話です。

これを分裂と呼ぶこともできるでしょう。自己の相対化とか、距離化という言葉も浮かびますが、そういう厳めしくて偉そうで空っぽな言葉はここではつかいたくありません。

でも、今回はそういう言葉をつかわないでは話が進まないなので、気が進まないながらもつかってみます。

＊

主観と客観、主体と客体、個人と社会、自分と世間、自と他、部分と全体、無意識と意識――。

いま挙げたペアはどれもが、「わたし（ぼく）が二人いる」の言い換えです。要するに、擬装であり偽装であり変奏であり変装なのです。

簡単に言うと、自分と他者です。この他者は多者であり、人とは限りません。

いま述べた「他者は多者である」と「他者は人とは限らない」について、もう少し言葉を加えます。

他者は多者

他者は多者。

人は基本的に「単数の自分と単数の相手」というふうに「ふたつ・ふたり」を交互に見ながら（思いやりながら）生きています。

基本が「2・2・II」で、バトンのように「2・2・II」をつなげていって多としてとらえるのではないかと私はイメージしています。イメージですから、私の個人的な印象です。

基本が「2・2・II」で、二つに分れる枝のように、どんどん枝分れして多としてとらえたり扱うのではないかとも思っています。

いずれにせよ、人にとっての他者は、「2・2・II」を基本単位として、多者になるとイメージしています。

他者は人とは限らない

人は世界や宇宙や森羅万象を同類の人だと見なしないと、とらえられないし扱えない気がします。

いわゆる擬人です。世界を人に擬（ぎ）すことですが、世界を人に偽（ぎ）すと言っても大差ないでしょう。

擬人の根っこには言葉があるようです。手なずけるために名づけるのです。とはいうものの、名づけてなつくとは限りません。

世界を名づけて飼いならすことはできないようです。

＊

それでも他に方法がないので、人は名づけつづけて、いまにいたります。

名づけることでとりあえず相手が定まります。名づけることは呼び掛けることでもあります。

「ねえ、あなた」では心もとないのです。

「ねえ、牛さん」、「ねえ、山さん」、「ねえ、虫さん」、「ねえ、虫さんのカブトムシさん」、「ねえ、海さんの波さんのさざ波さん」、「ねえ、星さんの、金星さん」

このように、言葉は大ざっぱにも細かくも言えます。日々みなさんが体験なさっていることです。

＊

大切なのは、言葉で名指すことによって、相手が定まり、呼び掛けやすくなることです。

人でも、人以外でも、生きたものでも、生きていないものでも、思いにうかぶもので

も、呼び掛けることができます。いわゆる擬人です。

他者は人と限らないというのは、そういう意味です。

言葉で分けることが、見分けてたり、感じ分けたりすることを助け、うながしてくれるのでしょうか。というか、それが目的だと思います。なんとなく、言葉で分けているわけではないはずです。

他者という名の自分

主観と客観、主体と客体、個人と社会、自分と世間、自と他、部分と全体、無意識と意識——。

いま挙げたペアの、前者が「わたし（ぼく）・自分」で、後者が「二人いる自分の片割れ・他者」だと言えば、分かりやすいかもしれません。

後者が「二人いる自分の片割れ」であることがきわめて大切です。「他者」と名づけ名指しているものの、自分なのです。「二人いる自分」の片方だという意味です。

「他者」という名の自分という感じでしょう。「他者」と呼んでいるだけで、自分なのです。

人は他者にはなれません。なりきったり、演じたりすることはできます。ベースはあくまでも自分なのです。この点については後で述べます。

*

同様に、客観、客体、社会、世間、他、全体、意識、世界、宇宙と呼ばれているものは、自分に映っているものであり、それは自分がとらえているものであるという意味で、自分の片割れであり、つまりは自分に他なりません。

他者という名の自分、客観という名の主観、客体という名の主体、社会とう名の個人、世間という名の自分、他という名の自、全体という名の部分、意識という名の無意識——というわけです。

ほぼすべての〇〇中で二人

忘我（エクスタシー）、酩酊（べろべろ）、めろめろ、覚醒（しゃきっ）、ぼけーっ、ぼーっ、へろへろ、朦朧、悟り（そんなことがあればの話ですけど）、夢、夢うつつ、思考中、作業中（読書・執筆・作品の制作・作品の鑑賞・スマホの閲覧）、熱中、病中、お悩み中、食事中、トイレ中、入浴中、スポーツ中、運動中、ゲーム中——。

ほぼすべての〇〇中です。

こうした状態——こうなると人の常態ですけど——において、人は「一人」と「二人」のあいだを行き来したり、「二人である」状態を維持しています。

自分を見ている目がいたり、逆に自分を忘れるほどの他者——他者という名の自分であり、自分の中に他者の影が映っているだけです——が自分を占めている場合です。

これがいちばん分かりやすい「わたし（ぼく）が二人いる」かもしれません。

スマホは別格

いまこの記事をお読みになっている方には、スマホやパソコンをつかっているときに「自分が二人いる」と言えば、リアルに分かるかもしれません。

ただいまの私がそうですが、他者に自分を乗っ取られそうにならないと、つかえませんから。

冗談はさておき、パソコンやスマホは他者と双方向的に常時つながっているので、きわめて要注意だとは言えそうです。

双方向的に他者＝多者＝世界と常時接続しているという経験に人類はまだ慣れていない気がします。

こうした端末でも本が読めるし楽曲が聞けるし、絵や写真や映画やテレビ番組を見ることができますが、これまでとはどこかが違います。双方向とネットに常時接続が鍵だという気がします。

やっぱり「電話」なのです。見る聞くだけでなく、見られているし聞かれている。それが緊張と不気味さとなって身に迫ってくるのかもしれない。

「誰に」「何に」が不明な「見られている」「聞かれている」ほど恐ろしいものはないと思います。

「ただ見られている気配」、相手という主語（主体）のない気配ほど恐ろしいものはないように思います。

（拙文「ひとり」と「ふたり」のあいだを行き来する」より）

とりわけ、ベッドやトイレやお風呂場といった、基本的に「一人だけにいる」はずの場にも持ち込める、スマホは別格です。

人はスマホに侵されている＝冒されている＝犯されている気がします。いまに乘っ取られますよ。心と魂を。

妄想でしょうか。もうそうかも。

なりきる、演じる、一人二役

人は世界という鏡で自分の姿を見て、世界という筈（こだま）で自分の声を聞いている。

そんな気がします。

人は他者になりきっている、他者を演じている、それも一人二役で。

それは、人が他者になれないからに他なりません。なっかつもりや、なっかつ振りなら
できます。

二十四時間、他者に付き添ってもらうわけにはいきません。自分の思いや意識や心や
夢の中に他者を招待するわけにもまいりません。

外にいる（ある）他者は、自分の中に映す・写すしかないのです。移すことはできま
せん。

＊

他者とは自分の中に映ったり写ったものであり、自分の外にある外ではありません。
瞳や鏡や水面やガラスの表面に映った像や影としての自分と似ています。

要するに、他者とはもうひとりの「わたし・ぼく・自分」なのです。それになりきり、
演じることが人として生きることではないでしょうか。

人の外にある外

他者（人とは限りません、世界とか森羅万象のことです）とは、「人の外にある」「外」
です。「外にある」とは、人と離れてある、またはいるという意味です。「外」とは、人の
思いどおりにならないという意味です。

人は「人の外にある外」を遠隔操作するしかないのですが、痒いところを長靴の上か
ら搔くとか、痒いところを長い孫の手で搔くようなもので、じっさいに搔いているわけ
ではないので、搔いても搔いても搔けていないと言えます。

搔いたつもりになる、じっさいに搔いていると自分に言い聞かせる、搔いた振りを演
じる。これしか方法がありません。

＊

本を読む、文章を書く、テレビの番組やネット上の動画を見る、番組や動画をつくる、楽曲を聞く、楽曲をつくる。要するに作業中。

鑑賞や閲覧をする場合も、作品をつくる場合も、相手にしているのは「人の外にある外」です。

自分の外にあって、言葉であれば言葉独自の文法にしたがって書かれ読まれる、映像であれば映像独自の文法にしたがってつくり見られる、音声と旋律であれば音声と旋律独自の文法にしたがってつくり聞かれる。

そうさせるのは人ですが、だからと言って人が専有し、人の思いどおりになるわけはありません。

文字も文字列も、映像も、音声も、いったん発せられると人から離れてしまいます。それを発した人とは関係なく存在するのです。

つまり、人の外にあって自立しているのです。だから、機械や AI に書かせたり、読ませたり、つくらせたり、見させたり、聞かせたりできます。

人の枠の外にあり、人の思惑から外れたところにあるというのは、そういう状況を指します。

＊

作品や商品や製品は、人の外にある外だから、他の人と共有できます。いっしょに読んだり聞いたり見たり、消費したり利用したり使用したりできるという意味です。

でも、その他の人もまた、自分と同じく「人の外にある外」を相手にしていることを

忘れてはなりません。

自分の読んだり見たり聞いているものを、他の人が同じように読んだり見たり見いたりしていることはまずないでしょう。

自分の消費したり利用したり使用するものを、他の人が同じように消費したり利用したり使用することもまずないでしょう。

別人だからです。その意味は、他の人も他者です。おたがいさまだということです。

はずれる、ずれる

人がつねに「二人である」というのは、物理的な意味ではなく、思いとか意識についての話です。

現実つまり物理的には「人は一人である」、そして思いとか意識においてはつねに自分を見ている目があり、その意味で「人は二人である」。これは人としての枠でしょう。

現実の枠、そして思いや意識という枠から外れて生きることはできません。外れたとたんに関人ではなくなります。

＊

「はずれる」は「外れる」と書きますが、なるほどと感心してしまいます。

「外へそれて出る・はみ出る、はまったものが外へぬけ出る・掛けたものが取れて離れる、届かない、その中へ加わらない・漏れる、そむく・たがう、基準からかけ離れる、狙いとはちがう結果になる・当たらない」(広辞苑)

「はずれる」の古語は「はづる」と辞書にありますが、これもまた興味深いです。

07/10 「はづる・はく」が二人い

「はづる・外る」は「外へ出る・はみ出る・外れる」とあります (Weblio 国語辞典)。

＊

おもわくははずれるもの。わくはずれるもの。
(拙文「げん・限 (うつせみのたわごと -8-)」より)

思惑は外れるもの。枠はずれるもの。

人は人としての枠から「外れる」ことはできそうもありません。でも、枠の中において「ずれる」ことならできるのではないのでしょうか。

じっさいには人が学んだり考える意欲を失ったというよりも、敵や競争相手 (敵もライバルも人です) を打ち負かすために、機械や AI に思考を委託しているように私には見えます。

(拙文「鏡、境、界」より)

いま、人の思惑が外れてきているように思えてなりません。「人の外にある外」、つまり他者をめぐっての思惑が外れてきているという意味です。

他者が世界や宇宙や森羅万象であるならいいです。致し方ないです。

でも、人が自分でつくった他者、つまり作品や商品や製品をめぐっての思惑が外れてきているのであれば、それは愚かといしか言いようがないでしょう。

その思惑だけは外れてほしくありません。とはいっても、そもそも自分でつくったさいにどんな思惑をいだいていたのか。それを把握することは至難の業だという気がします。

人がつくったものは「人の外の外である」からです。つまり、人の思惑を外れて存在しているのです。

＊

おそらく人は言葉を持つことによって、他の生きものから外れたにちがいありません。生を逸脱してしまったのです。枠からずれてしまったのです。

とほうもなく、ずれてしまった。

言葉を持ってしまった以上、ずれを直すとか元に戻すなんて現実的ではありません。

でも、枠をずらすことならできるのではないのでしょうか。ずれてしまった枠をさらにずらすのです。

意識と心の中で人が二人であるなら、枠から外に出ることはかなわなくても、枠の中にいて枠をずらすことができる。そんな気がします。

枠の中で枠をずらすさいに用いる手段は、広義の言葉（話し言葉・書き言葉つまり文字・映像・楽曲）しかなさそうです。言葉もまた「人の外にある外」に他なりません、だからつかえないという理由にはならないと思います。

#鏡# 意識# 心# AI# 人工知能# 他者# 客観# 主観# 本# 文字# 音楽# 映像# 作品# 商品# 製品# スマホ

04/17 げん・Gen (うつせみのたわごと-10-)

＊

げん・Gen (うつせみのたわごと -10-)

星野廉

2023年4月17日 07:37

げん——。きになることば。からからきた、ことば。このしまじまの、にしどなりにある、りくのはしと、そのむこうにあるおおきなりく。そこより、ずっとはるかかなたにある、りく。さまざまなことばがあるなかで、Gen (※ドイツ語) とつづり、げんとよむことのはがある。もっとも、げーんと、のぼして、くちにするのが、ただしいらしい。いのちのもとのこと。

＊

いきものをこまかく、さらにこまかく、わかていくと、げんとよばれるつぶがあるという。いきものを、きにたとえてみよう。みきがあり、おおきなえだがあり、ちいさなえだへとわかれていく。そのみきにも、えだにも、えだのさきにも、はっばにも、はなにも、みにも、ちいさなつぶがやどる。うちのなかで、はっている、おおきなねにも、ちいさなねにも、こまかなつぶがやどる。それぞれのつぶたちは、ほぼおなじ、げんからなりたっている。そんな、はなし。

＊

げん・Gen。げんかい・Gen 界。そこでは、わかれる、ふえる、うつす、つたわる、わたす、うむ、うまれる、でる、あらわれる、わく、がおこる。しくみは、うつすにあるという。うつしをつくる。そっくりをつくる。うつしまちがうことも、あるらしい。そんな、はなし。

＊

げんは、いのちのもと。ちいさなちいさな、めにみえないほどの、かすかなつぶをおもいうかべてみよう。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち、みなもと。そして、もと。幻界、言界、現界、限界、原界、そしてGen界。そのあわいはあわい。どれもが、ひとがつくった、ものがたり。ひとがおもいえがいた、こと、もの、さま。そとにありながら、うちにある。それがおもい。かたり。ことのはをもちいた、はなし。おそらく、ひとにしるか、つうじない、はなし。ねこには、つうじそうもない。かといって、ひとがえらいわけではないのは、いうまでもない。ひとは、わけるだけ。sonだけ。

＊

ひとはわける。わけてわかったと、おもいこむ。これが、ひとのくせ。くせもの。いのちさえも、ことこまかにわけ、わかりはじめたと、おもいこんでいる。いのちのつぶを、かぞえ、ときほぐし、よむ。いつか、すべてがわかると、しんじている。いのちさえも。ことさえも。ものさえも。さませも。このほしさえも。このほしの、そとさえも。

＊

わけるのは、ひとがちいさいからに、ほかならない。ちいさいから、わける。おおきなものは、みえない。おのれがちいさいから、みえないだけ。おのれがちいさいから、わけるだけ。それだけなのに、おもいちがいをしている。これを、かしこいとみるか、おろかとみるか。ひとそれぞれ。つねに、おごりたかぶるものもいれば、おそれつつしみ、かしこまるたちのものもいる。ひとそれぞれ。ひとのたちは、ときによる。ときとともに、かわることもある。おおむね、おろかで、おごりたかぶる。それが、ひと。くせ。たち。すじ。そうしたもので、げんがきめるのだという。そんな、はなしもある。

＊

ちいさくしてみて、みえたとおもいこむ。おのれがおおきいとおもえば、ちいさなものを、あなどることができる。みくびることができる。みくだす。みきわめたと、おもいこむ。そのくせ、おおくのひとは、いまだに、かみをしんじるといふ。にまいじた。うそつき。あしき、くせ。こころのうちでは、このほしをおさめる、おおかみだとおもっているくせに。おもいと、おこないが、おおきくずれている。くせもの。

＊

いのちのつぶのものがたりに、みみをかたむけてみよう。あくまでも、かたりだとい

うことを、わすれないようにして。きくところによると、いのちのつぶは、ながいながいおびを、ねじったときかたちをしているとか。そのしくみのかなめは、うつす、うつる、ふえる、つたえる、らしい。ない、から、ある、ほうまれない。とどのつまりは、あるものを、うつすのが、うむ、うまれる、ということか。おや、つまり、ちちははから、こどもへと、うつしたものが、つたわる、ということか。ややこしい。わずらわしい。

*

すなおに、なるほどうんうんとうなずけない、へそまがり、つむじまがり。このたわごとをつづる、あほも、そのひとり。おつむがまがっているから、いたしかたなし。かたなし。よくできたはなしだと、よくできたものがたりだと、にがわらいするのが、せいぜい。とはいえ、いのちのすじの、しくみをときほぐすわざ、などといわれれば、かしこまってしまう。やまいをなおし、ゆたかなみのりを、てにするすべ、などといわれれば、おそれいってしまう。ねじれにねじれたしくみを、ほぐしまくる。どんなに、ときほぐしたところで、ほぐしきれないたぐいはなしとは、おもえないのだが。ひと、それぞれ。

*

なおしたい。なおりたい。ながくいかせたい。ながくいきたい。もっとふやしたい。もっとふえたい。もっとさかえたい。そのためだけではないが、さかりたい。ひとには、つねにさかるといふ、めずらしいくせがある。ほかのいきものにはみられない、すじがある。このほしには、もううけいれないほどのかずの、ひとがいる。それなのに、まだふえつづけている。よいわるいのはなしではない。おそらく。

*

ふえる。ふやしたい。もっと、もちたい。もっと、ゆたかになりたい。さきに、ゆたかになったものたちのあとをおう、あらたにさかえつつあるくにぐに、ひとたちがいる。それにしても、ひとはふえすぎた。このほしにあるものが、すべてのひとたちに、ゆきとどかない。まずしきものと、とめるものとのさが、ひらきすぎた。このほしにあるくにぐにから、ひとがあつまり、はなしあう。はなしあいは、まとまらない。だれもが、おのれとおのれのなかまや、はらからが、かわいい。いとおいしい。こたえはでない。

*

まぼろしがふえる、ことのはもふえる、うつつもふえる、さかいめもふえる、みなも

ともふえる。そして、ふえるのつづきのときがきた、という。幻界、言界、現界、限界、原界、そして、Gen界。どれもが、にている。ほぼおなじ。ふえる、ます、うむ、でる、わく。そうした、うごきとゆらぎが、あるのみ。おおいなる、うごきのくさり。おおいなる、ゆらぎのわ。

＊

ひとは、かわす。ものものをかわすが、はじまりだったとか。いまでは、もの、ひと、はたらきを、かわす。えっ、このみ。とっ、れいど。まー、けつと。からことばなり。ひとのよは、かわすにみちている。かわすのもとにあるのは、おもみ、ねうち、あたい。おもみ、しますか。ねえ、うち、きらいなの。あたい、きらいなの。それでは、すまない。

＊

おもみは、おもうからきたというはなしがある。と、じびきは、いう。おもい、おもみ。どう、つながるのか。また、おも、つまり、つらからきたという、はなしもある。つらは、かわ。ねこのまなこのごとくかわる、かりそめのかおのさま、いいかえれば、かわり。ぼけること。かおにつける、おもてがた。からことばで、ますくというとか。かの、つたんかめんの、ですますくの、ますくとおなじです。いずれにせよ、なにかのかわりになにかでないものをもちいる、につうじる。かわりのしくみに、にている。おもい、おもみ。おもしろし。これが、でまかせとすれば、おどろくべき、でたらめ。おどろくべき、であい。おどろくべき、たまたま。おそるべし。

＊

すべては、かわりが、かわりのさししめすものの、かわりであることから、くる。なにかと、そのかわりとのあいだには、なんのかわりもない。きまぐれ。なにかがありそうにみえるとしたら、まぐれ。きまま。ままならぬ。おもみ、あたい、ねうちも、おなじ。ままならぬ。ひとは、もてあそばれるだけ。

＊

かわすと、ふやすは、ちかい。ちかくみえる、というべきか。からみあっている、ともいえそう。ふやしたい。もっともっと、ふやしたい。あれがほしい。これがほしい。そのためには、おもみのかわり、つまり、かねがいる。かね。まね。まに。まねまねまね、まね。まねすんな。まにまに、まに。まにうけるな。かわりゆえに、まにうけるなといわれ

でも、かねはほしい。とみを、えたい。だれしも、そうおもう。このあほも、そうおもう。おもみはおもい。かねなしでは、くえない。うえじにするだけ。ねこにも、くわせられない。

＊

もの、ひと、はたらきのあたい。おもみ。おもみは、ひとのおもいにある。おもいはかわる。めまぐるしく、かわる。ひとのよには、おびただしいかずの、いちぼがある。というか、つくられた。できちゃったものは、しかたがない。かねのおもみ。とみのおもみ。なにかのかわりのもののおもみ。そのおもみとながれが、くるう。もとのしくみが、きまぐれで、きままだから、いたしかたなし。いま、はじまったことではない。

＊

くるいは、ひとが、かわしはじめたときに、はじまった。ふえるはずが、へる。へるはずが、ふえる。ふえるふえるが、へるへる。ご一つへる。お一まいがっ。からことばの、ののしりなり。ふえるとへるの、あわいが、ますますあわくなってきたかのごとくみえる。そう、みえるだけ。みえるのは、ひとだけ。かわり、にせもの、おもてがたが、みだれまう。ひとがつくったものが、ひとのてからはなれて、まい、さまよう。とぼっちりは、ほかのいきものにも、およぶ。あなどれない。

＊

おもみは、あわい。おもみは、はかない。おもみは、あてにならない。なぜなら、おもみはおもいだから。おもいえがくことしか、できないものだから。えにかいたもち、だから。それも、よってたかって、みんながかってに、ふでをだして、かきかえるもちだから。ほしい。もっとほしい。ふやしたい。もっとふやしたい。おもみのしくみにとりつかれた、ひと。いまでは、そのしくみが、ひとのいとなみすべての、もとにある。そのしくみにもてあそばれて、ひとはうごいている。ひとがつくった、ありとあらゆる、もの、こと、さま、はたらきを、うごかしている。ああ、なんたるおもいちがい。もとにもどせない、おおちゃんぽ。

＊

ふえるはず。おおきくなるはず。そういうしくみだったはずなのに、そうはなっていない。そんなしくみをつくってしまった。これもまた、しっぽのないさるからひとになっ

たときの、あたまのなかでおこったという、ずれのせいなのか。へだたったものをちかくにみせる、しくみ。なにかのかわりになにかでないものもちいる、かわりのしくみ。ふえるはずのものがふえたりへったりする、おもみのしくみ。これらは、ひとがつくったというより、なぜか、てにしてしまった、みにそなわってしまった、とかんがえるべきなのか。もしも、そうであれば、ひくにひかれず、もとにはもどれない。ひとのくせ。さが。さかなに、おかをあるけど、いうのとおなじ。どうしようもない。

*

いま、おおごとなのが、かわり、にせもの、おもてがたの、おおぐるい。だれかが、なにかに、しくんだらしい。どくまんじゅう。さぶ、ぷらい、む。からことばなり。おかわりをかえせないものに、おかわりをかした。もとは、そんだけー。どくまんじゅう。どくはまわる。ひとのよを、まわる。うつる。つたわる。かけめぐる。きえそうな、きざしもない。おもみがおもいのうちにあるのなら、きえるとしんじ、ねんじれば、いいのか。どうも、そうはいかないらしい。

*

おもみとかねをめぐる、こざかしげなものがたりの、かたりても、かたなし。おもみとかねについて、うまくのべるものにあたえられる、のべるなんとかいう、かねでできたまるいいたと、それにそえられたおおがねをもらったものたちも、このどくまんじゅうには、てをやっているらしい。それにしても、のべるなんとかを、そういうひとたちにさずけるとは、うさんくさい、はなしではないか。こうなってしまうえば、のべてもしかたなし。のべる、しょうがない。のべるしょうなんて、いらぬ。

*

ふやす。うつす。そっくりをつくる。ものがほしいときには、かみのかねをする。するとは、そっくりなうつしをつくることなり。すってすってすりまくり、どくまんじゅうたいじ。こうかなし。どくが、ほかのものに、うつってしまったらしい。ぼくちで、すったのとおなじ。すったもんだ。

*

かたや、いのちがほしいときには、Genというつぶのうつしをつくる。からだから、きりはなし、かみをきどった、ひとのてでつくる。うつし、うつし、うつしまくる。そのさ

まは、うつくしくない。おそれをしらぬしわざ。あさましい。ゆくすえが、どうなるかは、まだわからない。おそろしいやまいの、うつしごっこに、ならないことを、いのるのみ。

＊

かねと Gen。いずれも、おかわりであり、うつしである。それが、ともに、ふえる。はんぱじゃなく、ふえる。それが Gen 界。おかわりのおかわりのおかわり——。うつしのうつしのうつし——。やっぱり、にている。にすぎ。げきに。こくじ。おかわりのうつし。うつしのおかわり。そんなんが、どんどんふえていく、ひとのよ、そして、このほし。あやし。こわし。あやうし。

＊

Gen。ふえる。うまれる。いかがわしいかたりは、もういない。おもみのしくみも、もういない。なにしろ、たくらんたはずが、たくらみどおりに、ことがはこぼない、ときている。あやまったに、ちがいない。つくりそこねたに、ちがいない。なにかとなにかをかわす。なにかをあたえて、かわりに、なにかをもらう。そんだけーが、そんだけーでは、すんでいないらしい。このあやしいうごきは、なにかににている。なにかのかわりである、ことのはの、あやしいうごきに、よくにている。かぎは、やっぱり、かわるにあるのではなからうか。かわりにあるのではなからうか。かわるはわかる。ひとは、そうしんじているみたいだが、わかっていないのがまことらしい。

＊

ひとは、うむ、うまれる、ふやす、ふえる、のなぞをといたと、おもいちがいをしているのでは、なからうか。かわるがわかっていないのとおなじく、ふやすもうむも、わかっていないのでは、なからうか。Gen をめぐるかたりには、しろうとのめからみても、あぶなっかしいところがある。とりわけ、こわいのが、Gen を、ひとのかってにあわせて、くみかえるというはなし。たくらみが、うらめにでないと、だれがいいきれよう。ひとつまちがええ、このほしのいのちがあやうい。すべてのいきものどうしばかりか、いきしていないものたちのあわいの、つりあいぐるいかねない。たとえば、だしぬけにくさきがかれ、おおくのいきものがやまいにたおれ、ひいては、なつにおおゆきがふり、ふゆにむしのむれがたはたをおそいかねない。また、ひとのからだところにくるいがおこらないと、だれがいいきれのか。

＊

かねとおもみをふやす、かわすいちばのしくみは、あきらかに、おおちゃんぽ。これもはや、ばればれのはなしではないか。そうやって、かわるがわる、あらわれる、かたりのかずかず。ふえるのは、そんなかたりだけか。いかにも、ずれたひとのやることらしい。せめて、ほかのいきものたちや、このほしまで、ずらさないでほしい。

＊

このほしにくらすいきものは、かわすことでいきている。ふえている。きえることもある。おおきくなる。ちいさくなることもある。ひとは、そのしくみをとくかぎとして、Gen というのはなしをつくり、かたっている。かたりつくしたわけではない。それはさておき、ひとは、かわすことをおぼえた。なにかのかわりかわすことをおぼえた。おもみをかわすことをおぼえた、ともいうべきなのかもしれない。そのうらには、ふやしたい、もっとほしい、さらにおおきくしたいという、おもいおもいがあるとおもえる。

＊

ひとは、かわすというしくみを、みにつけた。おそらく、しらずしらずにみにつけた。わけもわからず、みにつけた。いまだに、そのしくみをしらずにいる。なんども、そのしくみの、とちくるいにてあいながら、またもや、くるいのなかにいる。いま、おそっている、とちくるいはおおきい。ふやせふやせ、おおきくしろおおきくしろという、かけごえのなかで、おおきくなったのは、くるいとずれだけ。あたまのなかに、ずれがおきてから、くるいつづけているひとが、またくるい、ずれた。これ、とちくるった、はずれものの、あほのたわごとなり。いうまでもなく、しんじるにあたいせず。

＊

それにしても、おもみ、つまり、あたいをかわすと、ふやすとは、もともと、はなしがちがうはず。おもみをかわすに、まどをしぼろう。おもみをかわすしくみは、おそらく、ひとのおもいや、おもわくでは、はかれないほどのおもみを、そなえているのではないだろうか。いいかえると、ひとには、にがおもすぎる。おもうにも、おもいにも、おもみをおもうには、にがおもすぎる。だから、はかれない。わからない。なにかのかわりになにかでないものを持ちいるという、かわりのしくみは、ひとにわからないようにできている。それとおなじく、おもみのしくみは、ひとには、はかれないようにできているのではないか。

＊

てみじかにいうなら、おもいにおもいはわからない、となる。だめおしに、からことばのたすけをかりてみよう。思い、想い、念い、憶い、重い、面い、主い、母いは、図れない、計れない、測れない、量れない、別れない、謀れない、諮れない。とにかく、にはおもい。ひとには、おもすぎる。はかれない。だから、くるう、ずれるしかない。

＊

Gen 界、すなわち、ふえるをめぐってつづることのはたちが、こんなにふえるとはおもいもしなかった。つづるかきものなかみを、つづることのはがまねて、ふえたのにちがいない。ことばは、かしこい。おそれいる。とにかくにも、こんなにも、ながくなった、たわごと。もうしわけなし。

◆

以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」(うつせみのたわごと-5-)
- = 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」(うつせみのたわごと-6-)
- = 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」(うつせみのたわごと-7-)
- = 4) 「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」(うつせみのたわごと-8-)
- = 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」(うつせみのたわごと-9-)
- = 6) 「げん・Gen(※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」
- = 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見(げん・けん)・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
- = 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
- = 9) 「げん・滅・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足で

きない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・○・輪・和・わ」

= 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



「うつせみのたわごと-10-」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

*

今回のテーマは、「ふえる・げん・Gen (※ドイツ語で「遺伝子」)」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる「Gen界」です。

小さな命の単位が転写という仕組みでどんどん増えていく。転写しそこなう場合もある。死滅する単位もある。単位の集合体である生体は、単位を生殖や増殖という仕組みで、新たな生体を生み出していく。そうやって、写す、移る、増える、伝わる、渡す、という一連の動きが生起する。

ヒトは、その生起を出来事としてではなく、物語としてとらえるしかない。その物語

を生成するために必要なのは、分けるという作業だ。分けるのは、ヒトが小さいからにほかならない。自分より小さく分けて分かったとする。

Gen 界における、もうひとつの運動は、「交わす」ことである。「ものを交わす」から、「価値を交わす」へとヒトは「交わす」を変化させた。価値という分けられず分からないものに、ヒトはもてあそばれ、振り回されている。それが経済である。「増える・増やす」「交わす」の根底には、ヒトの欲望、とりわけ物欲がある。決して逃れることができない、根源的な欲がある。

この欲望には切りがない。「ほしい」「したい」だけが目的化して回りつづけ、ヒトは振り回されつづけるが、それもいつかは止まるだろう。

以上のような話です。

標準的な表記に直したキーワードは、「おもい・思い・想い・重い」「重み」「値」「値打ち」「かね・金」「はかる・量る・測る・計る・諮る・謀る」「サブプライム」「いちば・市場」です。

直接書かなかったキーワードは、「ゲノム解読」「遺伝子工学」「遺伝子組み換え」「バイオテクノロジー」「クローン」「ES細胞＝胚性幹細胞研究」「ノーベル経済学賞」「金融工学」「CDO」「大不況」「資本主義」「市場経済」「造幣」「財政投融资」「投資」「投機」「博打」「株式」「ジョン・メイナード・ケインズ」「交換」「貨幣」「カール・マルクス」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.11 うつせみのたわごと-10-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

#日本語 # 言葉 # 大和言葉# 和語 # 漢語 # 自分語 # 遺伝子 # 資本主義 # 交換 # 貨幣

04/18 鏡「面」画「面」顔「面」

＊

鏡「面」画「面」顔「面」

星野廉

2023年4月18日 08:05

和語ではなく、漢字、つまり大昔の中国語の文字としての「鏡」が「境」と関連しているらしいという話は、想像力をかき立ててくれます。

鏡は境。鏡は「さかい」。さらに界も付けくわえましょう。

鏡、境、界。

鏡を「きょう」という音読みではなく（つまりかつての中国語の音ではなく）、勝手に訓読みして「さかい」と読んだときのイメージは魅力的です。

さかい、きわ、あいだ、はざま、わけめ、わかれめ、しきり。

(拙文「鏡、境、界」より)

目次

薄くて枠がある膜と面

奥行きと深さをこしらえる

自分に似たものをつくる、自分のつくったものに似る

膜と面という境

増える、増やす

こっちにいながら、あっちへ行く、あっちに入る

魔法ではなくて手品

私たちが相手にしているのは、実物や現物ではなく別物

一人でいながら、同時に二人になりたい

自分の別物との遭遇

薄くて枠がある膜と面

相手の瞳の中に映った自分の姿、鏡の中に映った自分の姿。こうした姿を見たとき、人は「ふたり」を感じるような気がします。

誰が二人なのかと言うと、自分が二人だというのは現実の世界から見た考えです。

思いの中では「誰が二人なのか」はあまり意識していない気がします。ただ「ふたり」「二人いる」「二人である」という感じです。

そもそも不明なのです。その「ふたり」感は体感であり印象であって、それを言葉にすると「ふたり」なのでしょう。

現実の文法にしたがうと、「(私・自分が) 二人いる」「(私・自分) 二人である」となるのでしょう。

現実では知識がささやきます。「私・自分が二人いるように見える」「私・自分が二人であるように見える」のだ、と。

奥行きと深さをこしらえる

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが。それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

ありもしないもの、あってほしいもの、あると想像しているもの、あるにちがいないもの、あるはずのもの、なければ困るもの、そうしたものをこしらえている気がします。

でっちあげるとか作るとか捏造するという言い方もできるでしょうが、とりあえず「こしらえる」にしておきます。

自分に似たものをつくる、自分のつくったものに似る

姿や像や影を映す、この薄い膜と面には枠があります。無限に広がっているわけではありません。枠は、姿や像や像をおさめるものにとってぜったいに必要な条件だという気がします。

つくられた影には特徴があります。枠があるのです。フレームとも言います。写真や映画には枠があります。みなさんがこの文を読んでいる端末にもスクリーンとか画面という枠があります。枠は限度でもあります。

映画や動画であれば時間的な枠もあります。制限時間というか作品の時間です。始まりがあって終わりがあるということになります。

つくられた影には空間的な枠も時間的な枠もあると言えそうです。
(拙文「見るために人がつくった「影」」より)

人がつくった影（比喻です）である、写真や映画や動画や音楽には「収めるための枠」があります。空間的な枠（フレーム）だけでなく、始まりがあって終わりがあるのも枠です。

＊

人のつくるものは、人に似ている。

人は、意識的にまたは無意識に、自分や自分の中にあるものに似せてものをつくっている。

さらに人は、意識的にまたは無意識に、自分のつくったものに似てくる。似る、まねる、まねぶ、まなぶ。

以前からそう思っているのですが、人は大昔に瞳や鏡や水面で体験した、不思議さ、不気味さ、恐怖、喜び、楽しさのまじった体感に嗜癖（しへき）し依存しているのではないのでしょうか。はまっていて離れられないし止められないという意味です。

自分の似姿を増やしていく、自分を増やしていく、自分が増えていく、自分に似たもの

が増えていく——意識的にまたは無意識に、そう望んでいたたり、そうした方向にむかっているのではないのでしょうか。

大切なことは、自分が変わっていくことです。意識しているのか、意識していない、気づいている、気づいていない、に関係なくです。

膜と面という境

面・めん・おも・おもて、つら
膜・まく、幕、漠、貌

水面、川面、湖面、鏡面、氷面
平面、地面、壁面
帳面、書面、画面、図面、文面

網膜、銀幕、鼓膜、粘膜、皮膜

顔面、お面、仮面、素面（すめん・しらふ）、覆面

表面、内面（ないめん・うちづら）、外面（がいめん・そとづら）、正面（しょうめん・まとも）、側面、背面、裏面、前面、断面、半面、反面、他面

場面、局面
額面
面子、体面
一面、二面、多面
面影

増える、増やす

面や膜の薄さに、ふちやへりやはしに通じる二面性を感じます。

二面性には容易に多面性に転じる気配があります。何かが増えていくときには、そこに「二つに分かれる」を繰り返していくイメージを感じるからかもしれません。

英語に見られる「bi・二、両、双、重、複、復」とそっくりなもう一つの bi・bio- に「生命、生物、生活、生」がありますが、強引にくっつけたい気持ちになります。

要するに増える・殖えるというイメージです。「二つに分かれる」を繰り返さず、つまり、bi・bi-、倍倍に増えていく・増やしていくイメージなのです。

何が倍々に増えていき、何を倍々に増やしていくのかというと、自分であり、自分に似たものでしょう。

ずれながら増えるのです。ずれが増えていくのです。

瞳を覗きこんだとき、水面に屈んだとき、鏡面を見たときの体験を追っているかのようです。

こっちにいながら、あっちへ行く、あっちに入る

【影・姿・像】：うつる、映る、写る

水面、川面、湖面、鏡面

地面、壁面

【絵・像・音・声・文字】：うつす、映す、写す、移す

帳面、書面、画面、図面、文面

網膜、銀幕、鼓膜、粘膜

【思い・気持ち・心・魂】：うつる、うつす、隠れる、隠す

顔面、お面、仮面、面影、幻影

表面、内面、外面、正面、側面、背面、裏面

【場所・視点】：みる、見る、観る、覧る

場面、局面、正面、側面、一面、二面、多面

【縄張り・領土・尊厳・闘争・戦】：たもつ、とりつくろう、まもる

面子、体面

*

絵、書物、映画、ラジオ、レコード、電報、電話、テレビ、パソコン、スマホ——どれも薄くてぺらぺらな面であり膜を利用した仕組みです。

どれも「こっちにいながら、あっちへ行く」「こっちにいながら、あっちに入る」ためのもの、またはそうした気持ちを満足させるためにつくられたのではないのでしょうか。

魔法ではなくて手品

現実世界では一人でしかない人が、「二人やそれ以上になる」、「こっちにいながら、あっちへ行く」、「こっちにいながら、あっちに入る」ためには魔法ではなく手品・トリック・仕組み・仕掛けが必要なはずで。

それは「Aの代わりにAとは別のもので済ませる」ではないのでしょうか。

厚いものの代わりに薄いもので済みます。
深いものの代わりに浅いもので済みます。
太いものの代わりに細いもので済みます。
大きいものかわりに小さいもので済みます。
重いものの代わりに軽いもので済みます。
長いものの代わりに短いもので済みます。
人間の代わりに人間でないもので済みます。
人間でないものに代わりに人間のようなもので済みます。
遠いものの代わりに近いもので済みます。
(拙文「文字や文章や書物を眺める」より)

上の引用文に挙げた「何か」の代わりに、「その何かとは別のもの」で済ませる」の結果が、たとえば、絵、書物、映画、ラジオ、レコード、電報、電話、テレビ、パソコン、スマホ、仮想現実、人工○○です。

私たちが相手にしているのは、実物や現物ではなく別物

そうしたものは魔法ではありません。手品なのです。ちゃんとタネのある手品なのです。

そのタネとは、「実物や現物の代わりに別物で済ます、別物をつかう」です。

どうしてこんなことをするのかと言えば、実物や現物を相手にするのが不可能だからです。手が届かなかつたり、知覚できないという意味です。つまり物理的、あるいは生物学的な限界が人間にはあるからです。

そうなると、置き換える、または別物で済ますしか方法がありません。他に方法がありますか？

私たちは「別物としての世界」に住んでいます。

＊

大切なことなので繰り返します。

絵、書物、映画、ラジオ、レコード、電報、電話、テレビ、パソコン、スマホ、仮想現実、人工〇〇で、私たちが相手にしているのは、別物なのです。実物や現物の代用物に他なりません。

私は人に魔法ができるとは考えられません。ちゃんとタネのある手品ならできます。

そのタネとは、「代わりに」です。

一人でいながら、同時に二人になりたい

私は人に魔法ができるとは考えられません。

人の世界は薄くぺらぺらなのです。厚みや奥行きや深さをこしらえて、そう見せたり聞こえたりしているだけだと考えています。

それだけでは足りないらしく、そういうふうには皮膚や鼻や舌の粘膜で感じられたり、そんな気配を全身で受けとめる仕掛けをつくろうとしているようです。

人は、一人でいながら、同時に二人になりたいのではないのでしょうか。

人工〇〇になりたい――。

この彼岸への悲願は、「二人になりたい」ではないのでしょうか。

分身という言葉をつかってもいいです。変身でもいいでしょう。でも、自分なのです。自分でないといけないのです。だから、二人になっても自分でなければなりません。

誰かに乗っ取られたら、自分でなくなります。「自分であること」は死守しなければならないのです。

(拙文「人工〇〇になりたい」より)

自分の別物との遭遇

もし、一人でいながら二人になれるとしたら、それも魔法ではないと思います。ちゃんとタネのある手品であるはずです。

タネは大昔の瞳と水面と鏡の体験にあったのではないのでしょうか。

その体験とは、実物や現物ではなく別物（映った影・像）――他でもない自分の別物との遭遇です。

たぶん、そのときに、人は人になったのです。人は晴れて「別物としての世界」の住人になったという意味です。

＊

自分の別物との遭遇ほど人にとって衝撃的な体験はなかっただろうと想像できます。その衝撃は個人レベルで、幼少期における初めての鏡体験としていまも繰り返されているのでしょう。

ただし、「別物としての世界」の住人である生活にどっぷり浸かっている、いまの人間にはその衝撃は二度と味わえない体感になっているのかもしれない。

あたりを見ましてみてください。別物（映ったものや写し、つまり大量生産された複製である製品や商品や作品、具体的には文字や映像や音声や物のことです）でないものがありますか？

というか、そもそも、それ以前にどれもが知覚された別物なのです。

#増える # 遠近法 # 複製 # 鏡 # 写真 # 映画 # 言葉 # 音楽 # 動画 # 枠 # フレーム
書物 # 物語

04/19 げん・眼（うつせみのたわごと-11-）

＊

げん・眼（うつせみのたわごと -11-）

星野廉

2023年4月19日 07:35

げん——。きになることば。からからきた、ことば。からことばが、このくにのことばとであい、まじったときに、とりわけ、おおきなはたらきをしたのが、もじである。このくにのもじのしくみは、からからつたわった、まなど、まなをくずした、かなからなる。まなかなである。まなは、もののかたちから、とられたものだという。

＊

まなには、ひとつのもじで、なにかをあらわすものもあれば、いくつかのかたちが、あわさってできあがっているものもある。かたちとなかみをあらわすところと、おとだけをあらわすところに、わかれているものもある。まなにおいては、まなこをはたらかせなければならない。すなわち、よむ、みる、みわけることが、かぎとなる。

＊

まなにおいては、かたちがなにかをあらわすとはいえ、みておとをだすこと、すなわち、こえをだしてよむことも、かかせない。まなには、いくとおりかのよみがあるものがおおい。それが、まなにあつみとおもみをあたえている。よみには、からことばによるものと、やまとことばによるものがある。ずらしてみよう。眼、げん、がん、め、まなこ。目、もく、ぼく、ま、め。見、けん、げん、み。じびきをたよりに、ちょっと、あそんでみよう。ま、み、む、め、も。目、見、眸、眼、膜。

＊

ひとはまなこをもちいて、みる。ほかのいきものにくらべて、みるのが、いきるか

しぬかをわけるときえ、いわれている。それほど、まなこのやくめは、おおきらしい。とはいうものの、みるを、ずらしてみると、みるが、まなこのはたらきだけを、しめすものではないことがわかる。みる、見る、視る、観る、診る、看る。ふるいいいかたで、みる、回る、廻る、というのもあるという。

＊

みるのもちいかたを、みてみよう。みゃくをみる。やまいにかかったひとをみる。ばかをみる。なきをみる。なりゆきをみる。ひとをみるめ。あまくみる。あかんぼうをみる。けがをしたひとをつつききりで、みる。めんどろをみる。ときをみる。ゆめをみる。このように、からだでなにかをうけとめることを、みるということばで、あらわすことができる。

＊

さきほど、みてみよう、とかいたが、なになにしてみる、のみるも、ためしになになにするかといいたいときに、もちいられると、じびきにある。じびきをうのみにはできないが、そういうみかたもあるらしい。ちなみに、たったいま、かいた、みかた、の、みは、かんがえるということか。つまり、みかたとは、かんがえかたとも、とれる。これ、でまかせ。れっと・みー・しー。えーっと……。でも、いえてるかもしれない。

＊

たしかにややこしいが、みるということのはの、あつみとおもみは、おもしろい。いろいろにとれるから、おもしろい。ことばずきのものには、こころがひきつけられる、おもいがする。みるということのはの、あつみとおもみが、みるという、いとなみのあつみとおもみと、かさなるものなのか。

＊

ひとが、まぼろしをみて、ことのはをとおしてものやことやさまをみて、うつつのなかでゆめをみて、ふちでであうなにものかをみて、おのれやものごとのみなもとにめをむけ、このよをみきわめたいとのぞむのならば、ひとは、つねにみている、といえるだろう。いきること、すなわち、みることと、いえるだろう。みるためには、ひかりがいる。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界は、ひかりにみちたばである、といえよう。

＊

わすれてならないことがある。すべてのひとが、めがみえるわけではない。おそらく、
ころならずも、めしいとよばれるひとたちがいる。やみのなかにおいて、まったくみえ
ないばかりとは、かぎらない。みえないといわれるひとのなかにも、ぼんやりみえる、か
すかにみえる、あかるいくらいはわかるという、こい、うすいがあるという。みみのと
おい、このあほには、きこえにたとえて、その、こい、うすいが、わかるきがする。みえ
るひと、きこえるひとには、そのあわいがわからない。いたしかたなし。

＊

みるといういとなみは、ひかりのたすけをかりて、ものをみることだけをさすわけ
ではない。みるを、もっとひろいおこないだと、みなしてもいいとおもう。みる。みえる。
みわける。とりわけ、みわけるということわけに、おもいをむけてみたい。みわけるは、
見分ける、とかかれることがおおい。かつて、身分ける、とこのんで、しるしたひとが
いた。

＊

ずらして、みよう。みわける。見分ける。身分ける。ことわる。事割る。言割る。断
る。判る。ことわり。事割り。言割り。断り。判り。理。ずらすといいながら、まさに、
わけているといえる。では、ずらすをずらして、みよう。ずらす、わける、かえる、うつ
す、こじつける、たとえる、つなぐ。これらのあわいはあわい。これらをわかす、へだた
りはちいさい。へだたりは、おそらく、ひとのおもいのなかにある。

＊

へだたり、おくゆき、かたち、ありさま。そうしたもの、こと、さまは、ひかりによっ
てのみ、ひとにとらえられるとはかぎらない。たとえば、こうもりは、おとで、いぬは、
においで、くもは、ゆらぎで、おのれのまわりをとらえるのに、ひいでているときく。そ
うやって、えものをねらい、とらえる。また、そうやって、みをまもるといふ。

＊

ひとにおいても、こうもりや、いぬや、くもと、にたことがおきているのではないだ

ろうか。まなこをもちいて、みる。ここでは、ひかりがよりどころとなる。みみをもちいて、きく。ここでは、みみのなかのまくへと、つたわる、かすかなゆらぎがたすけとなる。においをかぐ。においのこまかなつぶがあると、きいたおぼえがある。あじをみる。これもこまかなつぶが、したに、はたらきかけるらしい。

＊

はだざわり、したざわり、てざわり、はざわり、ということのはがある。からだのいちぶが、なにかにふれたときにおこるさまをしめしている、といえるだろう。このように、からだにそなわっている、ば、つまり、どこかが、なにかをとらえる。それを、ひくくめて、みるとよんでみてはどうか。あるいは、みるを、へだたったものを、ちかくにあるとおもうしくみだと、みてみよう。

＊

みるを、とらえる、とずらす。みるを、とらえる、とよむ。とらえる。おのれのからだのなかに、ぼをあたえる。なにかのかわりになにかではないものを、ぼとして、からだがうけとめる。おそらく、あたまのなかにある、きわめてほそい、いとと、きわめてこまかい、つぶとのあいだで、なにかがおこって、いまのべた、いとなみがおこなわれるのであろう。そうしたことわりは、どうでもいい。それは、くろうとがかんがえ、かたること。しろうとは、いまここで、からだかどのようにはたらいているか、それだけに、こころをかたむければいい。というか、それしかない。くろうとのことわけなど、どうでもいい。

＊

みる。とらえる。からだでうけとめる。それが眼界でおこっていることではなからうか。へだたったものをちかくにあるものとして、とらえる。それを、しる、わかる、みる、ということのはでよぶ。なづける。てなづける。むなしい。あるいは、あやうい。なぜなら、ひとのおごりにつながるから。なづけ、てなづけたつもりの、ものやなわばりをながめて、よいしれる。ひとの、くせ。ひとの、たち。

＊

ひとは、わけて、わかったもの、しるしをつけて、しったものをながめて、あるじになったつもりでいる。だが、それだけでは、たりない。もっと、ほしい、もっと、ひろげたい。なわのそとをみつめ、せめいり、あらそい、あやめるおりをうかがう。きなくさ

い。なまぐさい。それが、ひとにおける、みるということか。いきものが、いきるとは、そうしたことなのか。とほいうものの、ひとのやることなすことは、ほかのいきものにくらべ、あまりにもおおきく、ずれている。はずれすぎている。

＊

まなこがないにかかわらず、あらゆるいきものは、まわりをみて、みをまもる。たべものをさがす。てきとたたかう。それは、それでいい。ひとのぼあい、どをこしている。このほしにも、かぎりがあるというのに、ひとのほしい、ひろげたいには、はてがない。はどめがない。すでに、がけつぷちにたっているのに、そのさまがみえていない。みてみぬふりをしている、ふしもある。

＊

ひとは、おのれが、まなこでみるのに、ひときわ、ひいでているとしんじている。だが、わすれてはならないことがある。めだけで、みるのではないことを。まぼろし、ことのは、うつつ、ふち、みなもと、ものごとのおこり、めでみえるさま。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界。ひとは、そうした界を、いくえにもかさねて、もの、こと、さま、あるいは、なにかとしかよべないなにかを、みている。とらえている。ひとのめには、みえないものやことやさまは、おびたしいかずにのぼるにちがいない。ひとが、わけられないものやことやさまも、おびたしいにちがいない。

＊

ひとが、いちどに、ころをかたむけられるばは、ちいさい。まばらに、まだらに、みているというべきか。わるくいえば、うかつなる、めしい。みるべきものをみないで、みたいものしかみていない。みなくていいもの、あるいは、みたくもないものが、めにはいることもあるだろう。ひとは、おのれのめのしくみを、てなづけ、あやつることはできない。めに、もてあそばれているともいえる。みみ、した、はだをはじめ、からだのどこもかしこもおなじ。

＊

だから、ひとは、やまいにかかり、けがをし、あやまちをおかし、まちがいをおこす。それは、それでいい。おそろしいのは、ほかのいきものをみちづれに、ほろびへのみちをあゆみかねないこと。ただすべきおりを、いまだにいつていないと、だれがいえる

だろうか。

*

ひとが、ところをかたむけられるときは、みじかい。ひとが、おもうより、はるかにみじかい。とびとびというべきか。わすれっぽい、あきっぽいというべきか。あてにならない。それをおぎなうための、ものやしくみをつくりだしてきたが、それも、つまるところは、ひとのまなこやみみの、はたらきにあわせたものにすぎない。つきに、なかまをおくりこみ、たたせたところで、おごりたかぶり、よいしれてはならない。

*

おのれのちからをおぎなう、しくみやものを、つくりだし、みえないなみを、みえるようにする。みえないところを、みえるようにする。きこえないおとを、きこえるようにする。みみがとどかないおとを、きこえるようにする。みえないうごきやゆらぎを、とらえられるようにする。そのたすけとして、かわりをもちいる。かわりのしくみ。とはいえ、とどのつまりは、かわりをみる、きく、とらえるにゆきつく。それにたよるしかない。ひとの、さが。

*

ひとのいう、うつつとは、ありとあらゆるものが、かわりにすぎない、うつつ。すべてが、にせたもの、にせものにすぎない、うつつ。うつつ、うつうつ。うつをうつ、空を打つ。虚を撃つ。鬱を討つ。むなし。

*

みるにつきまとうこと。みるためには、のがれられないこと。みるといういとなみにとって、まぬかれないこと。どこから、だれが、どうみるか、という、とい。とけそうにもない、とい。みえそうにもない、とい。おもいもおよばない、とい。

*

ゆめ、おもい、うつつ、まぼろし、え、かたり、はなし、かきもの。それらにおいて、どこで、だれが、どのようにして、みているのか、つづっているのか、えがいているの

か、かたっているのか、おもっているのか。ひとの、ありとあらゆるいとなみのもとによこたわる、とけそうもない、とい。なぞ。ひとというわくを、でないかぎり、さとれそうもない、なぞ。せいぜい、くうを、なぞるしかない、たわむれごと。なぞをなぞる。たわけ。

*

ひとには、めのまえのひろがりや、めでとらえることに、ひいでているとおもっているふしがある。かたや、ときのうつりかわりを、めやみみでとらえることについては、にがてだとおもっているふしがある。だから、ひろがりや、ふたたび、べつのばで、かわりもちいて、くみたてなおすことは、どちらかといえば、たやすいとおもっている。だが、おこったできごとを、ときをへたのちに、かわりもちいてくみたてなおすことは、むかしからさかんにやっていたにはいるが、そのいとなみに、どこかうしろめたさをおぼえているようにおもわれる。

*

まえにおこったことを、かわりもちいて、くみたてなおす。かわりとは、ことのは、え、しるし、おと、である。あくまでも、かわりであるということ、ひとはきもにめいじるべきだとおもう。ほんものではなく、にせたもの、つまり、にせもの、あるいは、べつものであることを、わすれないようにすべきだとおもう。こうしたおこないにおいて、眼界はかぎりなく幻界と限界にせつするはずなのだが。なんどもやってきたならわしを、いまになって、やめるわけにはいかない。たとえば、さばきという、ひとのつくりあげた、おおがかりなしくみ。つみびとをとがめるさまを、みえるようにしたところで、しくみのもとをなす、おおきなといは、かたづくことなし。いたしかたなし。いたし、かたなし。

*

ひとは、みえていない。よめていない。わかっている。とらえていない。ひとという、わくにあるかぎり。

*

なにかとしか、なづけようのない、なにか。かりそめに、たわむれに、あえて、しいて、なづけるとすれば、ゆらぎ、うごき——。たとえばのはなし。いうまでもなく、まこ

とどから、ほどとおいはなし。かたり。かたこと。たわごと。

*

ゆらぎ、うごきと、なづけることは、むなしい。はかない。なにしろ、ことのはでしかない。さしめすものなぞは、とけていない。いたしかたなし。いたし、かたなし。

*

とはいえ、ことわけをころみてみよう。ばのひろがり、ときのうつりかわり、そのふたえにまたがっておきるさま、とでもいおうか。すべてのいきもの、ありとあらゆるいきていないものの、もとにあり、もとでおこっているさま、とでもいおうか。

*

なづけえぬものをめぐり、ひとはなにができるか。ためしに、ゆらぎ、うごきとよばれるさまともに、みどころをふるわせて、みる。しいて、ことわけすれば、そういう、ことだろう。こと。

*

ひとは、ことからのがれることはできないということ。こと、言、事、断、異、殊。言なし。事なし。断つ。異なる。殊なる。ことのはのあそび。もてあそばれるしかない。

*

うごく。ゆらぐ。かわる。うつる。うごきというなのな。な、名、字、無、己、汝、何、na、n、a。たわむれに、ずらし、みつめ、となえ、おもいのなかで、みをもって、うごき、ゆらぐ。むなしき、きやすめ。

*

それは、それでいいではないか。ひととして、あほとして、みのほどをしろう。そうすれば、おそらく、いまより、くるうことなし。ことなきをえる。こと、なきをえる。こ

と、な、きをえる。こと、な、き、おえる。ことのはは、まう。舞う。眩う。まわる。回る。廻る。みる。回る。廻る。見る。みだれまう。みだれまい。めまい。みまい。瞑目。たわけ。たわごとなり。



以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」(うつせみのたわごと-5-)
- = 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」(うつせみのたわごと-6-)
- = 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」(うつせみのたわごと-7-)
- = 4) 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」(うつせみのたわごと-8-)
- = 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」(うつせみのたわごと-9-)
- = 6) 「げん・Gen(※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」(うつせみのたわごと-10-)
- = 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見(げん・けん)・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」
- = 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」
- = 9) 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・〇・輪・和・わ」
- = 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



「うつせみのたわごと-11-」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

*

* 「うつせみのたわごと -11-」 2010-02-12 :

今回のテーマは、「め・げん・眼」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる眼界です。

冒頭で「まじる・混じる」「もじ・文字」「まな・真名(漢字)」「まなこ・目」「みる・見る」と発音すると m で始まる言葉を頻出させて、ずらずという遊びをしています。

次に、「めでみる」という行為を「見る・視る・観る・診る・看る・回る・廻る」と、さらにずらしています。

こうした、つづられるテーマとつづる言葉たちの擬態＝媚態＝舞踏をしてみたかったのです。そうした言葉たちの舞いを読者に読むというより、「見て」もらうことにより、眼界を体感してほしい、できれば「めまい＝目舞い」を体験してほしい、という願いを形にしたつもりなのです。平仮名尽くしで書く必然性が「見える」ようにと考えて書きました。

内容的には、「見る」を「知覚する」という広い意味で取り、「見える＝見る＝見分け

る＝分かる＝意識する＝認識する」へとつながっていくさまを語っています。「まだら・まばら」という言葉で、ヒトが「見間違う」「無視する」「見て見ぬ振りをする」こと、つまり、知覚と認識の限界性とそのいかがわしさについても触れています。

なお、「見る・見える」には「見ない・見えない」も含めていいと思います。前者にくらべて後者は——前者と同じくらい頻繁に起きているにもかかわらず——不当に軽視されているからです。

それまでに扱った各界と、眼界とがそれぞれ独立しているわけではなく絡み合っていることにも触れています。掛け詞を多用しているので、要約をしても、あまり意味がありません。記事を「見て」いただければうれしいです。

標準的な表記に直したキーワードは、「みわける・見分ける・身分ける」「ことわる・事割る・言割る・断る・判る」「あわいはあわい・間は淡い」です。

直接書けなかったキーワードは、「ミシェル・フーコー」「豊崎光一」「砂の顔」「視線」「空間的広がり」「時間的経過」「再現の不可能性」「可視化というまやかし」「記憶の限界性」「信号・情報・データ」「手話」「指点字」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.12 うつせみのたわごと-11-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

#日本語 # 言葉 # 大和言葉# 和語 # 漢語 # 自分語 # 視覚 # 視線 # ミシェル・フーコー # 豊崎光一# 文字 # 信号

04/20 薄いけど厚いというギャグは猫に通じる
のか

＊

薄いけど厚いというギャグは猫に通じるのか

星野廉

2023年4月20日 07:40

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが、それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

(拙文「鏡「面」画「面」顔「面」」より)

目次

言の葉

ぺらぺらだらけ

ぺらぺらはうつる

言の葉を聞く

言の葉を書く、写す、映す

言の葉を見る・読む

言の葉を写す、言の葉を移す

ぺらぺらしたもの同士が重なる

薄いぺらぺらした網（ネット）にうつる、ぺらぺらしたものたち

ぺらぺらというイメージの韻

人は印象の世界の住人

言の葉

「言の葉」という言い方の「葉」ですが、これも私には薄い面であり膜、つまりぺらぺらに感じられます。

葉には端や刃や羽とのイメージの韻——「は」という音だけでなく——も感じます。端っこ、鋼を薄くのばした刃、薄く軽い羽という感じ。形も似ている気がします。

学問的な関連については知りません。あくまでも個人的なイメージの連想です。

さらに「言の葉」は、ヨーロッパの「言語」における「舌」のぺらぺらとイメージの韻を踏んでいる感じがします。英語でいえば、language と tongue です。これは語源でつながっています。

やっぱり、「言葉・言の葉・言語」はぺらぺら。そんな気がしてきました。

ぺらぺらだらけ

いま私は薄い液晶のスクリーン上に表示されている自分の入力した文字を見つめています。視覚的に厚みも深みも感じられない、つまり立体感に欠ける文字です。

ということは、ひょっとすると文字ってぺらぺらなのではないでしょうか。これまで考えたことがありませんでした。

ぺらぺら（紙や画面）にのっかかったり、うつったり、染みついたり、こびりついたり、貼りついたりしているのですから、文字はぺらぺらなはずです。

私は言葉を広く取っています。話し言葉（音声）と書き言葉（文字）だけでなく、視覚言語と呼ばれることもある表情と身振りも言葉と考えて生活しています。

＊

で、思ったのですが、言葉つながりの事物や現象はぺらぺらだらけではないでしょうか。

舌もぺらぺら。発したとたんに消える声の存在感も薄くてぺらぺら。空気の振動である声をとらえる鼓膜もぺらぺら。話し言葉のことです。

手のひらもぺらぺら。手を使って書いたり入力する文字もぺらぺら。紙もぺらぺら。液晶画面もぺらぺら。

顔の皮膚を舞台とした表情もぺらぺら。

ぺらぺらとした網膜に映ってたちまち消える身振りもぺらぺら。

めちゃくちゃこじつけて、ごめんなさい。こんなことを書いている私もぺらぺら。さらに言うなら、へらへらでへろへろ。べろんべろんでないだけ、まし。

ぺらぺらはうつる

言葉は「うつる、写る、映る、移る」と親和性があるようですが、ぺらぺらは「うつる」と親和性がある、とほぼ同義ではないでしょうか。

ぺらぺらな言葉から意味とイメージが立ちあらわれる。というか、人はぺらぺらに意味やイメージを取る。

意味自体、そしてイメージ自体は実体を欠いている。実体を欠いているのだから、その存在感はきわめて薄い。つまり、意味とイメージもぺらぺら。

ぺらぺら（言葉）がぺらぺら（意味）を生んでいる。そうとしか思えません。

＊

人はぺらぺらに取り憑かれているようです。

ぺらぺらをせっせとつくり、ぺらぺらを写して増やし拡散し保存し継承し、ぺらぺらに見入り、さらにぺらぺらをつくる……。これはスマホやパソコンをつかって、私たちがネット上でやっていることです。

ぺらぺら（画面）にはぺらぺらな文字や絵がうつっていて、人はそこに厚かったり深かったりする「何か」を見ているようです。

さもなければ、飽きもせずにこれだけぺらぺらに執着するわけがありません。なにしろ、人は忙しいしせっかちな生き物です。

言の葉を聞く

震える、届く、震える、聞く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、ひらひらと空気を震わせながら、ぺらぺらした耳たぶに届き、その奥にあるぺらぺらした鼓膜を震わせる。

言の葉を書く、写す、映す

話す、放す、映す、写す、書く。

ぺらぺらした舌が放した（話した）、ぺらぺらした声が、今度はぺらぺらした文字という影に落とされ、その影がぺらぺらした紙に映る、写る。つまり書かれる。

言の葉を見る・読む

映る、見る、眺める、読む。

ぺらぺらした紙に映った（書かれた）文字が、ぺらぺらしたまぶたの奥にある、ぺらぺらした網膜に映る。つまり、見る、眺める、読む。

ひょっとすると、見られた、あるいは読まれたときには、ぺらぺらした網膜に映る影が、ぺらぺらした心のスクリーンに映るのかもしれない。

心のスクリーンに映るのかもしれない意味やイメージや物語は、残念ながら目には見

えない。

言の葉を写す、言の葉を移す

写す、移す、掻く、書く、染みる、刻まれる、印刷する。

ぺらぺらした紙に写った、移った、掻かれた、書かれた文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした紙に写される。筆写や印刷。

＊

移す、広げる、配布する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、紙にのったまま、あちこちに移される。配布。

＊

写す、書く、染みる、移る、つながる、かさなる、翻訳する。

ぺらぺらした紙に写った（書かれた）文字（インクの染み）が、別のぺらぺらした言の葉の文字に移されることもある。翻訳。

ぺらぺらしたもの同士が重なる

英語と日本語に話をしぼりますが、単語、フレーズ、センテンス、文章、あるいは作品のレベルで、対訳でくらべた場合に、両者は別物（同一ではないという感じ）であり、「似ている」でも「同じ」でも「違う（異なる）」でもなく、強いて言えば「つながっている」と感じます。

翻訳は「つながっている」とか「かさなっている」というのが私の印象です。

ぺらぺらした言葉同士が重なるのが翻訳ではないでしょうか。一方を見ると、もう一方が透けて見えるのです。

＊

ほんやく（translation）は翻訳とも反訳（速記なんかでは「ほんやく」という作業もあるようです）とも書くみたいですが、「ひるがえす・翻す」が見えて、そのイメージにわくわくします。

ひらりとひっくり返すとか裏返すという感じです。

ぺらぺらをひらりとひっくり返しても、やっぱりぺらぺら。

薄いぺらぺらした網（ネット）にうつる、ぺらぺらしたものたち

投稿する＝複製する＝拡散する＝保存する、映す、写す、移す。

デジタル化された情報（信号）が、ぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る文字（画素の集まり）は、同時に、別のおびただしい数の端末のぺらぺらしたスクリーンに視覚化されて映る。

ネット上では投稿、複製、拡散、保存がほぼ同時に起きます。

薄いぺらぺらした網（ネット）で、うつる、映る、写る、移る、ぺらぺらしたものたち。それら（文字・映像・音声）は広い意味での言葉だと言えそうです。

ぺらぺらというイメージの韻

以上、ぺらぺらという個人的なイメージを感じる、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、ネット・網、声、文字といったものたちを、ぺらぺらという言葉に掛ける形で、遊んでみました。

いや、むしろ遊んでもらったという気がします。あくまでも戯れです。ぶっちゃけた話がこじつけです。

ぺらぺらという動き（これが動きであればですが）やイメージのシンクロという言い方もできるかもしれません。

この「似ている」のシンクロを、私はイメージの韻と呼んでいます。「似ている」だから印象であって、関係あるか（似ている以外につながりがあるか）ないかは関係ありません。

人は印象の世界の住人

ところで、言の葉、舌、まぶた、耳たぶ、目の網膜、耳の鼓膜、紙、スクリーン、ネット・網、声、文字は似ていますか？

いま挙げたものには、見えないものがありますが、見たときに似ていると感じますか？

でも、イメージの韻でつなげると似ているような気がしてきます。少なくとも、私にはそうです。

＊

猫という言葉と猫という生き物は似ていませんが、言葉を使っている分には、似ていないという感覚はないと思います。

たぶん、猫という言葉と猫という生き物は似ているのです。いや、きっと同じなのです。人にとっては。

だから、「言葉と事物とは違うんだよ」なんて当り前のことを書いて、わざわざ念を押したフランス人がいたのでしょうか。

ミシェル・フーコー、渡辺一民／訳、佐々木明／訳『言葉と物〈新装版〉—人文科学の考古学—』| 新潮社

ベラスケスの名画「侍女たち」は、古典主義時代における人間の不在を表現している。実は「人間」という存在は近代に登場したもので

www.shinchosha.co.jp

河出文庫意味の論理学〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオンとクロノス、そして「出来

www.kinokuniya.co.jp

*

似ているって不思議です。不思議なのは、たぶん人にとって当たり前すぎるからでしょう。人にとって謎（分からないとか知りえないという予感）とは不思議という感覚なのかもしれません。

人は似ているを基本とする印象の世界に生きている。そんな気がしてなりません。

猫を見ていると、この「似ている」世界とはまったく無縁の世界に住んでいるように見えます。

世界がべらべらに満ち満ちている。薄いは厚いでもある。そんなギャグは、ねこちゃんには通じそうもありません。

薄いものに熱中する人に対して、猫はひたすら邪魔をするだけです。私はそんな猫がうらやましくてたまりません。

猫はべらべらの言葉と立体で奥行きのある事物を混同していないもようです。

#猫 # 言葉 # 言の葉 # 言語 # 文字 # 音声 # 表情 # 身振り # 画面 # 膜 # 印刷 # インターネット # 複製 # 鼓膜 # 網膜 # 紙

04/21 心が壊れないために何かにか何かを見てし
まう

＊

心が壊れないために何かに何かを見てしまう

星野廉

2023年4月21日 07:51

瞳と鏡で私が連想するのは、膜と面です。

網膜、鏡面。瞳や鏡を覗きこんだとき、見える姿は、膜や面に映った像・影なのでしょう。

薄い膜と薄い面に映っているのですから、姿や像や影も薄いはずですが。それなのに、奥行きや深さや遠さや隔たりを感じるのは、こしらえているからではないでしょうか。

(拙文「鏡「面」画「面」顔「面」」より)

目次

目がドラマや物語の芽を生む

大きいと小さいがドラマや物語を語り始める

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かぶ

思わず「深い」とか「奥行きが感じられる」と言ってしまう

何かに何かを見て、気持ちを静める

目がドラマや物語の芽を生む

何かに何かを見る——。前者の「何か」と後者の「何か」は違います。こうなるのには何か理由があるのではないのでしょうか。

壁の模様でも、天井の染みでも、空の雲でもかまいません。人は何かに何かを見ます。見えるというほうが適切かもしれません。見えてしまうのです。いや、むしろ「現れる」というべきでしょうか。

● ●

上の二点を見て顔を見てしまう人もいるでしょう。そうでない人もいるでしょう。「二、2、II」という数（すう・かず）を思いうかべる人もいるでしょう。人それぞれです。

もし、二点が目に見えて、そこから目が見えることから顔を見てしまうとすれば、誰かに似ているとか、あるキャラクターに似ているとか、ある人形に似ているという具合に、イメージが進んだり増えたりしそうです。

連想した顔が記憶を呼びさましたり、その顔がなんらかの光景へと発展することもありそうです。

連想が連想を呼ぶ。連なる。移り変わる。動きが生まれる。関係性が生じる。

ドラマや物語の芽が生まれる。目が芽を生む。そんな気がします。

大きいと小さいがドラマや物語を語り始める

● ●

今度は黒い点が並んでいます。大きさの違いを見て、大小をイメージする人がいるかもしれません。大きい、小さい、ですね。

重い、軽い。親と子。私とあなた。私とお母さん。私とあの人。男と女。おとなと子ども。人と犬。人とペット。この国とあの国。

遠近。左右。太陽と地球。地球と月。陰陽。

「仲がいい」。「にらみ合っている」。「一方が叱られて縮み上がっている」。「ウィンクした目だ」。「トンネルの出口と入口かな？」

いろいろなイメージを呼びさましそうです。人それぞれです。

「大きい」と「小さい」という差が、ドラマや物語を始動させる。そんな気がします。

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かぶ



上の●と・をご覧ください。●が手前に、・が後ろに見えるかもしれません。人それぞれですけど、そう見えるという前提で話を進めます。

*

平面にある大きさの異なる二点を、奥行きとか遠近に置き換えているわけです。奥行きとは、奥深さ、深さ、背後、背景、隠れているもの、隠されたもの、というふうに連想を呼びさます気がします。

向こうから迫りかけて来る、トンネル、望遠鏡、顕微鏡、衍、エコー、

太陽と惑星、進化、だんだん大きくなっていく、だんだん小さくなっていく、遠くなっていく、近くなっていく

向こうにあるのは何だろう、誰だろう、逃げていく、追いかけて

「おーい!」「何だーい?」「待ってくれ」、「さようなら」ー。子を見送る親、「元気でね」、いつまでも遠くで見ている。

*

ストーリーを感じませんか? 声が聞こえてきませんか?

イメージが膨らむとも言えるでしょう。話がだんだんズレていくとか、話が大きくなるとか、そんな言い方も可能でしょう。

要するに、思いやイメージが連続して置き換わっていくわけです。

たぶん、コマ送りやバトンを手渡すように、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎ、と連なっていくのでしょう。すると、筋書き、つまり物語とドラマが生まれます。

映画や漫画やアニメのコマ送りという原理が、これでしょう。

(私は詳しくないのですが、音楽も、余韻や予感や必然性や筋をはらんだ音が、つぎつぎ＝継ぎ継ぎ＝接ぎ接ぎ＝注ぎ注ぎ＝告ぎ告ぎと連なっていく気がします。)

平面上で、奥深さ、深さ、背後、背景というドラマと物語が浮かんでくるようです。平面が立体化されるとも言えるでしょう。

思わず「深い」とか「奥行きが感じられる」と言ってしまう

“水が来た。”

三島由紀夫『文章読本』「第三章小説の文章」より

「これはね、森鷗外作『寒山拾得』から引用したもので、三島由紀夫の『文章読本』で激賞されている文なんだ」

「そうかそうか、さすがに名文だね。短いけど、すごい。なんというか、こう、気品が漂ってくるのよね」、「やっぱりね。違いますよ。短いけど、そんじょそこの文章とはぜんぜん違う。なんというか、こう、文体が違います」、「分かります。そんな気がしたんだよな。言葉に独特のたたずまいがあるでしょ？　なんというか、こう、匂い立つ教養を感じるんだ」

「なるほど、深いねえ。短いけど奥行きが感じられるんだ」

＊

「ねえねえ、お父さん、お隣の〇〇くんが作文でこんな文を書いたのよ」

「なにに。『水が来た。』？ ふーん。やっぱり、小学生の作文だね。薄っぺらいし浅いんだよ」

＊

「ねえねえ、お義父さん、うちの〇〇ちゃんが作文でこんな文を書いたのよ」

「どれどれ。『水が来た。』？ おおお！ あの子は天才だ！ なんか、こう深いものが感じられる」

＊

『水が来た。』は文字からなる文字列でありセンテンスであり、日本語の表記を学んだ者であれば誰もが書き写せるし、そこそそ学んだ人がなんとか書き写すことも可能でしょう。もちろん機械に書かせることもできるし、AIが書いた文であってもぜんぜんおかしくありません。

文字には複製しても「同じ」どころかほぼ「同一」であるという驚くべき性質があります。ところが、同じ文字列の文章であっても、それを純粋にそのものとして読むことは難しく、人は必ずその文字列に何らかの印象とイメージをいだいてしまいます。

これは複製として鑑賞されるのが一般的である、絵や写真や動画や楽曲であってもそうでしょう。

誰が書いたのか、誰が撮ったのか、誰がつくったのか、誰が歌った、あるいは演奏したのかという知識で、印象が異なるのです。

純粋な鑑賞という体験（そんなものがあればの話ですけど）ではなく、教わった知識（作品の背景についての勉強を重視する人もいるでしょう）によって印象や感想が左右される点が大切だと思います。

「〇〇っぽい」や「いかにも〇〇らしい」や「〇〇のような」や「いかにも〇〇みた

い」のように。

＊

作品を鑑賞して評価を下したというよりも、たいていは知識として得た情報が作品の印象をつくる。それだけでなく、得た情報が間違いだったと言われると、手のひらを返したように印象が変わるというわけです。

「そうかあ、やっぱり〇〇だね」や「なるほど、さすがに〇〇らしい」のように。この場合、〇〇には機械や AI も、もちろん入ります。

人が AI の作品を評価するのはきわめて難しいでしょう。人類初の体験で慣れていないからです。冷静な判断ができないとも言えます。

人は何かに何かを見てしまう。そのものを見ることはできない。自分が知っているもの（知っていると思っているもの）、自分の見たいもの、自分にとって都合のいいもの、自分にとって快であるものを見てしまう。

＊

「深い」は「美しい」と並ぶ最高の褒め言葉です。私みたいなへそ曲がりでも、自分の書いたものが「深い」とか「美しい」と言われれば、小躍りして喜びます。

人は、薄い紙や画面の上のさらに薄いもの——たとえば言葉や映像——に、深さや奥行きを見てしまうのです。これは自分を観察して得た実感です。

また、たとえ見てしまわなくても、その時の乗りで「深い」とか「奥行きが感じられる」と思わず言うってしまうのです。それが人です。

何かに何かを見て、気持ちを静める

さきほどの二点をもう一度見てみましょう。

.



私なんか、遠くで見守っている存在と見守られている存在の関係を勝手に想像して涙ぐみそうになりますが、遠くからじっと監視されているイメージを呼び覚まされて身震いする人がいても不思議ではありません。

*

いや、そんなふうにはぜんぜん見えないけど。純粹に黒い丸と黒い点にしか見えない。

いや、黒い丸と黒い点には見えないけど。画素の集まりにしか見えない。

以上のような意見や感想があっても私は驚きません。人は印象の世界に住んでいるからです。印象やイメージは、人それぞれです。

*

何かに何かを見る。見てしまう。

見慣れない何かに自分の知っている（馴染みの）何かを見る。見たいもの（自分に都合のいいもの）を見る。見てしまう。

どうして、見てしまうのでしょうか。

心が壊れないためにそうしているように私には思えてなりません。自分を観察した結果、そのように思います。

見知らぬ「何か」、初めて見る「何か」ほど不気味であったり、恐ろしいものはありません。名前がないからです。そこにドラマや物語がないからです。

たとえば、その名が「怪物」や「モンスター」であっても、名前がない「何か」よりは
ずっと不気味ではないし、怖くもないです。

*

面（具象・そのもの・そこにあるもの）に立体（抽象・その向こうにあるもの・そこに
ないもの）を見てしまうとも言えます。

人がのっぺらぼうな面——意味が不在である面（無意味な面ではなく）——に、顔や
模様や奥行きや深さや遠近や背後を見てしまうのは、心が壊れないためなのです。

意味は「そこにある」のではなく、「人がそこにつくる」というのが適切な言い方だと
私は思います。「意味がある」という言い方は無意味＝ナンセンスだという意味です。

上で挙げた例で言うと、単なる点、単なる画素の集まりほど、人の心を壊すほど不気
味なものはないと言えるかもしれません。

「単なる○○」「○○だけ」の、○○には名前もなく、意味が不在でドラマも物語もな
いからです。

逆に言うと、名前と意味とドラマと物語が、人をいい意味でも悪い意味でも「深淵」
——日常空間にぽっかり空いたブラックホールのような穴——から守るのです。

*

深い

深く

深さ

深み

深い淵

深淵

ブラックホールのような穴

ニーチェの言ったあの深淵

私には下に行くほど、深く感じられます。

語呂のよさや字面に左右されて、より「深い」と感じたり（つまり、上で述べた「水が来た。」のように印象とその時の乗りで「深い」と感じているだけ）、自分にとってお馴染みの安心できるイメージに置き換えて満足しているのでしょう。

それが人です。

きっと深い穴を直視して壊れたくないのです。

*

話は飛びますが、上で挙げた文字列を、ニュートラルな情報のデータとしてフラットに処理するのが、機械であり AI なのでしょう。機械や AI にとっては、深さも深みも奥行きもありません。

機械や AI は深い穴を直視して壊れることはありません。物理的に壊さないかぎり壊れないのです。

深さや深みや奥行きとは無縁の機械や AI が書いたものに、深さや深みや奥行きを見てしまうのが人です。文字だけでなく、映像や音楽でも同じでしょう。

それが人です。

ドラマ # 物語 # 意味 # 無意味 # 連想 # イメージ # 印象 # 森鷗外 # 三島由紀夫 # 文章 # 平面 # 立体

04/22 Moves Like Jagger (連想でつなぐ)

＊

Moves Like Jagger (連想でつなぐ)

星野廉

2023年4月22日 07:52

目次

動画を視聴しながらとりとめなく考える

like、似ている

似ている、同じ=同一

ミック・ジャガーの舌

翻訳、似ている、別物

仕草、表情、身振り

まぼろし、幻、影

吉田修一の作品に頻出する汗

自分を模倣する、自分が模倣される

動画を視聴しながらとりとめなく考える

(動画省略)

Maroon 5 - Moves Like Jagger ft. Christina Aguilera 2010

有名な曲ですね。リリースされたのが十年以上前ですから、いまとなっては懐かしい。

いい感じで、あれよあれよしている動画。見事な編集と構成。

それにしても、オーディションに出てくる人たちの動きと顔芸がすごい。よくぞこれだけの逸材を集めました。「似ている」大好き人間の私は、あれよあれよと見入ってしまい、気がつくと終わっています。

like、似ている

Moves Like Jagger、ミック・ジャガーのような動き、ミック・ジャガー風の振り。魅力的なタイトルです。

You want the moves like Jagger

I've got the moves like Jagger

I've got the moves, like Jagger

この like の語源を調べてみると、古英語で「～の体（形）を備えている」とあり、そこから「似ている、等しい」となったとあります（ジーニアス英和辞典）。形容詞の alike もあります。look-alike という名詞だと「そっくりなもの」とか「そっくりさん」という意味になりますね。

辞書でこういう語義や説明を読むだけでぞくぞく来ます。「似ている」や「そっくり」に目がないのです。

英和辞典は、日本語で単語の意味が書いてあるのではありません。訳語集です。ということは、英語の単語を見出しに、日本語での「似ている」と「そっくり」さんが一堂に会している場と言えます。

似ている、同じ＝同一

「似ている」は目まい感をもたらします。目まいではなく、目まいに似ている目まい感ですから、心地よいです。同じや同一は——なにしろ本物であり実物ですから——緊張をもたらすことがあります。似ているは優しく包みこんでくれます。ほわっとしたものが「似ている」なのです。

(動画省略)

同期するメトロノームたち。

身振りは似ていても、あるいは同じであっても、各メトロノームは同じではない。同じ＝同一は、この世に一つしか存在しない。その意味で、メトロノームたちは同じではなく似ているのだ。

それぞれがそれぞれとしてある、またはいる。それぞれがそれ自身にそっくりなのだ。そっくりな点がそっくりなのである。

自分自身にそっくりという意味なら、同じとか同一と言えるのかもしれない。似ている、似た身振り、仕草、顔、表情が世界にあふれている。

その身振りを読む。あるいは、なぞる、真似る、まねぶ、学ぶ。または、うつす、写す、映す、撮す、移す、遷す。そうやってふえる、増える、殖える。

世界は顔で満ち満ちている。

ミック・ジャガーの舌

ところで、このPVが動画が始まってまもなく0:34あたりからミック・ジャガーのインタビューのカットが流れます。ときおり唾で濡れた舌先を出して唇を湿らすところを見るたびに、村上龍の『コインロッカー・ベイビーズ』の一シーンを思い出します。「そうか、あの舌が……」と。

ミック・ジャガーの逸話を真似たハシが舌先を鉗で切断する場面があるのです。講談社文庫の旧版（新装版ではありません）では下巻のp.67からp.69の半分までですから、一シーンとしてはかなり長いのですが、細かな描写と説明が続きます。

内容が残酷なのにもかかわらず詩的かつ正確な文章です。何度読んだか知りません。読むたびにその描写のうまさに感心して、うなってしまう自分がいます。

その一部を引用します。残酷なところはカットします。

"ハシはある実験をしようとしている。昔何かの本で読んだ。ローリングストーンズの本だ。ある偶発的な事故の後、ミック・ジャガーの声が変わった。その事故以来ミック・ジャガーはあの官能的な声を獲得した。その事故をハシは再現しようと思う。まず道具を並べる。(.....)

もう一度舌を伸ばす。目を閉じると体中が舌になったような感じだ。鋏をいっぱいにおいて舌先を挟む。冷たい刃に触れると火傷の痛みが薄れた。小さい頃乳児院でシスターに読んで貰った童話に舌を切られる雀の話があった。(.....)"

村上龍『コインロッカー・ベイビーズ』下・講談社文庫(旧版) pp.67-68・丸括弧は引用者

"He had a little experiment in his mind. He had read somewhere that Mick Jagger's voice had changed drastically after an accident he'd had, that it was actually only after this accident that he'd developed his peculiar, supersensual voice. Hashi decided to arrange the same sort of accident for himself. First he assembled his tools: [...]"

He stuck his tongue out again. When he shut his eyes he felt that his whole body had become a tongue. Opening the scissors as wide as they would go, he put the tip of his tongue between the blades. The cool metal soothed the burn. Among the stories the nuns had read him when he was a child at the orphanage was one about a sparrow. [...]"

(新装版) 英文版 コインロッカー・ベイビーズ(講談社インターナショナル) Stephen Snyder 訳 pp.261-262

日本の小説の英訳を読みながら原文の日本語を再現しようとしたことがあります。翻訳家を志していた頃の話です。文章修行のつもりでやっていました。いちばんよくやったのが、『英文版 コインロッカー・ベイビーズ』をつかっての逆翻訳です。

好きな部分を段落ごとに英語から日本語に訳して行って原文と対照するのですが、その度に村上龍の描写力に驚嘆して自分の力不足に意気消沈したのを覚えています。この小説の文章は私にとって、いまも行き詰まった時に参照する規範であり続けています。

みなさんも、お好きな日本の作家の英訳で試してみませんか。一冊まるごとやると大変なので、好きな箇所だけやるのがコツです。大げさな言い方になりますが、言語観や日本語観が変わりますよ。たとえば「村上春樹 英訳」みたいに検索すると、英語訳のリストにたどり着けます。

なお、舌——薄くてべらべらした舌については、以下の記事に詳しく書きましたので、興味のある方はぜひご覧ください。

翻訳、似ている、別物

翻訳という作業も「同じ」ではなく「似ている」を作る行為です。原文と翻訳を対照すると、似ているけどどこか違うなあと感じたり、ときにはまったく別物に感じられることもあります。ある作品の邦訳が複数ある場合には、その翻訳を読み比べると面白いのです。

昔の話ですが、ジェイムズ・M・ケイン作の『郵便配達はいつもベルを二度鳴らす』（または『郵便配達はベルを二度鳴らす』）という邦訳が、田中西二郎訳、田中小実昌訳、中田耕治訳、小鷹信光訳の四種類も楽しめた（つまり本屋に並んでいた）時期がありました。原著なしで日本語訳だけを四種類読み比べましたが、わくわくするような体験でした。若くなければできない冒険だったといまになって思います。

J・D・サリンジャーの『ナイン・ストーリーズ』（または『九つの物語』）もいくつかの訳本がありました。この作品は野崎孝による邦訳しか読んだことはありません。現在は柴田元幸訳もあるのですね。いつか柴田訳を読みたいです。

仕草、表情、身振り

上で挙げた Like Jagger ft. Christina Aguilera の動画では、ミック・ジャガーがなかなかセクシーな表情を見せてくれますね。気になったので、元のインタビュー動画を探してみました。

以下の動画らしいのですが、タイトルに、1965 とあります。私はまだ小学生でした。その息の長い活動に驚かされます。

あらためてミック・ジャガーのインタビューに見入っていたのですが、ときおり唾で濡れた舌先を出して唇を湿らす表情というか仕草。あれを見ていて既視感を覚え、それが何か思い出せなくて気になりました。

で、思い出したのですが、以前に抗うつ剤を服用していた時期に、やたらに喉の渇きを覚えて、よくこんなふうに口を閉じて唾を飲むような仕草をし、口の中を潤していたことがありました。

いまでもたまにそういう人を実際にあるいはテレビで目にすると、薬の副作用で喉が渇いているのではないかと要らぬ心配や想像をしてしまうことがあります。

人の表情や身振りや仕草や動きが、ある特別な意味を持った記号のように感じられるのは興味深いし、ある意味どきどきします。

表情も目くばせも身振りも仕草も動きも、言葉。広い意味での言葉。何かのメッセージを送ってくる。何かを連想させる。遠い記憶を呼び覚ます場合もある。そんなふうに感じます。

一言で言うと「交感」です。二言で言うと「交感」と「共振」です。交わり感じて共に振れるのです。

＊

以下の動画（1969）もインタビューのものなのですが、カラーであるために、ミック・ジャガーの表情がリアルに迫ってきます。

私が注目するのは唇の動きです。別の生き物ように感じられて、知らず知らずのうちに魅入られてしまう自分がいます。ときどき歯の間から出る舌にも目が行ってなりません。

＊

上の1965年の白黒の映像と1969年のカラーの映像を見ていると、白黒のほうが月光の下にいるミック・ジャガー、カラーのほうでは日の光の中にいるミック・ジャガーに見えてきます。

こうしたコントラストを目の当たりにすると、写真も映画もテレビやパソコンやスマホ画面の映像も幻（まぼろし）であることを思い出さずにはられません。

＊

上の動画を見ていて、ふと思いだしたのですが、アート・ガーファンクルのお口と舌がお好きな方には、以下の記事（「Lに似せられた作家」）をお薦めします。

（記事へのリンク省略）

まぼろし、幻、影

幻、月幻、日幻、電幻、幻影、影。

まぼろしは似たものであり、影だと気づきます。影ですから、そのものではありません。同じでもありません。言葉と同じです。いや言葉と似ていると言うべきなのかもしれません。

私たちは、まぼろしである影（映され写されもの）に、囲まれて生きています。

とりわけ、実物と現物のない複製の複製と、起源のない引用の引用に満ちた現在の世界は、「本物」や「本当」や「同じ」や「同一」とは出会えない状態が常態化しています。複製と引用物を手にしたり耳にしたり眺めながら、抽象（観念）として思い描くしかないのです。

抽象が「本物」を忠実に「反映」あるいは「投影」しているかどうかは過酷な賭けなのであり、それがまばらでまだらな「幻影」である可能性のほうが高い気がします。

抽象が「本物」を忠実に「反映」あるいは「投影」しているかどうかは過酷な賭けなのであり、それがまばらでまだらな「幻影」である可能性のほうが高い気がします。

現在の人は「本物」や「本当」や「同じ」になかなか出会えないために、「似たもの」つまり影に魅惑され取り憑かれ嗜癖し、「似たもの＝影＝複製の複製＝引用の引用」をさ

らにせつせと生産しつづけるという悪循環におちいつているかのようです。

エスカレートしていくさまは、自暴自棄にさえ見えます。

吉田修一の作品に頻出する汗

この曲について、もう一編の小説を思い出します。吉田修一の『怒り』です。冒頭近くで、鎌倉海岸の特設ビーチハウスで行われるイベントの風景が出てくるのですが、ダンスフロアでかかるのがこの曲なのです。中央公論社の単行本から引用します。

”（前略）上半身裸の胸や背中はずでに潮風と汗と砂でベトベトになっており、やはり上半身裸で踊っている男たちの間をすり抜けるたびに体が密着し、相手の汗と体温が伝わってくる。

曲がマルーン5の「Moves Like Jagger」に代わり、優馬は足を止めた。去年もこのイベントのラスト近くでかかり、盛り上がった曲だった。”

（吉田修一著『怒り 上』中央公論社 p.38）

こういう場面を読むと既視感を覚えずにはられません。この既視感が吉田の書いた小説群の魅力でもあります。吉田修一の小説では人がやたら汗をかきます。読んでいてかなり頻繁に汗の描写が出てきて目立つのです。

吉田修一の作品における汗というテーマで論文が書けそうなくらいです。吉田修一はある時期まで、全部読んでいました。吉田修一論を書こうと思っていたほどです。長編では『怒り』と『パレード』、短編集では『熱帯魚』と『女たちは二度遊ぶ』が好きです。

『怒り』は映画化されていますね。映画でも汗が噴き出ます。汗、汗、汗。そして水もよく出てきます。「吉田修一と水」というテーマで長い記事が書けそうです。

私は吉田修一の小説が大好きです。吉田修一の小説については、以下の記事（「似ている」の魅惑）で引用をまじえて論じているので、よろしければお読みください。

（記事へのリンク省略）

自分を模倣する、自分が模倣される

話を Moves Like Jagger に戻します。

YouTube で検索していてすごいと思ったミック・ジャガーのダンスというか moves の映像集を、以下に紹介します。かっこいいですね。動きが美しい。

かつてのグループサウンズや日本のロックグループのメンバーには、ミック・ジャガーの模倣から始めた人が多いという話は本当だと感じました。

(動画省略)

ああ、これは「〇〇」に似ている、と思った映像がいくつもあります（私は音楽もダンスにも無知なので、げすの勘ぐりにちがいませんけど）。

話は逆で、「〇〇」がジャガーを真似たのでしょうか。模倣されるのは、偉大なアーティストの宿命でしょう。

＊

アーティスト——歌手や演奏家だけでなく小説家や作詞家や作曲家や美術作品の作家をふくむ広い意味での芸術家——が自分のスタイルを作りあげていく過程で、「他人を模倣する」（立場を変えれば「自分が模倣される」）だけでなく、「自分を模倣する」もあるのではないのでしょうか。

先行する他人のパフォーマンス（演技や演奏）や作品を模倣するだけでなく、過去の自分自身のパフォーマンスや作品を模倣するという意味です。自分自身の模倣の場合には更新とも言えるでしょう。

絶え間ない自己更新をしていかなければならない（他人ではなく自分が相手＝ライバルなのです）ことが、広義のアーティストの宿命なのかもしれません。

ミック・ジャガーがその moves =動き=振りを自分で作り出していったのか、先行する誰かの振りを真似たのか知りませんが、彼のパフォーマンスを映した数々の動画を見ていると、変容を重ねている動きが一つの身体から自然に出てきている、つねに試行錯誤=自己更新を重ねているようにも感じられます。

以下の動画「Mick Jagger on his signature dance Moves (Where Mick Jagger Got the Inspiration for His Famous Dance Moves)」は、ミック・ジャガーの moves = moves like Jagger を考える上でヒントになりそうです。

(動画省略)

#音楽# 小説# 読書# 映画# 洋楽# 村上龍# 吉田修一# 翻訳# マルーン5# ミック・ジャガー# 鏡# 影

04/23 自分に自分を似せていく（連想でつなく、
引用の織物）

＊

自分に自分を似せていく（連想でつなぐ、引用の織物）

星野廉

2023年4月23日 07:57

目次

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが

鏡を前にしてのお化粧は

「似ている」は印象であって検証できない評価

模倣する、模倣される

自分の似姿に自分を似せていく

鏡に囲まれ、鏡の前で自分をつくっていく

映った像の中に「ある・いる」「他者・多者」

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが

鏡は自分の姿を見るためにあるとされていますが、鏡に映っているのは自分なのでしょうか？ 鏡に映っているのは姿や形というよりも時間だという気がします。

自分の似姿をこれまで鏡で見てきた記憶の厚みの上に、いまの似姿を見ていると言えれば分かりやすいかもしれません。人にとって体感できる時間とは、おそらく記憶の重なりだからです。

その意味で、正確に言えば、鏡に映っているのは、時間ではなく、ずれなのでしょう。

抽象である時間を人は「見る」ことができず、「前」と「今」とのずれ——これも記憶の重なりなのかもしれません——として感知するしかないとも言える気がします。しかも、きわめて私的で個人的なものなのです。

この場合のずれは個人的な印象であって計測も検証もできません。その意味で、このずれは、やはり私的な印象でしかない「似ている」に似ています。「前」と「今」のずれも「似ている」も印象なのです。

＊

念のために言い添えますが、ものを映す鏡だから「似ている」に似ているわけではありません。鏡には「似ていない」も映るのです。

「似ている」を見るためには、同時に「似ていない」も見ていなければならないという事です。ここは似ている、ここは似てないというふうに見ていないと、見えないとも言えます。

「似ている」と「似ていない」のずれ——。これは時間のずれとして「立ち現われる」のです。いや、「立ち隠れる」のかもしれない。

冗談（レトリック）はさておき、白と黒の細かい点からなる絵や写真（文字でもいいです）は、濃淡はあるにせよ、白の点と黒の点を同時に見ていないと形が見えないと思われませんが、それと似ているのではないのでしょうか。

鏡を前にしてのお化粧は

鏡を前にしてのお化粧は、刻々と目の前に現われるずれとの追っかけっこです。先を越されないように必死で見なければ、顔は見えないし、化粧品ののり具合を確かめることはできない。

だから、ずれを深く受けとめている暇も余裕もない。

お化粧をする時には、鏡の中の自分、つまりずれとは妥協するしかないのです。いつまでも眺めているわけにはいかない。考えこんでいる暇もない。ま、いっか、と唇を噛んでつぶやいてその場を去るしかない。

ずれとまともに向き合えば喜劇や悲劇や惨劇になります。まだお出かけもしていないのに化粧が崩れるという意味です。

*

数年前の写真を見るのは恥ずかしいものです。恥ずかしくてまともに見られない。髪型も化粧も服装もださくて見るに堪えない。ただし顔そのものはあえて見ないだけの体感的な知恵がそなわっているようです。というか、おそらく見えないのです。

ずればかりがやたら目につく。だから、顔や姿は目に入らないと言うべきかもしれません。

映っている人を卒業したという優越感と、それがちょっと前の自分だったという屈辱感のあいだで揺れるとも言えるでしょう。要するに、ちょっと前の自分は恥ずかしいと同時に憎い。ちょっと若いから小憎らしい。つまり、ライバルなのです。

免許証とか証明書の写真が好例です。恥ずかしさと屈辱だけが映っている。だから正視できないし正視に耐えない。これは、ずれがダイレクトに襲ってくるからではないでしょうか。

恥ずかしさと悔しさ、つまりずれを感じとるだけの余裕ができていても言える気がします。

*

昔の写真とか子どもの頃の写真だと、ずれをもろに受け入れる余裕ができていて、見てもそれほど恥ずかしくはないし憎らしくもないし悔しくもない。むしろ、懐かしくて見入ることがある。

もはや、他人となった自分です。

まあ、かわいい。この子、誰？　なんてぐあいに天使を見る人もいます。我が子や甥っ子や姪っ子や孫を見るのに似ています。

似ているけど、自分ではない誰か。いまの自分以外に自分はいないはずなのに、自分がそこに映っている――。

(※ここまでは、拙文「【小説】顔を見る―生活と意見」から引用して再構成しました。)

「似ている」は印象であって検証できない評価

みなさんは、「似ている」に対してどんな思いをいただいていますか？

この人はあの人に似ている。あなたは、〇〇さんに似ていますね。この小説はあの小説に似ていると思いませんか？　Aの作る曲ってBの曲に似ているような気がしてならない。

彼女の見せるちょっとした仕草が、彼女のお母さんに激似。この絵とあの絵はそっくりだ。うちの息子の後ろ姿に旦那を見てぎょっとした。「ねえ、これって手触りがあれに似てない？」「どれどれ。いやだ、本当……。触ってみると、あれにそっくり」

あの人の彼氏の服装とか話し方を見ていると歌手のBさんをかなり意識している気がする。ここから見る風景は、故郷の町を彷彿とさせる。この店の餃子を食べるたびに、おばあちゃんの作ってくれた餃子を思い出すんだ。

電話に出たのがお母さんだと思ったらお姉ちゃんだった。この記事って、きのうS新聞で読んだコラムにとっても似ているんだけど。この既視感、何だろう？

＊

何かと何かが、あるいは誰かと誰かが似ているという評価や印象が、人を喜ばせることもあれば、怒らせることもありそうですね。笑いや驚きやため息や涙をもたらすことも考えられます。また、「似ている」が人と動物だったり人と物の場合もあるでしょう。

私は「似ている」大好き人間なのですが、手放しで「似ている」を賞賛していいとは思っていません。

「似ている」は一つの評価にはちがいないのですが、「同じ」や「同一」と違って検証ができません。「似ている」は印象だからです。印象や感想は偏見につながりますね。それが「似ている」の恐ろしいところでもあります。

「似ている」という評価や意見がさまざまな感情を人にいだかせることに敏感でありたいと思っています。

模倣する、模倣される

以下は、拙文「Moves Like Jagger (連想でつなぐ)」からの引用です。

*

YouTube で検索していてすごいと思ったミック・ジャガーのダンスというか moves の映像集を、以下に紹介します。カッコいいですね。動きが美しい。

かつてのグループサウンズや日本のロックグループのメンバーには、ミック・ジャガーの模倣から始めた人が多いという話は本当だと感じました。

ああ、これは「〇〇」に似ている、と思った映像がいくつもあります（私は音楽もダンスにも無知なので、げすの勘ぐりにちがいませんけど）。

話は逆で、「〇〇」がジャガーを真似たのでしょうかね。模倣されるのは、偉大なアーティストの宿命でしょう。

*

アーティスト——歌手や演奏家だけでなく小説家や作詞家や作曲家や美術作品の作家をふくむ広い意味での芸術家——が自分のスタイルを作りあげていく過程で、「他人を模倣する」（立場を変えれば「自分が模倣される」）だけでなく、「自分を模倣する」もあるのではないのでしょうか。

先行する他人のパフォーマンス（演技や演奏）や作品を模倣するだけでなく、過去の自分自身のパフォーマンスや作品を模倣するという意味です。自分自身の模倣の場合には更新とも言えるでしょう。

絶え間ない自己更新をしていかなければならない（他人ではなく自分が相手＝ライバルなのです）ことが、広義のアーティストの宿命なのかもしれません。

ミック・ジャガーがその moves =動き=振りを自分で作り出していったのか、先行する誰かの振りを真似たのか知りませんが、彼のパフォーマンスを映した数々の動画を見ると、変容を重ねている動きが一つの身体から自然に出てきている、つねに試行錯誤=自己更新を重ねているようにも感じられます。

以下の動画「Mick Jagger on his signature dance moves (Where Mick Jagger Got the Inspiration for His Famous Dance Moves)」は、ミック・ジャガーの moves = moves like Jagger を考える上でヒントになりそうです。

(動画省略)

(拙文「Moves Like Jagger (連想でつながり)」からの引用はここからです。)

自分の似姿に自分を似せていく

他の人に似ているとか、他人を真似るだけではなく、自分に似ているとか、自分を模倣するということがあります。

詩、小説、造形芸術、演劇、イラスト、漫画、作曲、伝統芸能といったクリエイティブな活動にたずさわっている人の作品には、その作り手独自のスタイルや型があります。

これはプロ・アマを問わず見られます。

悪い言い方をすればワンパターンでありマンネリズムです。

あ、これ、〇〇の曲でしょ？ △△の映画は見始めて三分でだいたい分かるね。確かに、このドラマは、いかにも□□さんの脚本ばいストーリーね。これって、あの人の作でしょ？ まだだ！ 「なんでレンブラントだって分かったの？」「背景の色、そして筆さばきかな」

創作とは自分を真似ることではないかと思えるほどです。自分を真似る。自分に似せる。自分の似姿に自分を似せる。

そうやって自分のスタイルや文体や作風ができていきます。

作品という鏡に映った自分の姿を見ていながら、自分により似せていくとも言えそうです。

鏡に囲まれ、鏡の前で自分をつくっていく

ディスコの壁には大きな鏡が張られています。ダンスのスタジオやジムもそうですが、体を動かすという行為と鏡には親和性があるにちがいません。

ナルキッソス、ナルシシズム、水面、鏡、鏡の国。鏡の中にいる自分は自分なのでしょうか。いまだに確信が持てないでいます。

(拙文「ガラスをめぐる連想と思い出」より)

自分を模倣しつづけることは、随時更新することだとも言えるでしょう。鏡に向かい、そこに映った像を眺め、その像（イメージ）を模倣しつづけながら、少しずつずれていく。そのずれが更新なのです。

このずれによる更新とは、鏡に映った自分の似姿との絶え間のない対話とも言えそうです。ああでもないこうでもない、ああだこうだ、と。

*

上で述べた「対話」がよく分かる映画として、映画「サタデー・ナイト・フィーバー」を取りあげてみます。

サタデー・ナイト・フィーバー - Wikipedia
ja.wikipedia.org

ごく普通の青年（ジョン・トラボルタ）が毎週末にディスコで踊ることで、新しい自分、またはもう一人の自分という「作品」をつくりあげていく物語です。

この映画では鏡やガラスが大きな役割をしています。青年は鏡に自分の姿を映すことで、徐々にずれていく、つまり成長していく自分を常に更新していくのです。

映画の予告編を見てみましょう。

0:57 では靴を映します。1:34 ではすれ違う女性の目の瞳という鏡に映った自分を確かめます。2:04 でのショーウィンドウというガラスの中のシャツは未来の自分の姿でしょう。3:24、まだまだみたいです。

(動画省略)

*

以下の編集された動画では、冒頭からさまざまな「鏡」と「自分の似姿」が登場します。

部屋の鏡に映る鏡像、偶像（アイドルやスターのポスター）、衣装（身につけるものは断片化された似姿です）、アクセサリー。

ディスコのミラーボール、人びとの目（瞳は鏡です）、ダンスの振りがつぎつぎと模倣されてシンクロが生じます。「似ている」が増加するのです。

(動画省略)

＊

個人的には、以下の動画の 0:15 の鏡の中で二人が視線を交わすシーン、0:43 あたりからのガラス越しの二人の動きをカメラが追う撮り方、0:55 あたりでウィンドウの外の景色（建物と枝を広げた木）が二重写しになる場面が好きです。

（動画省略）

＊

ストーリーはともかく、この映画は人が自分をつくっていく過程で、さまざまな鏡と鏡像と偶像との出会いがあることを視覚的に気づかせてくれる気がします。

「自分をつくっていく」は、「作り手が自分の作風やスタイルをつくっていく」とも重なるでしょう。

「うつる・うつす、映る・映す、写る・写す」ことで、移ると移り変わるが起きるのです。

こうした過程は、意識的であったり無意識であったりするのですが、両者がまばらでまだらに混在していると私はイメージしています。

映った像の中に「ある・いる」「他者・多者」

自分であると思こんでいる鏡の中の像には必ず他者（多者でもあります）が入り込んでいるはず。自分を眺めることが他者＝多者を認めることでないと誰が断言できるでしょうか。

鏡の中の自分の顔や姿に自分以外の何かを認めるのは、誰もが日常で経験することではないでしょうか。

見るには必ず「ずれ」がともないます。そのずれが何とのずれなのかは、分からないと

思います。そもそも、人は自分を肉眼で見たことも、自分に会ったこともないからです。

「似ている」という思いだけがリアルにあるにもかかわらず、「何に似ているか」が不明なのです。それが自分自身をめぐっての「似ている」であると言えるでしょう。

その意味で、自と他のさかいのない世界とは鏡の中だという気がしてなりません。

鏡に映っているものは「似たもの」なのです。「何か」そのものではありません。それでいて、「何に」似ているのかが不明な「似たもの」なのです。

似ているだけが空回りしている、空振りしている。それが似ているの世界だという気がします。

*

そもそも、人は自分を肉眼で見たことはない。鏡の中の似姿が自分と「似ている」と確認することは自分にはできない。

そもそも、人は世界を目の網膜の像（影）として見ている。見ているのは影だから、世界は何かに似ている。

何かに似ているのです。その何かは何なのとは分からない。ひょっとすると、鏡（この鏡を比喻と取っていただいかまいません、たとえば目とか作品とか人生とか世界、です）に映っているのは「何か」の代わりですらないのかもしれない。

*

影やまぼろしが自立していないとは、私には言い切れません。ひょっとして、人は影やまぼろしにもてあそばれていないでしょうか。主導権を握られていないでしょうか。

最近、そんなことが気になって考え続けています。

#模倣 # お化粧 # 写真 # 鏡 # ガラス # ジョン・トラボルタ # 映画 # ミック・ジャガー
似ている # 似せる # 作品 # 創作 # スタイル # 文体 # マンネリズム # ダンス

04/24 げん・弦（うつせみのたわごと-12-）

＊

げん・弦（うつせみのたわごと -12-）

星野廉

2023年4月24日 07:40

げん——。きになることば。からからきた、ことば。ことのはをもちいて、うらなうというわざがある。おおむかしにも、あったらしい。むかしのほうが、さかんだったかもしれない。ことのはは、うつつとおもいをむすぶ。うつつでめにする、ものやことやさまの、かわりをつとめるのが、ことのはのやくめでもある。

＊

そのかわりのしくみは、どれほどしんじてよいものなのか。まぐれというべきか。それとも、なるべくしてなる、たしかなものなのか。ひとのちからをこえた、なにものかのこえを、そのものになりかわって、ひとびとにつたえるものがいたという。いまも、いる。なにか、あるいは、なにものかが、のりうつるのだ、というはなしもある。あやしい。

＊

てんから、ひとすじのつるがたれている。そのつるをにぎり、いのちがけで、すがりついているひと。そんなさまを、ここにえがいてみよう。つるを、いとと、かんがえてもいい。ぶらさがる。ぶらぶら、ゆらゆら。ひとは、いとと、かぜに、みをまかせるしかない。まかせる。まかす。まける。ひとは、おちないように、ひたすら、いのり、ねんじるしかない。こうしたさまは、ひとがいきているさまと、にている。

＊

ひとこそが、このほしのあるじだと、かんがえているものはおおい。おごりたかぶっているものは、かずしれない。それでいて、かみ、かみがみ、ほとけ、まものがいると、

おそれおののきながら、しんじているものも、かずしれなくいる。いまはなきひとたちのたましい、おのれのおいおやたちのたましい、くさきややまなどにやどる、たましいやちからを、しんじるものたちもおおい。

＊

うつせみにある、ひとのちからをこえた、なにものかをおそれ、うやまう。わざわいがおきたときには、なにものかが、いかっているしるしだとかんがえる。そのいかりをしずめるための、すべにおもいをめぐらす。いのる、あがめる。いけにえ、そなえものをさしだす。そうしたおこないをする、くろうとがあらわれた。そのみちの、くろうとたちは、おのれは、ひとのちからをこえたもののかわりだという。あやしい。いかがわしい。さきに、いったもののかちか。

＊

こわいことは、ほかのひとにまかせよう、とかんがえたものもいたにちがいない。ともあれ、そのみちのくろうとは、どのようなひとか。まぼろしやゆめをみるのに、なれているひと。なにかや、なにものかに、なりきりやすいひと。なりきりがうまいひと。つまりは、かわりをつとめるのに、たけたひとということ。くろうと。げいにん。ぷろ、ふえっしょ、なる。え、きす、ぱーと。つい、でた、からことばなり。でものはれものところきらわず。

＊

いずれにせよ、かりのもの。にせたもの。にせもの。まさか、ほんものとはいへまい。いや、なかには、おのれは、かりのものやにせたものではなく、ほんものだと、いいはるものがあるし、いたらしい。いかがわしい。いかがわしすぎる。みなさま、いかがおもわれますか。ひと、それぞれ。いわしのあたまさえ、ほんまもんになれる。ひとが、ほんまもんになって、どこがわるい。そう、のたまう、あつかましいものがいても、おかしくはない。いや、おかしいか。

＊

ゆるしがたいものは、とらのいをかりる、やから。とらのいをかりて、ほかのひとたちをおどす、やから。いをかりれば、らく。すべてのひとは、なにかの、あるいは、だれかのいをかりながら、いきている。らくだから。らくをしたいというおもいは、だれに

もある。このあほにも、たっぷりある。でも、やりすぎはよくない。ひとのなかには、なにかと、やりすぎているひとがおおすぎる。また、このほしにすむ、いきもののなかで、ひとは、ひときわ、やりすぎている、おそらくゆいいつのいきもの。

*

くいすぎ、のみすぎ、あやめすぎ、たたかいすぎ、きそいすぎ、もちすぎ、ほしがりすぎ、かざりすぎ、ひろげすぎ、ぬすみすぎ、まずしきものととめるものとのさのひらきすぎ、よごしすぎ、すてすぎ、しりすぎ、わけすぎ、でっちあげすぎ、うそのつきすぎ、かんがえすぎ、ゆめのみすぎ、まぼろしのみすぎ、くるいすぎ、ずれすぎ、はずれすぎ、うたがいすぎ、かんちがいのしすぎ、まちがいのしすぎ、とぼけすぎ、わすれすぎ、うみすぎ、ふえすぎ、おごりすぎ、ほかのいきものにちょっかいたしすぎ、いじめすぎ、あそびすぎ、つかいすぎ、もやしすぎ、こわしすぎ、しすぎ、すぎすぎ――。

*

こうやって、ならべて、よくながめてみると、これらを、ひとからとりのぞいたら、なにもこのらないおもいがする。もしも、このほしで、さばきがおこなわれるなら、ひとは、うえであげた、かずかずのつみで、とがめられるにちがいない。いうまでもなく、このたわごとをつづっているあほも、ふくめてのはなし。

*

すぎ、すぎ、すぎ――。やりすぎ。すぎすぎ。おもわず、くしゃみがでた。すぎのおばな、すなわち、ひとでいえば、まらからこぼれる、おとこのたねの、こまかなこな。そのおびただしいこなが、こぼれおち、かぜにのって、まいちり、ひろがるとき、ちかし。はっくしょん。ぐじゅじゅ。かゆいかゆい。くすりをのべば、ぼけ一つ。はらぐだし、するものもいる。お、すぎとぴー、こ。あかい、めと、すいーと、ぴーでは、めもあてられない。このしまじまで、どれだけおおくのひとが、なやみ、くるしみ、どれだけのかねをつかうことか。もとは、よかれとおもって、かってに、ひとがうえた、すぎのなえ。いまは、ひとがなえるもと。やりすぎ。すぎたるは、のちに、きづくなり。こわし。あなどれない、やりすぎ。きづいたときには、もうおそし。きもにめいじよう。

*

はっくしょん。すぎ、ひのき、ぶたくさ、よもぎ、まつ、いねの、はな。はなは、ひ

とでいえば、まらや、ほとなり。すぎや、いねは、べつとして、はながうつくしいのは、はちなどの、むしをひきつけ、つがうてつだいをさせるためとか。なるほど。すぐれたしくみなり。ひとのちからをこえたもののけはいを、おぼえる。ひとは、くさきのはな、すなわち、まらやほとに、ひきつけられ、かざる。なきひとに、そなえるくせもある。きりばな。いけにえ。ちょんぎって、そなえる。きる。kill。あやめて、そなえる、おとなしき、やぎやとりとおなじ。kill。きる。cut。かっど、なってきたのではない。まじめくさったかおで、きる。ほんまもんやから、こわいわー。ちなまぐさい。ひとの、みがって。このほしでは、すべてが、そんなぐあいになっている。いたしかたなし。いたしかた、あるとすれば、ひとがひとでなくなる。なくなる。それは、いたし、かたなし、やるかたなし。やはり、いたしかたなし。かなし。

＊

はなしはちがうが、ひとのあそこは、うつくしいだろうか。ひと、それぞれか。いづれにせよ、ひとは、ひきつけられる。ひきつけあう。ひきつけ、あう。くさき、けものどちがい、ときをえらばず、いつでも、おーけー。なんたる、すきもの。すぎたる、すきもの。すきすぎ。くるえる、さる。ほかのいきものの、あそこをちょんぎる cruel さる。それは、それでいいのではないか。いたしかたなし。

＊

ひとのちからをこえたものの、いをかりた、にせものに、はなしをもどそう。このあほは、そうしたえらそうなやくしゃのげいは、しんじない。ひとをこえたなものかも、しんじていないから、そのかわりのものも、こわくない。だから、あがめたてまつる、ぎりもない。ひと、それぞれ。ちなみに、このあほはしんでも、はかはなし。とむらいも、ほねひろいも、はかもいならない、とかいたかみがある。はんこまで、おしてある。はかなし。のこったもちものは、おかねにかえて、めぐまれないこどもたちにさしあげる、とも、かきそえてある。もうひとつちなみに、おやのとむらいも、なし。はかなし。おやも、それでいいといっている。にたもの、おやこ。ひと、それぞれ。

＊

ぶらぶら、ゆらゆらに、はなしをもどそう。ぶらぶら、ゆらゆらとは、たとえである。ひとのありよう。いきもののありよう。このほしのありよう。このほしをふくむ、おおきなはてしなき、ば、のありよう。そうしたすべてのありようのたとえ。ゆらぎ、うごきといっても、いいだろう。ねつ、ひかりといってもいいだろう。なんとなづけても、それはひとのことわり。そうしたことのはで、さししめそうという、たくらみとは、かか

わりがないと、ひとはこころえるべき。まけをみとめるべき。

*

まけ。おてあげ。どうにでもしてちょうだい。まいりました。ほかになんといえばいいのか。たわごとをかさねるしかない。ひとのわくのなかに、ひとがそとにむかって、なざすものはない。

*

ことわり。すっきり。くっきり。さっぱり。あきらか。まこと。ただしい。たしか。たとえなら、ゆるされるたわごと。にせもの、かわり、かりそめのもの、とこころえるなら、ゆるされるうわごと。ほんまもと、ちゃうで一。まちがえたら、あかんで一。ひとのおもいや、くちからでるものを、まことやほんものなどといって、もったいぶるのは、よそう。でまかせ、でたらめ、むちゃくちゃ、めちゃくちゃ、くらいが、まっとうなひととしての、いさぎよい、よびな。みのほどをこころえた、よびな。

*

まぼろし、ことのは、うつつ、へり、みなもと、ものごとのおこり、まなこでみるものやことやさまのありよう、ぶらぶらゆらゆら。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界、弦界。すべてが、ひとのわくのなかに、おさまる。ひとのまけ。かとう、わくをこえよう、などという、むだなほねおりは、やめよう。できっこない。こころざしを、たかくもちたいものは、ぶらぶらゆらゆらに、さからうのではなく、もてあましているちからを、めぐまれないひとたち、よわきひとたちをたすけることに、むけよう。このたわごとをつづっている、ものぐさで、いくじのないものは、みのほどをわきまえ、おろおろうじうじいきよう。

*

てんからたれている、いとだけは、しっかりと、にぎってしよう。あとは、ひと、それぞれ。

*

このあほのすきなあそびは、さいころをふること。これ、たとえ、ですねん、ねんの
ため、ゆーときます。ことのはという、さいころを、えいやっつ、とふる。わくわく、ど
きどき。ぼろりとでる、め。でるにまかせる、でまかせ。とはいえ、ことのははいとし
い。けなげに、みぶり、めくばせをおくってくれる。まな、かな、かわいい。からことば
のかずかず、これまた、いろけあり。ことのは。ふみ。へたながら、こえにだして、うた
うのも、よし。ただ、ぶつぶつ、つぶやくのも、よし。じづらにながめいるのも、よし。

＊

ことのはとのであい。ひととのであい。ものやことやさまとのであい。であう。この
よに、でたために、あった、ゆかりをすなおによろこびたい。めでたいものとして、う
けとめたい。であい。あい。ずらしてみよう。さいころをふり、でまかせに、であってみ
よう。さいころは、じびきのたとえなり。えいやっつ。ころりじゃなくて、ぺらぺらめ
くる。ど・れ・に・しようかな。

＊

あい、会い、合い、遭い、遇い、逢い、藍、哀、相、間、eye、I、愛。こんなんでもし
たけど——。やっぱり、愛。AIではなく。

◆

以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・
知覚する」(うつせみのたわごと-5-)
- = 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」(うつせみのたわごと-6-)
- = 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・
うつうつ」(うつせみのたわごと-7-)
- = 4) 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・か
げる・翳る」(うつせみのたわごと-8-)
- = 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・
湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」(うつせみのたわごと-9-)
- = 6) 「げん・Gen(※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれ
る・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・
でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」(うつせみのたわごと-10-)
- = 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見(げん・けん)・みる・みわける・わかる・わけ

る・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」(うつせみのたわごと-11-)

= 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」

= 9) 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・○・輪・和・わ」

= 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



「うつせみのたわごと-12-」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する、
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く、
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす、

以上の3つの方法を試しています。

*

* 「うつせみのたわごと -12-」

今回のテーマは、「つる・つるされてゆらぐ・げん・弦」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる弦界です。

ヒトが天から垂れた「つる・弦」または糸につかまって吊るされて、ぶらぶらゆらゆらしている。すべてを何ものかに任せている。

この記事では、「任せる・負ける」という身ぶりが大きな役割を演じています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の存在が前提になっているにもかかわらず、ヒトはそれを知り得ないという立場で話を進めています。ヒトの力を超えた「何物か・何者か」の威を借りる人たちを批判してもいます。

言葉遊びから、ヒトが「やりすぎていること」を列挙していますが、それもまた、人知を超えた現象として描いています。つまり、最終的な善悪さえ断じる力はヒトの側にはない、まして裁く力などないという意味です。

「任せる」から「賭ける」へと話に移り、「出あう・出あい・あい」という圧倒的な偶然性（※もちろん、やらせです、偶然性を装っている＝演じているだけです）の中で、「愛」を出すという、めっちゃくちゃなこじつけで終わっています。

標準的な表記に直したキーワードは、「ぶらさがる」「揺れる」「身を任せる」「祈る・念じる」「驕りたかぶる」「代わりの者」「偽者」「生贄」「身の程を心得る」「サイコロを振る」です。

直接書けなかったキーワードは、「代理（人）」「シャマニズム（シャーマニズム）」「シャーマン」「まつりごと・政・祭事・奉事」「予言（者）・預言（者）」「託宣・神託」「官僚主義」「議会制民主主義＝代表民主制＝間接民主制」「ジェームズ・フレイザー」『金枝篇』「文化人類学」「ステファヌ・マラルメ」「花＝生殖器＝性器」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.13 うつせみのたわごと-12-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がい
だき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた
puboo.jp

(以下の「仮面と人形（仮面編）」と「仮面と人形（人形編）」は、削除してしまはないう
note
のアカウントで投稿した記事のバックアップです。)

仮面と人形（仮面編）

げんすけ 2020/07/10 08:55 仮面と人形の共通点は何でしょう？ 難しく考えないで
ください。両方とも、「人

bloggpostings.blogspot.com

仮面と人形（人形編）

げんすけ 2020/07/11 08:26 前回は、仮面とお面について書きました。身近な体験を例
に取れば、仮面とは、トイ

bloggpostings.blogspot.com

#日本語# 言葉 # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # 自分語 # 代理 # シャーマニズム# まつり
ごと # 官僚主義

04/25 「誤配」を避ける

＊

「誤配」を避ける

星野廉

2023年4月25日 07:41

目次

思い出

使ったことのない言葉

使わない言葉

使えない言葉

思い出

学生時代の話ですが、純文学をやるんだと意気込んでいる同じ学科の人から、純文学の定義を聞かされたことがありました。

ずいぶん硬直した考えの持ち主でした。次のように言っていたのです。

- ・描写に徹する。
- ・観念的な語を使わない。たとえば、神、愛、心、魂、真理、真実、心理、(哲学的な意味での) 存在。
- ・固有名詞、とくに著名人や名所の名前はできるだけ避ける。
- ・決まり文句と定型を退ける。
- ・比喩を使わない。

たしかこんな観念的なことを熱っぽく語っていました。

＊

いまこうやって思いだして書いてみると、魅力的なスローガンに見えてきます。そんな文章を書いてみたいという気持ちになるのです。

それどころか、自分の理想とする文章があるとすれば、まさにそうしたものではないかとすら思えてきます。

透明な文章、零度の文体、純粹な写生文、なんていう言葉とイメージが浮かんできます。

いま私が書いている、思いつきを連ねただけのレトリックだらけの文章とはほど遠い書き方です。

＊

そういえば、その人について思いだしたことがあります。

「神」という言葉を使わないで、神を書いてみないか？ 家族を登場させないで、家族を描いてみないか？

そういう意味の誘いを受けたこともありました。もちろん、受け流しましたが。

面白い人であることは確かでした。いまどうしているのでしょうか。会ってみたいけど仕方ありません。

使ったことのない言葉

ポストモダンという言葉を使ったことはありません。これは、最近気づいたのです。意識的に避けていたわけではありません。

たまたまこの言葉のあるところで目にして、使ったことがないなあと思い、本当かなと疑問が湧いたので、「星野廉 note ポストモダン」「星野廉 はてなブログポストモダン」という具合に検索してみました。

ヒットしなかったところを見ると使ったことはないようです。年を取って自分の記憶に自信がなくなっているから、こんなふうにして確かめる必要があります。

＊

使ったことのない言葉が他にもないかと考えてみました。ポストモダンつながりだと、構造主義も使ったことはないようです。

ポストモダンつながりと、いま書きましたが、構造主義もポストモダンも私にとっては縁遠い言葉なのです。

私がこれまで読んだことのある人たち——おもにフランス人ですけど——がそうした言葉でいっしょくたにくられることがあったし、いまもあるらしいのは知っています。

でも、どうやらその人たちとは関係がないようです。「ようす」なんて言うのは、よく知らないからです。レットルではないでしょうか。その人たちが自分で張ったレットルではなさそうです。

＊

共産主義とか社会主義と似ています。これまでに共産主義や社会主義の国家があったとは考えられません。でも、そうした言葉があります。使われているという意味です。

国の正式名称にも使われているみたいです。「みたいです」なんて書きましたが、これはとぼけていているのです。断定するのも面倒だし、すっとぼけていようという魂胆から出たと言えるでしょう。

政党名もそうですね。この国に数々ある、そしてこれまでに数々あった政党名を思い浮かべてみてください。

名は体を表わしているのでしょうか。口あたりのいい、また見映えのいい美辞麗句にだまされてはならない、という生きた教訓ではないでしょうか。

私なんか「えっ、どこが？」と思う名称ばかりです。与野党、大小、新旧、問わずです。

話を戻しますが、ポストモダンや構造主義には実体がなさそうなのです。

そもそも言葉に実体があるとは夢にも思っていない私ですが、いまの実体というのは、その言葉が指し示す事物くらいの意味です。

名付ける、名指す、AをBと呼ぶーこうした人間の習慣と実体とは関係がありません。そもそも実体という言葉に実体がないのですから。

使わない言葉

ある言葉について話します。

私はその言葉を使うことはめったにないのですが、ある決まった文脈で使うことがあります。あえてその言葉を使わない言い訳を述べる場合に使うのです。

その場合にセットとして、枕詞のように使う言葉があります。それは「誤配」です。

試しに、「誤配」で検索してみます。

メッセージは見た人が決めるのかもしれない。誤解があっても、たいていはそのまま進んでいく。何が進んでいくって、世界が、そして人生が。

未配、誤配、遅配、消失、隠滅、無視なんて、当たり前。行き先不明で、ひたすら進んでいく。

行先不明、正体不明、意図不明、意識不明、意味不明、原因不明、出所不明。それが世界、それが人生。

しかめっ面にならないほうがおかしい。

(拙文「シンクロする、しかめっ面」より)

ごめんなさい。いまのは誤配されてきました。探していたのは、こういう文章ではありません。

自分で検索しておいて、誤配なんて変ですけど。

検索を続けます。

使えない言葉

ありました。

いくつかヒットしましたが、たとえば、これです。

かつては自分は哲学をしているという自覚があったのですが、どうやらこの国で哲学と呼ばれているものは、自分のやっていることとは遠いらしいと思うようになりました。

記事に「哲学」というハッシュタグを付けないのは、そういうことから来る配慮なのです。いわば誤配を避けるためです。

(拙文「内から来る外【引用の織物】」より)

ハッシュタグを付けないし、記事の中でも使うことはまずありません。使えない言葉なのです。

だいたいにおいて、この言葉が使われている文章に出てきがちな、漢字まじりの他の言葉やカタカナ語も使えません。使えないのでご紹介できないのが残念です。

こうやってコピーペーストして引用することで、使えない言葉を使わずに済んでうれしいです。

*

あっ、油断していました。

いま記事を読みかえして気づいたのですが、最初のほうで使っていました。言葉って手ごわいですね。

というか、私がうかつなだけでした。

#言葉# 日本語 # 描写 # 文章 # レtterル # 文体 # 誤配 # 油断 # 引用

04/26 げん・減（うつせみのたわごと-13-）

＊

げん・減（うつせみのたわごと -13-）

星野廉

2023年4月26日 07:45

げん——。きになることば。からからきた、ことば。おおむかし、このしまじまに、からからことばがはいり、もとにあったことばとまじりあったという。ひとのよには、ことのはのかずが、おおいことばもあるし、すくないことばもある。どちらが、ひいでているか、ゆたかか、うつくしいか、というはなしではない。すべのことばは、ひとしい。うえもしたもなし。ただし、なみのひとが、うまれてしぬまでにもちいる、ことのはのかずには、かぎりがある。じびきにしるされたことのはを、すべてしているもの、すべてをつかったことのあるものは、まずいない。とはいえ、ことのはは、つねに、たらない。

＊

つねに、たらない。いつも、かけている。かずが、おいつかない。すくない。これ、減界なり。減界なのは、あたりまえ、わかるから、ふえる。わけまくれれば、ふえまくる。わけたら、わかったしるしとして、なづけて、てなずける。これでは、なまえが、いくつあっても、たりない。おなじおと、おなじよみ、おなじもじの、ことのはがあっても、いたしかたなし。だぶっても、しかたない。つまり、つねに、たらない、いつも、かけている、ということになる。欠けていれば、取り合いになる。取り合いになれば、それは、賭けと同じ。かつかまけるか。かちまけをかける。めちゃくちゃな、こじつけ。こじつけは、かけのいのちなり。こじつけなしに、かけなし。うまのなをこじつけて、ばけんをかうもの、おおし。まらるめの、さいころとおなじ。

＊

ひとは、わけすぎている。だから、たりない。わけしりがおをしても、たらない。のーたりん。まりりん・もんろー、のーりたーん。のさか・あきゆきしの、さくしなり。のーりたーん。かえらざるかわ。りばー・おぶ・のーりたーん。もどるにもどれない。のーりたーん。かえさなくていい。つかいすて。ことのはに、にたり。

＊

ひとは、わける。わけて、わけまくり、わかったことをかたる。また、さらに、わける。わかったことをかたる。こうして、まともや、わけまくる。わけて、かわをむく。いくどもかわをむいて、なにやら、また、かわがみえてきたらしい。ちいさなちいさなつぶが、みえてきたという。あやしく、いぶかしげな、つぶ、なの。そう、なの、よ。ただしくは、つぶでもあり、なみでもあり、ひかりでもあるとか、ないとか。やぶれる、おのれからやぶれる、しぼむ、ゆらぐ、ほころぶ、もつれる、くりこむ、ひも、つりあう、あちこち、あるない、あべこべ、しゃれこうべ、さだまらない、さだまさし、などなど。このたわごとと、かわるところなし。

＊

まえに限界をかたったときにもふれたが、ことばもおもいも、限界にあるとおなじく、減界にある。ことのはは、たりない。ものやことやさまに、くらべれば、そのかずは、はてしなく、すくない。なぜなら、ひとはわけるから。わければ、わけただけ、ことのはがいる。たわけとは、まさに、このことではないか。だから、ことのはは、つねに、たりない。どんなにふやしても、おいつかない。すかすか。すけすけ。まだら。まだらけ。むらだらけ。ざるのように、ざあざあ、もれる。ちいさなうつわにもった、こめつぶのごとく、ぼろぼろ、こぼれおちる。たりない。つねに、たりない。ぬけている。まぬけ。ひとは、おのれを、そうおもうべし。そうおもえば、おごりたかぶるより、いくらかは、かしこし。

＊

わかるために、わける。とはいえ、しろうとには、わけられない。わけがわからない。だから、わけのわからないことは、なんでも、でまかせだ、でたらめだ、とおもうのが、なみのひと。しとうとのくせに、わずらわしくて、しろうともしない。それでいて、くろうとは、わけて、わかったという。かたったはなしが、ただしいとわかったという。それこそ、あやしいはなし。あやまったとしりつつ、いいつくろうとする、くろうと。かたられるだけで、しろうともしない、しろうと。かたりは、かたり。だますことなり。まゆつばもの。いつか、また、あらたなあやしいはなしで、かたられないと、だれがいえらう。かたりつがれる、かたり。やはり、かたりはかたりか。まことのかたこと。かたことのまこと。いくらわけたところで、わかるたぐいのはなしとは、おもえない。あほには、わからない。そういわれれば、かえすことばなし。

＊

まをほろぼし、ことをわけ、いまここにあるものをもちい、はてまでかけはせ、もとをたどり、よりちいさなつぶをおいもとめ、めをこらし、おおきなものまえでおのれのまけをみとめ、わかるむなしさをおもう。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界、弦界、減界。しっぽのないさるからはずれた、くるえるさるの、しにものぐるいのさま。とどまるところをしらぬ。あさましくもあり、むなしくもあるさま。なにかに、にている。えづけされたさるが、なげられたえさを、あさるさまににている。ちは、あらそわれない。ひとは、かしこく、あやまらない。あやまつことなし。そう、ひとはおもいこんでいる。だから、たりなくても、へいちゃら。のーたりん。のーりたーん。

＊

ぼんやり。きりが、たちこめたさま。それが、ひとのめにうつる、うつつのさま。だが、まだら、すかすかになれた、ひとは、それが、くっきり、あきらかだ、とおもう。ひとにかぎらず、すべてのいきものは、わくのなかにある。あえて、わくを、おもうことなし。わくにこだわるのは、ひとだけ。だから、ひとは、おのれがぼんやりのなかにいることを、ぼんやりとおもう。たりない。なにかが、たりない。かけている。なにかが、かけている。そのなにかは、わからない。しらない。でも、しりたい。わかりたい。だから、しかたなく、わかる。わければ、わけただけ、かけらが、ふえる。そのかけらに、な、すなわち、ことのはを、あたえる。なが、たりなくなる。おぼえきれないから、おなじ、なをあたえる。そして、また、わかる。きりがない。それなのに、きりのなかにいる。だから、ぼんやり。たわけた、ことわりなり。

＊

なは、つねに、たりない。それでいて、しんだことのはを、わらい。あらたなことのはを、ほめそやす。しご。しんご。ちがいは、ん、があるか、ないかだけ。たわけ。ん。n。ひっくりかえして、u。ふたつあわせて、m。む。ひっくりかえしたのを、ふたつあわせて、w。だぶるゆー。えいごなり。どうぶるヴえー。ふらんすごなり。uとvは、もとはおなじだというはなし。それにしても、たった、にじゅうろくもじで、ことばをあやつるとは、たいしたもの。まな、かな（ひらがな、かたかな）、ろーまじに、なれた、このしまじまのひとたちには、はかりしれない、しくみ。このたわごとをつづるあほも、くびをかしげるうちの、ひとりなり。

＊

なるべくして、なっている。そうかんがえるしかなし。ややこしく、かんがえれば、ややこしくなる。やさしく、かんがえれば、なんでもない。こと、もの、さまは、みるもの、おもいできまる。おもいはおもい、おもいはかるい。もっとわけたい、もうわけなくていい。ひと、それぞれ。にじゅうろくもじ。おびたしいかずのもじ。ものは、いいよう。ものは、かんがえよう。減界は言界でもあり幻界でもある。

＊

ことのはは、またがる。ことのはだけでなく、ことも、ものも、さまも、またがる。ひとつが、ふたつに、みつつに、よつつに——とまたがる。かさなりあう。からみあう。おもいはおもい、おもいはあつい、とかんがえるひとの、ことわりなり。ただしいかどうか、まことかどうか、ひとには、わからない。まことはかたこと。かたことはまこと。ひとが、おかわりをもちいるかぎり、わからない。減界は言界でもあり幻界でもあり限界でもある。

＊

ことはは、またがる。ひとつが、ふたつに、みつつに、よつつに——とまたがる。おなじなのものが、いくつかあるときもある。にたものどうしは、にくみあう。ひとのさが。にたものたちが、ともにいきることは、むずかしい。そっくりだと、なお、むずかしい。にているは、おなじとはことなる。よに、おなじものはない。そっくりも、おなじとはことなる。おなじなをもつ、にたものたち。おなじなをもつ、ことなるものたち。ちなみに、な・己・汝は、わたしでもあり、あなたでもある。わ・我・吾も、おなじ。てまえ、てめえも、おなじ。もっとも、これは、やまとことばでのなはなしなり。からことばについては、しらぬ。からからきたひとがきいたら、ぶったまげるのではないか。いや、にたような、つくりのことばが、どこかのからにあってもおかしくはない。減界は言界でもあり現界でもある。

＊

じびきを、みてみよう。ひとつのことのはに、いくつかのことわりがしるしてある。みじかいおとのことのはほど、おおくのことわりがある。どういふことなのか。もとがあつて、わかれたのか。きのように、えだわかれしたという、はなしもある。かたや、いまいちがい、かんちがい、なまっただめだという、ことわりもある。そんなものだろう。ことばのものは、ひとのくちからでた、いき。いきもの。いきものは、ひとりあるきする。けつまずくこともある。つまずけば、われる。つるむこともある。つるめば、こがで

きる。そうやって、ことのはが、ふえる。なまりも、ふえる。ことばも、ふえる。減界は言界でもあり Gen 界でもあり原界でもある。

*

まみずのような、ことばはない。どのことばにも、べつのことばのかたことがまじっている。ずれた。はずれた。ゆがんだ。まがった。それが、まとも。すこやかに、そだったあかし。みなもとのいずみに、まみずがあるはずだと、しんじるひとたちが、たまにいます。もとに、もどろう。まことのすがたに、もどろう。かえるに、かえろう。そう、わめく。かえるにかえることはできない。おたまじゃくしは、かえるのこ。だが、かえるは、おたまじゃくしに、かえれない。おたまじゃくしは、ゆらゆら、ぶらぶら、およぐ。そのうち、あしがでる。てがでる。そのうち、かえるとなって、すいすいおよぐ。ひとのこも、おなじ。はいはい、よちよち、ゆらゆら、ぶらぶら、よりみちをして、こどもはそだつ。とはいえ、おとなになっても、よりみちばかり、しているものがおおい。このあほも、そのひとり。ゆらゆら、ぶらぶら。減界は言界でもあり弦界でもある。

*

ことのはは、それがさししめすといわれている、ことやものやさまと、ひとつがひとつに、むきあっているわけではない。ひとつのことのはには、あつみとおもみが、そなわっている。なぜなら、ことのはは、もとは、ひとつがつくった、いいかえれば、くちにしたら、ものである。いったん、くちにされ、つくられたことのはは、ふたり、あるいは、それよりおおくのひとのあいだで、かわされることになる。ひとのかずだけ、そのことのはの、あつみとおもみは、ます。いや、たとえ、ひとりのひとが、あることのはを、くちにしていたとしても、ときとともに、そのことのはは、あつみをまし、おもみを、ますこともあるだろう。わすれられることも、あるだろう。

*

ことのはは、かみ。ぺらぺらの、かみっきれ。ただし、それには、なまえが、しるされている。ひとは、ながしるされたかみっきれを、つぎからつぎへと、なにかに、はりつけ、はがし、また、かわりを、はりつける。おなじものに、なんども、はりかえる。どうして、そんなことをするのだろう。かみが、たくさんあるからか。なまえが、たくさんあるからか。なにかが、たくさんあるからか。いや。たりないからだ。たりないのは、なにかでも、なまえでも、かみでもない。なにかのかわりになるものが、たりないのだ。ねんのためにいうと、かわりとは、なまえではない。かわりとは、ひとのおもいのなかにある、なにかをさししめすと、おもわれている、はっぱのこと。ことのはと、きわめて、

にているが、ちがう。ことのはのかわりともいえる、なにか。かめん、おめん、ますくと、よぶこともできるもの。なにかに、にせたもの、つまり、にせものといってもいい。べらべらした、かわり。うすい、かわでできた、かわり。それが、つねに、たりない。

＊

ことのはは、まぼろし、ゆめ、おもいと、きりはなすことができない。ひとつのことのはが、いくえにも、きこえる。もじとして、つづられたものなら、いくえにも、かさなってみえる。そして、きいたものであれ、みたものであれ、ことのはは、こころのなかで、おもいのなかで、いくつかのゆめのつづや、おもいのつづにわかれ、ぱちぱちと、はじける。すくなくとも、このあほは、そんなつづの、ゆらぎとうごきを、わがみのなかで、かんじる。げん、減、幻、言、現、限、原、源、元、Gen、眼、弦、絃、gen、ゲン——。へる、減る、経る、歴る、謙る、放る、heru、ヘル、hell、Hel、her（※ドイツ語）、Herr（※ドイツ語）——。減界は言界でもあり幻界でもあり眼界でもある。

＊

へる。たりない。ふえる。みちる。そうしたことわりが、であい、ともにすまうところ。それが、ことのはという、ぼ。ことのはにおいては、つじつまあわせは、ふさわしくない。ことのはは、おもいや、まぼろしや、ゆめの、かがみ。おもい、まぼろし、ゆめに、つじつまは、かならずしも、そぐわない。きまぐれ、まぐれ、でまかせ、でたらめ、たまたまが、すべるところ。ことわりは、ことのはのがわになく、あくまでも、ひとのがわにある。というか、ひとは、ことのはと、ことわりとの、あわい、へり、ふちをさまよう。うろうろ、よろよろ、ぶらぶら。

＊

へる、たりない。それなのに、ふえる、みちる。なにごとも、ひっくりかえせば、べつのものにみえる。あべこべ。べこべあ。さかさま。まさかさ。ちがってみえても、おなじこと。すべてのことのはは、ひとしい。ひとしくないのは、ひとのめにうつるから。つまり、そのように、ひとにみえるだけ。そんだけー。そうだ。そうじゃない。そうにちがない。いや、そんなことありえない。どんなにいいあらそっても、おなじこと。あらがう、あらそう、むなし。ねこのみみには、ひとのことわりのこえに、ことわりなし。よそのことばをはなすものには、うちのことばは、ちんぷんかんぷん。ばいす・ばーさ。

＊

へるのきわみは、なし。む。無。ふえるのきわみも、なし。む。無。さしひき、ぜろ。0、○、わ、輪、環、話、我、吾、曲、回、わ、◎、○、0。まあるく、おさめまっせー。わっ。おどろかせて、もうしわけない。もうす、わけ、なし。なんにもない。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界、弦界、減界。ことわけしても、なんにもない。むなし。む、なし。む、あり。おなじこと。

＊

ない、から、あるはうまれない。これ、うそ。ひとにとっては、うそ。ないから、あるを、うむのが、ひと。くれあちお・えくす・にひろ。ちなみに、ひとは、あるから、ないを、うむ、おそれあり。このほしから、いのちといういのちを、ことごとく、なくす、おそれあり。うっそーっ!? ほんまやで一。ほんとに?ほんとに。さしひき、なし。ごはさん。じこはさん。じょうだんや、ないで一。ほんまもんやから、こわいで一。

＊

へる。いくつかのにたものが、ひとつのものにみえてしまう。あわいが、みえなくなってしまう。ことのはで、たとえをあげれば、会う、遭う、会う、合う、あう、というぐあい。／ふえる。ひとつのものが、いくつかのにたものに、わかれてみえてしまう。たとえば、かえる、帰る、返る、還る、というふう。／だぶる。ひとつのものが、ふたえ、みえ、いくえにも、みえてしまう。たとえば、原、源、元、腹、胎、本、素、基というかんじ。／くっつきり。ふたえ、みえ、いくえにみえるものが、ひとえにみえてしまう。たとえば、編、篇、偏、片、扁、辺、へん。

＊

みえてしまう。なぜか、みえる。わけもわからず、みえる。ことわけにたすけられて、みえる。いずれにせよ、みえるだけ。かわりと、にせものだらけの、うつつでよくみかける、ゆめうつつ。ある、わけではない。いる、わけでもない。みえるだけ。ゆめとまぼろしのなかに、なにが、ある、だろうか。なにものが、いる、だろうか。

＊

みえる。どんなふうにもみえる。眼界は、絃界のはたらきを、つよくうけている言界のごとく、きわめてきまぐれであるがゆえに、減界とGen界がかさなり、それが原界を

なして、かぎりなく幻界と現界とせつする限界にある。ことわっておくが、これは、ことわりではなく、うたであり、たわごとなり。ここにつづられたことのはは、しんじるにあたいせず。うたのように、ききながすべし。

＊

へる。ない。たりない。かける。すかすか。ばらばら。ちりぢり。とびとび。ちょっと。ちょっぴり。

＊

ふえる。ます。みちる。つまる。うようよ。ますます。いよいよ。いっそう。いっぱい。

＊

〇と1、でじたる、いちかばちか、うむ、有無、〇E、 ∞ 、0、かぎなく0、n、なのよ。それで、ことたりる。すかすかでも、おーけー。ちょっとでも、のーぷろぶれむ。たっぷりすかすか。ちりぢりにうようよ。

＊

ぜろさむ。つどのつまりは、なんにもないちゅー、ことか。zero sum。zero thumb。digital。もとは、finger と、じびきにあり。ゆびおりかぞえる。おおむかしのひとは、どうやって、かぞえたのか。

＊

ゆびを、おる、まげる。おる。おれる。あかんなー。まげる。まがる。ねじける。ひねくれる。このあほみたい。あかんなー。なまって、まがう。まがいもの。まちがう。やっぱ、あかんなー。まげる。"がぬけおちて、まける。あかんなー。かぞえるも、ことわりなり。というより、かぞえるこそ、ことわりなり。ことのはより、ふるいかも、しれぬ。

＊

てと、あしの、ゆびだけでは、たりない——。いや、だいじょうぶ。げんこと、ゆび
 いっぽん、さえあれば、なんとかなる。にほん、ゆびの、ヴいさいん。〇と1、でじた
 る。〇と1、で事足る。〇と1で、ことたりる。なるほど。そのかわり、ちょーはよう、
 うごかな、あかんでー。はんばや、ないでー。

＊

やっぱ、すぽこんや。にぼんででは、やれん。ほー、そうかいな。しわけで、えーだ
 の、あーだのいっても、らちがあかん。というわけで、しゃしゃりでてきた、りけいの
 おやぶんの、どーかつ。りけん（※だぶるみーにんぐ）の、ごねとく。のべるなかまのよ
 りきりで、かち。おめでとさん。で、だれのとくに、なるの。しょみんでないことは、た
 しか。【※出演者、3名+端役数名。】

＊

こんぴゅーた しゃかりきにうごけば ないものはない

つかれをしらず あさぼんはたらく でじたるうま

れいといち それだけあれば ひとおよろこび

はらいっぱい まだたりないのは のうみそだけ

みえないつぶ あらたにでてきた ひまつぶし

きりはなし えんえんとおもちゃに もてあそばれ

へるはなしなのに いっこうにへらず へらずぐちをたたくのみ

＊

へる。hell。Hel。じごくへ、まっしぐら。Help!

＊

へる。たりない。このほしの、ゆくすえだけは、まじ、やばそう。ゆめでも、まぼろし
 でもなさそう。おそらくのはなしだが——。だから、みんなで、めをさまそう。ひとであ
 るかぎり、おそらく、としかいえぬかなしさ。かわりだけを、あいてにせざるをえない、

ひとのよるべなさ。さが。かなしさ。まぼろしよ、まぼろしであってくれ。ゆめよ、ゆめであってくれ。くるいよ、くるいであってくれ。たわごとよ、たわごとであってくれ。



以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」(うつせみのたわごと-5-)
- = 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」(うつせみのたわごと-6-)
- = 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」(うつせみのたわごと-7-)
- = 4) 「げん・限・限界・限度・境い目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」(うつせみのたわごと-8-)
- = 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」(うつせみのたわごと-9-)
- = 6) 「げん・Gen(※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」(うつせみのたわごと-10-)
- = 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見(げん・けん)・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」(うつせみのたわごと-11-)
- = 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」(うつせみのたわごと-12-)
- = 9) 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえず・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえず・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・○・輪・和・わ」
- = 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」



「うっせみのたわごと-13-」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する。
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く。
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす。

以上の3つの方法を試しています。

*

* 「うっせみのたわごと -13-」

今回のテーマは、「減る・足りない・げん・減」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる減界です。

言葉の遊びを多用しながら、「減る・足りない・欠ける」と「増える・足りる」とが言葉では矛盾しても、言葉の枠外では矛盾しないことを、言葉たちに演じてもらっています。

再読すると、反意語や反対語と呼ばれている2項対立のからくりに対する懐疑と嫌悪感が表れているのを感じます。結果として、「減る」をめぐる言葉が「増える」こととなり、長い記事になりました。

原理は単純です。ヒトは分ける。分けたものに名前を付ける＝分かったことにする。名前が増える、つまり、名前が足りなくなると（ヒトの処理能力を超える）。「事＝言足りる」が「事＝言足りない」となる。

そうすると、訳＝分けが分からなくなってくる。「分けた＝分かった＝知が増えた」とならず、「分けた＝分かっていない＝知が欠けている」ことの確認にしかならないという「わけ」です。

さらに、ヒトの知覚・認識・意識における集中力および持続力、データの保存容量、データの再現力・再構築力には限りがある。知が増えたはずが、常に減った・足りない

感じがする。

要するに、減界は限界でもある。そんな話なのです。

ヒトは自分で意識しているよりは、はるかにぼーっとしている。すかすかの意識とまだらの認識の中にいる。と要約することもできます。ただし、ヒトが考え出した、すかすかの2進法でも、疲れを知らない機械ならば、そこそこの働きをすることが可能です。

標準的な表記に直したキーワードは、「足りない」「間が抜けている」「たわける・戯ける」「ぼんやり」「26文字」「重なる」「またがる」「絡み合う」「だぶる」「厚み」「重み」「多い」「多すぎる」「忘れる」です。

直接書けなかったキーワードは、「対応」「写像」「関係性」「語彙」「分類」「命名」「ラベル・レーベル」「博物学」「言と事の同一視」「言葉と物」「ミシェル・フーコー」「語の多義性・多層性」「アルファベット」「辞書・百科事典の編さん」「デジタル」「コンピューター」「ゼロサム」「ナノテクノロジー」です。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.14 うつせみのたわごと-13-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた

puboo.jp

参考記事

(以下の「わかるという粹」と「わかるはわからない」と「わかるはプロセス」は、削除してしまはないうnoteのアカウントで投稿した記事のバックアップです。)

わかるという粹

げんすけ 2020/09/14 09:00「翻訳の可能性と不可能性」の続きです。 この数日間、前置きが長くなって本題に

bloggpostings.blogspot.com

わかるはわからない

星野廉 2020/09/21 12:51「わかるという粹」の続きです。 今回は、これまでとは異なった視点から、*「わ

bloggpostings.blogspot.com

わかるはプロセス

星野廉 2020/09/22 07:50 「わかるはわからない」の続きです。 結論から書きます。 ま
ず、記号バージョン

bloggpostings.blogspot.com

#日本語 # 言葉 # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # 自分語# 対応 # 写像 # 関係性 # 分類
名称

04/27 つかった水を大河にかえす

＊

つかった水を大河にかえす

星野廉

2023年4月27日 07:43

目次

ジャンル、ノンジャンル

つながり、枠、伝統

つかった水を大河にかえす

ジャンル、ノンジャンル

私は Twitter にもアカウントを持っていますが、Twitter には〇〇垢と呼ばれるつながりがあります。私はとくにどの垢にも属していないもようです。他人事のように言いましたが、ひとさまがどう見ているのかよく分からないのです。尋ねたこともありません。

私って何垢なんですか？　なんだが決まりが悪くて聞けませんよね。

たとえ誰かが教えてくれたとしても、「ああ、そうでしたか。私って〇〇垢だったの」とすんなりと納得できない気がします。

＊

そんな私ですが、いろいろな垢を自認したり自称なさっているにちがいない人たちと相互にフォローをしています。

読書、詩、創作、小説、短歌、俳句、映画、写真.....。

近づくのを遠慮しているジャンルもあります。ツイートの「誤配」を避けるためなのですが、苦手な分野は誰にでもあると思います。

＊

ここ note はどうなのでしょう？ やはり、ある特定のジャンルを意識なさって活動なさっている方もいらっしゃるようです。ハッシュタグが、だいたいの目安になります。

私の場合には、とくに自分の書くもののジャンルは意識していません。

以前は、それなりに悩んだこともありました。エッセイ、散文、小説というタグはよくつかいました。いまは小説を投稿していないので、小説をタグにするときには、単に小説を扱っている記事だという意味です。

あえて言うなら、私の記事はノンジャンルでしょうか。無印がブランドであったり、無所属が所属を表わす名称であったりしますから、ノンジャンルもジャンルと見なされそうです。

つながり、枠、伝統

これまでの人生を振りかえると、私はきょくたんに入社をしないほうですし、学校や短期間勤務しただけの会社くらいしか、集団に属したことがありません。

比較的自由に振るまうことができた大学時代には、サークル活動には参加せず、ゼミのコンパにも出ませんでした。

年賀状をやり取りしている人も組織もありません。

そんなものだと思っているので、寂しく感じることはないです。

＊

ジャンルに話を戻しますが、ジャンルにはなんらかの形で、人的なつながりと粹と伝統が付きものです。

私はそうしたものが苦手です。

自分の書いたものがなんらかの粹や集団や伝統につらなっていると考えるのがつらい気持ちがあります。

窮屈なのです。

書き方や内容に干渉されたくないという思いは強いほうだと思います。

つかった水を大河にかえす

言葉をつかう以上、これまで言葉をつかってきた人たちとつながるのは当然です。そうしたつながりを否定するほどには分からず屋ではないつもりです。

言葉は私が生まれたときに自分のまわりにすでにあったものであり、それを真似て学ぶことで習得してきたからです。

言葉は借り物なのです。誰にとってもそうでしょう。

借りたらお返りする。それでいいのではないのでしょうか。

*

つかった言葉はきっと私の手垢で汚れているはずですが、でも、きれいにして返す必要はないと思います。

よごれているのは、それが私の生きた証であり、私のつかった印でもあります。

人として生きている以上、その点で遠慮することはないと私は考えています。

ずっとついていた水はよごれていて当然です。よごした水を大河にお返りする。

河は大きいほど、よごれているのに気づきます。海に近いほど濁ってもいます。においもします。

川も河も、そうやって海にかえっていくのでしょうか。みんなでかえっていくのでしょうか。

note # Twitter # ジャンル # ノンジャンル # つながり # 伝統 # 言葉

04/28 連想でつなく、壊れる

＊

連想でつなぐ、壊れる

星野廉

2023年4月28日 07:42

目次

見える「壊れる」、見えない「壊れる」

壊れる、崩れる

山の音

コワレル、クズレル

ぼきっ、ぼきっ

崩壊

ゲシュタルト崩壊

内容は、ないよう

嘔吐、吐き気

Der Ekel, das Ekel

小説を壊す、小説が壊れる

逸脱することで、型を壊し壊れる

「Das Ekel」

嫌悪、悪心、☒心

見える「壊れる」、見えない「壊れる」

こわれる。こわす。

見えるものだけでなく、目でとらえられないものも壊れると言います。おなかを壊す。でも、おなかが壊れるとは言わないようです。

私はよく「心が壊れる」という言い方をしますが、「心を壊す」もいつか試してみたいです。

「気持ちが壊れる」や「気持ちを壊す」はびんと来ません。「魂が壊れる」と「魂を壊す」はなかなか言えている気がします。つかえそうです。

壊れる、崩れる

「こわれる」に似た言葉に「くずれる」があります。「こわれる」は高めの音で派手に壊れて、「くずれる」は低い音を響かせて地道に、そして着実に崩れるイメージがあります。

山崩れや雪崩がそうです。「崩れる」は自然っぽく、「壊れる」は人工っぽい気がします。

「建物が壊れる」とか「壁が崩れる」みたいに。壁は「岩壁」のように自然にもありそうです。

話は変わりますが、環境問題とか異常気象という責任を回避したい思惑が見え見えの婉曲表現、よりも環境破壊とか気象破壊とずばりと言ったほうがいいと思います。

破壊もたしかに派手で怖いのですが、崩壊には自立的な不気味さを感じます。そうなったら、もうおしまいみたいな気がします。

環境問題<環境破壊<環境崩壊

異常気象<気象破壊<気象崩壊

最後の最後は欠片や破片が飛び散るのではなく、崩れて塵（ちり）や煙となって消えていく感じがします。

*

「山が崩れる」というと幸田文の『崩れ』を思い出します。そのものずばりの「山の崩れ」を老いた作家がわざわざ見に行った記録です。

なぜ？ なぜ、そこまでして？ 不可解な衝動に満ちた不思議な魅力のある作品でよく読みかえます。

『崩れ』（幸田 文）：講談社文庫 製品詳細 講談社 BOOK 倶楽部

山の崩れの愁いと淋しさ、川の荒れの哀しさは、捨てようとして捨てられず、いとおしくさえ思いはじめて……老いて一つの種の芽吹い

bookclub.kodansha.co.jp

山の音

崩れと言えば、大山鳴動して鼠一匹。鳴動、つまり地響きは低音が基調ではないでしょうか。ごーっという感じ。

山の音——。川端康成の『山の音』に出てくる山の音も、低い響きだという気がします。

” そうして、ふと信吾に山の音が聞こえた。

(……)

遠い風の音に似ているが、地鳴りとでもいう深い底力があった。”

(丸括弧は引用者による)

(川端康成『山の音』新潮文庫 p.10)

この部分を読んでいると、音が聞こえるというよりも響いてくる気がしてなりません。

新潮文庫 山の音 (新版)

尾形信吾、六十二歳。近頃は物忘れや体力の低下により、迫りくる老いをひしひしと感じている。そんな信吾の心の支えは、一緒に暮ら

www.kinokuniya.co.jp

コワレル、クズレル

壊れる、こわれる、コワレル。崩れる、くずれる。クズレル。

こわれる。kowareru——「a」と「k」のせいでしょうか、どこかかん高い。

くずれる。kuzureru——「u」が二つで「z」があるせいでしょうか、どこか低い響きが.....。

イメージは個人的なものです。なかなか人には通じません。

ぼきっ、ぼきっ

「おれる」と「おる」はどうでしょう。

「心が折れる」は最近よく見聞きします。はじめは異和や違和を覚えました、いまではしっくりします。耳や目になじんだのでしょうか。

「おれる」は、ぼきっとか、ぼきっとおれる感じがします。長かったり、筋があるものが「折れる」のでしょうか。枝が折れるとか骨折みたいに。

「折れる」は「壊れる」や「崩れる」にくらべて、私たちの体でもリアルにありそうな感じなので、それを連想するとぞっとします。

「裂ける」もそうですね。「折れる」や「裂ける」や「ちぎれる」は体感的な記憶としてよみがえるのです。オノマトペに近い語感がします。

和語だからでしょうか。漢語にくらべると、和語のオノマトペ度は高いという印象が私にはあります。頭ではなく、ずっと体に入ってくるのです。

崩壊

崩壊。崩れて壊れるのですが、漢字で見るとずっと迫力があります。漢字は厳めしいのです。いかめしいのではなく厳めしい。

厳格、厳然、威厳。漢字は偉そうにも見えます。もったいぶっているのです。

ゲンカク・genkaku、ゲンゼン・genzen、イゲン・igen。音読しても、厳めしいし怖くもあります。

「ないもの」を「ある」ように見せるのが漢字。字面、つまり顔が厳めしい。強面です。

私は「無」に「ある」を感じます。「無」には、「ない」にないものが有ります。

＊

「無」なんて書かれると「ある」を感じてしまうとか、「無」に「ある」がつまっていた気がすると言えば、分かっていたのでしょうか？

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

あるあるあるあるある

無 = あるあるあるあるある.....

ゲシュタルト崩壊

崩壊感覚。

野間宏の小説で『崩壊感覚』がありますが、その字面にぞくっときます。読んだことはありません。

野間宏 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

ゲシュタルト崩壊。

意味不明であったり意味不在であったりするカタカナ語ももっともらしいし、字面によっては厳めしいものです。

内容は、ないよう

ゲシュタルト、ザイン、ダザイン、テーゼ、アウフヘーベン。

ドイツ語をカタカナにするるとごちごちした感じがします。厳めしいのです。日本語における漢語に匹敵する物々しさを覚えます。濁音のせいでしょうか。あと、字面も。

シニフィアン、シニフィエ、エクリチュール、パロール。

フランス語をカタカナにするるとほわーんとした感じがします。厳めしくはありません。私の印象を正直に言うと泡みたいなのです。鼻に抜けていく鼻母音のせいかもしれません。あと、字面も。

『存在と無』(日) がちがち

L'Être et le néant (仏) ほわーん

Being and Nothingness (英) で？

Das Sein und das Nichts (独) ごちごち

El ser y la nada (西) さらさら

言葉における発音と綴りの印象は大きいと痛感します。音と字面、ファースト。まるで内容は、ないようです。

嘔吐、吐き気

『崩壊感覚』といい『真空地帯』といい、野間宏の小説のタイトルは、なかなかイメージの喚起力のある字面と響きだと感心しないではいられません。

『陥没地帯』(蓮實重彦作) もいい感じですね。「安全地帯」よりは遙かに厳めしいです。

陥没地帯 オペラ・オペラシオネル

三島賞受賞作「伯爵夫人」に先立つ小説二編...戦争と官能の気配にみちた蓮實文学の精髓。

www.kinokuniya.co.jp

『嘔吐』(サルトル作)もすごいイメージですが、原著の『La Nausée』は『吐き気』という感じらしいです。

嘔吐 (小説) - Wikipedia

ja.wikipedia.org

学生時代に当時東京日仏学院の院長だったモーリス・パンゲ (Maurice Pinguet) さんと話をしている、「『嘔吐』は「吐き気」だと言われていますが、そうなんですか？」と尋ねてみたところ、「そうです、吐き気ですね」とおっしゃっていました。

嘔吐 (日)

吐き気 (日)

La Nausée (仏)

Nausea (英)

Der Ekel (独)

La náusea (西)

嘔吐感とか嘔吐感覚なら吐き気に近いかもしれません。でも、まだるっこいですね。やっぱり、即物的な嘔吐の競り勝ちでしょうか。

Der Ekel, das Ekel

サルトルの La Nausée (ラ・ノゼみたいに発音します) のドイツ語訳である Der Ekel (デア・エッケルみたいに発音するようです) を見て、はっとしたので、調べてみました。

La Nausée Jean-Paul Sartre

www.amazon.co.jp

6,271 円

(2023 年 04 月 24 日 15:11 時点 詳しくはこちら)

Amazon.co.jp で購入する

Der Ekel

www.amazon.co.jp

1,737 円

(2023 年 04 月 24 日 15:15 時点 詳しくはこちら)

Amazon.co.jp で購入する

Der Ekel を藤枝静男の小説で見た記憶があったのです。それで、家にある藤枝の本を取りだしてぺらぺらめくってみました。

小説を壊す、小説が壊れる

藤枝静男は古井由吉と同様に小説というジャンルを壊そうとした書き手だったと私は受けとめています。

古井由吉は律儀に壊し、藤枝静男は恩師に遠慮しながら書いているうちに壊れていったという気がします。とにかく壊したのです。だから、両作家の作品に惹かれるのだと思います。

＊

古井由吉の場合には、作家となるまでに大学でドイツ文学とドイツ語を教えていた経歴がその後の作家活動を左右したように思われます。

とりわけヘルマン・ブロッホとロベルト・ムージルについての論考（『日常の“変身”』（作品社）所収）を読むと、古井がなぜあのような読みにくくて不思議な小説を書いたのが自分なりに納得できる気がするのです。

いわば小説を「壊した」、ドイツ語で書いた二人の作家の軌跡を律儀になぞるような小説を書いていたという印象を受けるという意味です。

言い換えると、古井の出発点には、ドイツ語で書かれた「崩壊」をはらむ一連の小説の読解（そして、おそらくその翻訳にかかわったこと）があったと考えられます。

” 論理体系の崩壊は、人が事物をあらたな眼で眺めるときに起るのではない。むしろ、論理体系が崩れ去ったそのとき、人ははじめて事物をあらたな眼で眺めるようになる。つまり、論理体系の崩壊はあたらしい現実との触れあいによって惹き起こされるのではなくて、論理独自の領域のうちにおいて、論理が無限性の問題にゆきあたるとき始まるのである。これは論理体系の崩壊という現象に関するブロッホの基本的な考えであった。

すなわち、それは自己分解でなくてはならない。”

(太文字は引用者)

(古井由吉「ヘルマン・ブロッホ「ウェルギリウスの死」」 pp.165-166 (『日常の“変身”』(作品社) 所収))

以上の文章の最後のセンテンスには注の番号が振ってあり、この箇所はヘルマン・ブロッホによる「価値の崩壊」という文書を参照したもようです。

私は古井の小説を読んでいて行きづまると、この「ヘルマン・ブロッホ「ウェルギリウスの死」」によく目を通しますが、古井の作品（たとえば『杏子』や『仮往生伝試文』や『野川』）への良いガイドになってくれる気がします。

講談社文芸文庫 仮往生伝試文

寺の廁でとつぜん無常を悟りそのまま出奔した僧、初めての賭博で稼いだ金で遁世を果たした宮仕えの俗人—平安の極楽往生譚を生きた

www.kinokuniya.co.jp

逸脱することで、型を壊し壊れる

藤枝静男は、作品の中でやたらとその作品について言い訳をしますが、そこにたいてい瀧井孝作の名が出てくるので——たとえば、『虚懐』『空気頭』『風景小説』——、思わずにっこりしてしまう自分がいます。

「また叱られそうですが、こんなのを書いてしまったのです……。」と言いたげな、恩師に対する気兼ねなののでしょうか。なかなか可愛い面があるのです。

藤枝静男 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

＊

さきほどは、藤枝静男は恩師に遠慮しながら書いているうちに壊れていったという気がするが、その一方で私小説を次第に崩していった果敢な作家という相反するイメージも持っています。

自他と時空が錯綜した世界を描く『田紳有楽』を読み、それ以前の藤枝の諸作品に出て来る事物や風景のコラージュのような作りに「なるほど」と得心した記憶があります。藤枝静男という作家の内的な必然を感じたのです。

『田紳有楽』では、「私」という一人称の語り手——池の底に住むグイ呑みであったり、弥勒菩薩の化身であったり、柿の蒂と呼ばれている抹茶茶碗であったり、本名は滓見白という井鉢であったりします——が、あたかも目だけ、あるいは意識だけになって、懐かしい藤枝的風土を漂い、さまよいます。

さまよいながら、藤枝ワールドに出てきたさまざまな物や生き物や想像物と交流を重ねるのですが、そもそも藤枝の諸作品では常に語り手や登場人物がさまよい歩きます。さまようことこそが藤枝静男における「私」の身振りなのです。

講談社文芸文庫 田紳有楽；空気頭

あくまで私小説に徹し、自己の真実を徹底して表現し、事実の奥底にある非現実の世界にまで探索を深め、人間の内面・外界の全域を含

www.kinokuniya.co.jp

荒唐無稽だと言われることの多い『田紳有楽』ですが、むしろ藤枝静男の「私小説」群にしっくり収まっていると言えるでしょう。

生と死、彼我（自他）、物と心、世界と自分、空想と現実、こことかなた、現在と過去——そうした対となる要素の境を取り払った上での、「私」の小説という意味での私小説であり心境小説なのです。

＊

短編集『欣求浄土』の最後の掌編である『一家団欒』には、登場人物が意識だけの存在になってふわふわと漂いながら一族の墓場に赴く記述があるのですが、『田紳有楽』の前奏だったように思えてなりません。

また、藤枝が『空気頭』で試みた飛躍は、私小説作家を自認し自称していた藤枝にとっては内的必然であったと私は理解しています。

「私はこれから私の「私小説」を書いてみたいと思う。」と藤枝は『空気頭』の冒頭で述べ、続けて次のように書いています。

”私は、ひとりで考えて、私小説にはふたとおりあると思っている。そのひとつは、瀧井氏が云われたとおり、自分の考えや生活を一分一厘も歪めることなく写して行って、(中略) もうひとつの私小説というのは、材料としては自分の生活を用いるが、それに一応の決着をつけ、気持ちのうえでも区切りをつけたうえで、わかりいいように嘘を加えて組み立てて、(中略)

私自身は、今までこの後者の方を書いてきた、しかし無論ほんとうは前のようなものを書きたい慾望のほうが強いから、これからそれを試みてみたいと思うのである。(後略)”
(藤枝静男『田紳有楽 空気頭』講談社学芸文庫 pp.143-144)

そう書きながら、藤枝は『空気頭』において従来の私小説から逸脱し、その型を壊していくのです。

この引用部分で、藤枝が逆説を述べているとか、まして冗談を言っているのだとは思いません。藤枝は小説に対して律儀なのです。内的必然を言葉にただけです。

*

古井の場合も藤枝の場合も、自分の書いてきたジャンルを壊すというのは、私にはいさぎよい行為に感じられてなりません。尊敬します。

「Das Ekel」

Der Ekel に話を戻します。

藤枝静男の『悲しいだけ・欣求浄土』という短編集に「厭離穢土」という小品があってその中に見つけたのですが、das Ekel でした。

”今から約四〇年前、二〇まえの私は教師から das Ekel という単語を学んだ。その時分教科書に使われていたトーマス・マンの「道化師」という短篇小説中に、作品を貫く基調として屢々しばしばでてきた言葉で、これは「嫌悪」と訳すのだと教えられた。たいがい、das Ekel! というふう后感嘆符つきになっていたように記憶している。別に ekelhaft という形容詞の形でも多く使われていた。(……)

私はこの単語を、そのころの自分をとりまいていた狭い外界、血族や級友や教師や、それから漠然と不可解ではあるがしかしどうしても嫌悪の情以外の眼では見ることでできない社会全体に投げつける形容詞として、感情的な同感をもって受け入れた。”

(太文字と丸括弧内は引用者)

(藤枝静男「厭離穢土」(『悲しいだけ・欣求浄土』講談社文芸文庫所収) p.123)

講談社文芸文庫 悲しいだけ；欣求浄土

緊張した透明度の高い硬質な文体。鋭角的に切り抉られた精神の軌跡。人間の底深い生の根源を鋭く問い続ける藤枝静男の名篇「欣求浄

www.kinokuniya.co.jp

私は記憶力はよくありません。しかも、いまでは物忘れがかなりひどくなっています。そんな私が藤枝静男の小説の細部を覚えているはずがありません。

なぜ覚えているのかと記憶をたどっていたところ、思い出しました。蓮實重彦の文章です。

講談社文芸文庫「私小説」を読む

志賀直哉、藤枝静男、安岡章太郎を貫く「私小説」の系譜一。だが、著者はここで日本文学の一分野を改めて顕揚したり、再定義を下し

www.kinokuniya.co.jp

*

蓮實重彦の『「私小説」を読む』増補新装版(中央公論社)に「藤枝静男論 分岐と彷徨」があるのですが、「II 恥辱と嫌悪、そしてその平坦な舞台装置」という章があり、その小見出しに「Das Ekel」(ダス・エッケルみたいに発音するようです)があります。

その小見出しだけでなく、この章全体のキーワードが「Das Ekel」（嫌悪）なのです。

藤枝静男の小説を読んだ記憶というよりも、この章を読んだ記憶が残っていて、La Nausée のドイツ語訳である Der Ekel に反応したようです。もやもやが解けました。

嫌悪、悪心、☒心

試しに、ネット検索で「吐き気 ドイツ語」「嘔吐 ドイツ語」「嫌悪ドイツ語」をキーワードにして調べてみました。

結果を言います。

der Ekel (男性名詞) : 吐き気、むかつき、嫌悪 (感)

das Ekel (中性名詞) : (軽蔑的に) いやなやつ

(※ウェブ上の「プログレッシブ独和辞典」を参考にしました。)

こういうことらしいのです。医学用語ではないようです。

*

たしかに、吐き気を「悪心・おしん」と言いますね。国語辞典では「悪(お)」(あくではなく)の語義として「不快なこと。気分のわるいこと。「悪寒・悪心」という記述があります(広辞苑)。

なお、ウィキペディアで調べると、サルトルの La Nausée の中国語版は、「☒心(小☒)」だそうです。「悪心」ぽいですね。

☒心(小☒) - ☒基百科, 自由的百科全☒

zh.wikipedia.org

嘔吐と吐き気から脱線してしまいましたが、そのおかげで勉強になりました。

*

今回のテーマは「壊れる」「壊す」でしたね。

「壊れる・壊す」から出発して連想ゲームをしているうちに、「吐く」とか「戻す」になったというわけです。

連想の基本は脱線ですから、戻したり戻らなくてもいいのですが、これで戻ったこと
にしておきましょう。

#連想 # イメージ # 川端康成 # 幸田文 # 破壊 # 崩壊 # 野間宏 # サルトル # モーリス・パンゲ # 古井由吉 # ヘルマン・ブロッホ # 藤枝静男 # 蓮實重彦 # 嘔吐 # 漢字 # 日本語 # 英語 # フランス語 # ドイツ語 # 翻訳 # 小説

04/29 言葉は声と顔が命、意味は二の次

＊

言葉は声と顔が命、意味は二の次

星野廉

2023年4月29日 07:44

今回は前に書いた記事へのツッコミというか、連想でつなぐというか、しりとりみたいにつなげてみます。

以下の見出しの文章「内容は、ないよう」は「連想でつなぐ、壊れる」という記事からの引用です。この文章につなぐ形で記事を書いてみます。

目次

内容は、ないよう

言葉は声と顔が命

意味が不明、コンセンサスがない

音と文字は物

意味は見えないし聞こえない

冷遇し礼遇する

言葉に言葉を重ねるのは「ない」に対する根本的な解決策ではない

意味の意味について考える意味

「ない」が「ある」ように見える

意味は「ない」から「つくる」

言葉は伝わっても、意味は伝わらない

言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

意味はまちまち

刺身のつまの製造を外部に委託する

内容は、ないよう

ゲシュタルト、ザイン、デザイン、テーゼ、アウフヘーベン。

ドイツ語をカタカナにするとごちごちした感じがします。厳めしいのです。日本語における漢語に匹敵する物々しさを覚えます。濁音のせいでしょうか。あと、字面も。

シニフィアン、シニフィエ、エクリチュール、パロール。

フランス語をカタカナにするとほわーんとした感じがします。厳めしくはありません。私の印象を正直に言うと泡みたいなのです。鼻に抜けていく鼻母音のせいかもしれません。あと、字面も。

『存在と無』(日) がちがち
 L'Être et le néant (仏) ほわーん
 Being and Nothingness (英) で?
 Das Sein und das Nichts (独) ごちごち
 El ser y la nada (西) さらさら

言葉における発音と綴りの印象は大きいと痛感します。音と字面、ファースト。まるで内容は、ないようです。

【※引用はここまでです。】

言葉は声と顔が命

たしかに言葉においては、発音と見た目が大切です。

言葉は「声・音」と「顔・字面」が命。意味なんて刺身のつまだという気がしてなりません。

なにしろ、人はまず〇△Xという言葉——「声・音」と「顔・字面」——をつくり、次に「〇△Xとは何か？」——その意味(内容)を問う——と、えんえんと思い悩む生き物なのですから。

まさに内容は、ないようです。

いまもそうですよね。「○△Xとは何か？」をめぐって、ああでもないこうでもない、ああだこうだともめています。

「あいつらは○△Xだ」と国のトップが決めて、それに国民も他の国々も付き合わされる形で戦争になっている場合もあります。

暴力を合法的に行使できる権力を握っている人が、「黒いカラスは白いサギだ」と言えば、黒いカラスの意味は白いサギになる。

言葉の意味は、腕力、武力、暴力、権力、要するに力で決まるようです。その次に来るのが、お金と面子でしょうか。

お金をもらうためや失わないために、そしてなによりも自分（たち）の面子をたもつために、人は意味をつくったり意味を決めます。

言葉における「内容は、ないようだ」問題はきわめて深刻なのです。

意味が不明、コンセンサスがない

人はまず○△Xという言葉——「声・音」と「顔・字面」——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問う——とえんえんと思ひ悩む生き物である。

無数の○△Xたちがあり、その内容つまり意味をめぐってのすったもんだが繰り返されてきて、いまも繰り返されている。

大昔の○△Xたちについて意味が不明になっているとか忘れていたのならまだいいです。

いまつかわれている○△Xたちについて、同時代人たち、同じ言語を話すはずの人たちのあいだで、コンセンサスがあるようでないようなのです。

たとえば、「正義」という言葉ですが、相手がどういう意味で使っているのかはつねに不明なのです。

辞書なんか当てになりません。議論の最中に辞書を取りだしたら、相手に笑われます。笑われたら、もう負けたようなものです。

なんでこうなっているのでしょうか。

音と文字は物

音と文字からなる言葉において、意味が刺身のつま、つまり二の次であるからに他なりません。

では、なんでこうなっているのでしょうか。

意味が刺身のつま状態になっているのは、意味が見えないし、聞こえないし、手で触れることができないものだからとしか考えられません。

*

音は聞こえます。空気の振動として皮膚で感じる（触れる）こともできます。鼓膜を震わせているから聞こえるのですから。

音は物であると考えられます。

文字は見えます。紙上のインクの染みや（かつての活版印刷された文字は指の先で触れました）、液晶上の画素の集まりみたいなのです（いまは文字は手と指で書くというよりも指で触りながら入力するものです）。

文字も物と見なしてよさそうです。

意味は見えないし聞こえない

言葉をなりたたせている音は物だから聞こえるし手で触れることができ、文字は物だから見えるし手で触れることができる。このように短絡して考えてみます。

意味はどうでしょう。

意味は見えません。辞書に載っているのは語義であり文字です。見ているのは文字であって、意味ではありません。というか、意味を見たことがありますか。

意味は聞こえません。手で触れることもできません。

だから、意味は刺身のつま状態にされているのにちがいません。

冷遇し礼遇する

人は見えないものや聞こえないものや手で触れられないものを冷遇します。苦手だからです。知覚できないもの、知覚しにくいものに対して「んもー、知らない！」と業を煮やしているのです。

冷遇する一方で礼遇もします。見えないし聞こえないけど、言葉は意味なしで成立しないし、だいいちつかえないからに他なりません。

しぶしぶ「お意味さま」を礼遇し、「お意味さま」の確認をするわけですが、その作業の結果であり集大成が、たとえば法典、つまり六法全書や判例集のたぐいであり、契約書や念書や条約なのでしょう。辞書や経典や聖典や法則や公式もそうです。

とはいえ、これらは全部が文字です。目に見えます。音読すれば聞こえます。要するに、意味は見えないし聞こえないという現実は変わっていないのです。

見えない、聞こえない、手で触れることができないものを固定することができますか？
文字という形で記して固定（複製・拡散・保存）したところで、それは意味を固定したことにはなりません。

言葉に言葉を重ねただけです。文字に文字を重ねただけです。

というわけで、人は

まず○△Xという言葉をつくり、次に「○△Xとは何か？」とえんえんと思い悩む生き物である。

という状態から逃れることはできないもようです。人にとってはこの状態が常態なのです。言葉に「内容はないよう」という鉄則はかなりしぶといようです。

言葉に言葉を重ねるのは「ない」に対する根本的な解決策ではない

なんでこうなっているのでしょうか。

辞書や法典や経典や聖典や法則や公式をつくったり、議論や約束や契約や知識の更新をしても、言葉に言葉を重ねる（具体的には文字に文字を重ねる）、つまりある言葉やフレーズを言い換えたり置き換えたり変奏しているだけであって（いまやったのがそうです）、言葉に「内容はないよう」の根本的な解決策となっていないからでしょう。

ない袖は振れぬ、ですね。

「ない」に「ない」をどんなに掛けても賭けても欠けても架けても懸けても書けても、「ない」は「ある」にはなら「ない」ようです。いまやってみたいにです。

もしそうであるのなら、みんなで考えてみませんか。難しい問題だからと、機械に委託するのではなく。

意味の意味について考える意味

見えない、聞こえない、手で触れない意味を相手にするのはややこしいし難しいようです。

以下は、参考までに。

意味論 (いみろん) とは? 意味や使い方 - コトバンク

最新 心理学事典 - 意味論の用語解説 - 言語を科学的に研究するための言語学的な区分として、伝統的に単語以下の形態素など

kotobank.jp

意味論 - Wikipedia

ja.wikipedia.org

河出文庫 意味の論理学 〈上〉

ルイス・キャロルからストア派へ、パラドックスの考察にはじまり、意味と無意味、表面と深層、アイオンとクロノス、そして「出来

www.kinokuniya.co.jp

哲学の原点を転覆する試み ジル・ドゥルーズ「意味の論理学」 | 好書好日

大澤真幸が読むドゥルーズは20世紀フランスの哲学者。「ポスト構造主義」の代表者だ。本書は34の「章 (セリー)」から成り、

book.asahi.com

角川文庫 不思議の国のアリス

ある昼下がり、アリスが土手で遊んでいるとチョッキを着た白ウサギが時計を取り出しながら、急ぎ足に通り過ぎ、生き垣の下の穴にび

www.kinokuniya.co.jp

詳注アリス 完全決定版

キャロルの手紙や日記、歴史資料や学問的解釈etc...を駆使して付けられた、300以上の注釈を収録。これまで世界中の画家が描い

www.kinokuniya.co.jp

アリス狩り (新版)

夢と現実、非論理と論理、狂気と正気が交錯するノンセンスの王国一。そのノンセンスの宇宙を彷徨う美少女アリスの受難を、投影され

www.kinokuniya.co.jp

「ない」が「ある」ように見える

話を戻します。

「ない」に「ない」をどんなに掛けても賭けても欠けても架けても懸けても書けても、「ない」は「ある」にはなら「ない」ようです。いまやってみたいにです。

*

「ない」は「ある」にはなら「ない」ようですが、「ある」ようには見えます。

面（具象・そのもの・そこにあるもの）に立体（抽象・その向こうにあるもの・そこにはないもの）を見てしまうのです。これは「ない」を「ある」ように見ていることに他なりません。

人がのっぺらぼうな面——意味が不在である面（無意味な面ではなく）——に、顔や模様や奥行きや深さや遠近や背後を見てしまうのは、心が壊れないためなのです。

意味は「そこにある」のではなく、「人がそこにつくる」というのが適切な言い方だと私は思います。「意味がある」という言い方は無意味＝ナンセンスだという意味です。

意味は「ない」から「つくる」

要するに、意味はないのです。無意味という意味ではありません。無意味には意味があります。どの辞書にも無意味の意味が語義として書いてあります。

「意味は不在なのだ」と苦しまぎれにレトリックを弄するしかなさそうです。

「意味はない」を、「意味はその時々の人都合でつくるものだ」と言い換えることができる気もします。

つくる、こしらえる、でっちあげる、捏造する——どう言っても大差はありません。

＊

例を挙げます。

この国に数々ある、そしてこれまでに数々あった政党名を思いうかべてみてください。

名（音と文字）は体（内容・意味）を表わしているでしょうか。口あたりのいい、また見映えのいい美辞麗句にだまされてはならない、という生きた証拠であり教訓が政党名ではないでしょうか。

私なんか「えっ、どこが？」と思う名称ばかりです。与野党、大小、新旧、問わずです。

＊

他の例を挙げます。

「真摯に」が「テキトーに」であったり、「スピード感をもって」が「のろのろと」であったりするのは、みなさんをご承知のとおりです。「分かった」が「分からない」、「承知しました」が「知るもんか」だなんて、当たり前ですね。

ある場面では、「だめよ、だめよ」が「いいわ、いいわ」、「ぜったいにいや」が「もっともっと」だったりもします。政治の世界がそうです。ビジネスの世界もそうでしょう。

＊

民主主義、謙虚に、真摯に、丁寧な、誠実に、良心に恥じない……

〇〇を最優先する、守る、尊重する、みなさまの〇〇……

正義、公明正大、平等、倫理的、道徳的、中立……

絶賛された、評価の高い、今世紀最大の、誰もが泣いた、感動的、世界で最も.....

論理的、普遍的、客観的、真理.....

〇〇らしい、〇〇らしく、〇〇であるなら、本来あるべき〇〇の姿.....

美しい、本当の、本物の、真の、本来の、理想的な、正しい.....

以上のような言葉が聞こえたり目についたりしますが、その意味はつねに不明なので
す。意味が不明ということは、どんな意味にもなりうるという意味です。

時と場合によってころころ変わります。さきほど述べたように、「だめよ、だめよ」が
「いいわ、いいわ」にもなります。「平和的な解決」が「武力による侵攻」であっても不思議
はありません。

言葉は伝わっても、意味は伝わらない

言葉は聞こえるし見えますが、意味は見えないし聞こえないからこうなるのです。伝
わりもしないでしょう。

言葉は伝わっても、こちらの意味とあちらの意味が、何かのかたちで必ずずれるとい
う意味です。

たとえば、日常生活、学校、仕事、病院、交友、遊びなどで、言葉をつかっていて意味
が伝わったという感触をどれだけ得ているのでしょうか。時と場合によるし、程度問題で
しょうが、ちゃんと伝わっていますか？

その意味で、「言葉は伝わる」とか「言葉は意思伝達的手段である」というのは、「意
味が（なかなか）伝わらない」という深刻な現状を無視した脳天気な美辞麗句であると
か、片手落ちの不正確な言い方であると言えそうです。

そうした言い回しがまかり通っているのですから、つまりきわめて大きな存在であるはずの意味が考慮されていないのですから、意味がないがしろにされているとか、意味が刺身のつまにされている証左とも言えます。

誇張ではありません。意味が伝わっていないことで、戦争が起きたり、そこまで行かない争いや、事故や事件や犯罪や問題が起きたりしているじゃありませんか。新聞を読んでもください。ニュースを見てください。

もし私が意味だったら、腹を立てますよ、きっと。人は意味にリベンジされているのではないかと妄想しそうになります。

「私のことをちゃんと見てくれなきゃ、いや！」という感じ。

ちゃんと見てやりたいのですが、意味さんは見えないのですよね。たしかに、ややこしい.....。

もっと気に掛けてやりましょうよ。「面倒くさいやつだ」と避けしないで。

言葉の意味というまぼろし、言葉の実体というまぼろし

話を少しずらします。

「言葉の意味」というまぼろし——意味は見えないし聞こえないし「ない」のですからまぼろしに他なりません——をちょっとずらして、「言葉の実体」というまぼろしについて考えてみます。

言葉（音と文字）と実体（まぼろし）とは関係がない。

そう言えそうです。

＊

さらに話を少しずらします。

まず前提を確認します。

人はまず○△Xという言葉——声・音と顔・字面のことで——をつくり、次に「○△Xとは何か？」——その意味（内容）を問うのです——とえんえんと思ひ悩む生き物である。これが前提です。

そもそも言葉に実体があるとは夢にも思っていない私ですが、実体をその言葉が指し示す事物くらいの意味で考えてみましょう。

名付ける、名指す、AをBと呼ぶ——こうした人間の習慣と実体とは関係がない。そもそも実体という言葉に実体がないから。

そう言えそうです。

話を戻します。

意味はまちまち

繰り返します。

意味は「ある」のではなく、「つくる」ものなのです。意味は「ない」から「つくる」という意味です。

誰が意味を「つくる」のかと言えば、個人であったり、特定の集団が「つくる」と考えられます。

しかも、それぞれが自分の勝手にまちまちにつくっているようです。

意味の意味はまちまちだという意味です。コンセンサスがないのです。辞書の語義は建前です。

辞書の語義どおりに話したり書いたりするほど、人は機械——機械はぶれないし疲れないし誤っても謝りません（ぶれたり疲れたり謝るようにプログラムすれば別ですけど）

——ではありません。

刺身のつまの製造を外部に委託する

これからは、ぶれないし疲れないし誤っても謝らない機械や AI も意味を「つくる」にちがいありません。もうそうなっているのかもしれない。

人は考えることまで機械や AI に委託しはじめたようですから、機械や AI が意味をつくるのは妄想ではないでしょう。もうそうかもしれない。

作文はもちろんのこと、これからは思考と判断をはじめ、刺身のつま、つまり意味の製造も外部に委託することになりそうです。そうなれば、晴れて心置きなく思考停止と判断停止に邁進し、有意義に日を送ることができるでしょう。

妄想でしょうか。もうそうかも。

もし、もうそうであるのなら、みんなで考えてみませんか。機械に委託するのではなく。

#言葉 #音 #音声 #文字 #意味 #無意味 #刺身のつま #機械 #AI #委託

04/30 げん・絃（うつせみのたわごと-14）（全
14回）

＊

げん・絃（うつせみのたわごと -14-）（全14回）

星野廉

2023年4月30日 07:46

げん——。きになることば。からからきた、ことば。からから、つたわってきたこととの。つたわるには、すじがいる。いと、みち、つな、みぞ、くだ、つる、ぼう。べつに、ほそくのびたものでなくても、いい。なにかとなにかのあいだに、なにかがあれば、なにかがつたわる。

＊

つたわる。わたる。うつる。とどく。あう。であう。つながる。まじる。

＊

はなす。はなつ。はっする。おくる。しかける。とどける。あげる。あたえる。やる。うける。うけとる。むかえる。とめる。うけとめる。てにする。おうじる。もらう。こうむる。いただく。

＊

ま。あいだ。あわい。へだたり。ぼ。ところ。うち。めん。かん。かんかく。みち。みちのり。

＊

むき。ほう。ほうこう。ほうがく。かた。すじ。すじみち。みち。

＊

なみ。ながれ。つぶ。こな。かたまり。かせ。くうき。き。け。けはい。もの。ぶっしつ。ぶつ。こと。さま。ありよう。かた。かたち。すがた。ゆれ。ゆらぎ。うごき。はたらき。

＊

つながり。かかわり。かかわりあい。きずな。つな。あいだがら。むすびつき。ゆかり。つて。ひき。えん。えんこ。いんねん。かんけい。こね。てづる。すじ。ちすじ。ほだし。かせ。

＊

つる。ひっかける。とらえる。つかまえる。つかむ。もつ。てにする。てに入れる。よせる。ひきよせる。おさめる。もらう。にぎる。とる。うちとる。うぼう。みる。きく。かぐ。あじわう。はだでかんじる。かんじる。さっする。いなく。おぼえる。おもう。

＊

きになるのは、うごく、うごき。うごく、うごきにも、いろいろあるが、とりわけ、きになるのは、ゆらぐ、ゆらぎ。ゆらゆら、ぶらぶら、ぶるぶる、うろうろ、おろおろ、くねくね。

＊

うごく、うごきほど、まぼろし・幻界、ことわけ・言界、いまここ・現界、ふち・限界、もと・原界、ふえる・Gen界、みる・眼界、まかせる・弦界、へる・減界、つたわる・絃界と、かさなるもの・こと・さまはないきがする。というのは、むなしき、ことわりにすぎない。うごくという、な、すなわち、ことのは。うごきという、あきらめにみちたことのは。ことわりも、ことのはも、うごく・うごきをとらえることはできない。できないように、できている。そういう、つくり。そういう、しくみ。しくみという、ことのはも、むなし。

＊

げん・絃——。きになることば。からからきた、ことのは。ひとには、うまれつき、ことばのすじがあたまのなかに、きざまれているらしい。そのすじをたどるかたちで、まわりで、はなされていることばを、まなび、みにつけていくのだという。どのようなことばであれ、あかんぼうやおさないこどもは、おとなとは、くらべものにならないはやさで、まねていく、まなんでいく。まなぶためには、まねるためのみちすじが、そなわっていなければならない。みちが、ひかれているはずだ。このようにして、ことばがつたわる。うけつがれる。という、はなし。ものがたり。たしかめたものはいない。

*

おおむかし、このしまじまに、からのくにぐにからきたひとたちが、うつりすみ、おおきくわけて、ふたつのことばをはなし、かいていたことがあったという。という、はなし。ことばとともに、さまざまなものづくりかたや、くにおさめかたなどが、つたわったことは、いうまでもない。という、ものがたり。ことばが、ことのはが、ひとをうごかす。ひとをゆさぶる。という、はなし。

*

ことばは、おりものに、よくたとえられる。ちなみに、絃は、いと。おりものとは、いとおること、または、いとおってつくったもの。てくすと、てきすと、これ、からことばで、おりもの、すなわち、ぬののようにおられた、ことのはのあつまりだという。てきすと、てくすととは、かきもの、もじをつづったものなり。そういえば、つづるとは、やぶれたころもをぬいあわせたり、つぎをあてたり、はなれたものをつなぐこと。つづれおりという、きれいないかたもある。

*

おりものと、かきものは、ことのはとして、つながりやすいもよう。えになる。みためもきれいだし、みてわかりやすい、たとえだ。おりものといえば、ぬの。ぬのといえは、ぼっちわーく——。めちゃくちゃな、こじつけ。やらせ。いかさま。で、でてきたのが、ぶりこらーじゅ。これ、からことばで、てしごとなり。あどりぶ、まにあわせのおかずづくり、ありあわせのりょうりにも、にている。めについたものを、かたっぱしから、くみあわせる。そして、それをもちいて、しごとをする。なにかの、はたらきをする。

*

たりないなら、あるもので、すます。いま、ここにあるものを、もちいる。言界では、ことのはのあつみと、おもみを、おもんじる。ひとつのことのはに、いくつかのことのはを、つめこむ。ひとつのことのはに、いくつものことわりを、になわせる。いわゆる、しょうえね。つかうことのはを、できるだけへらす、えこ。いつまのか、減界のはなしにうつってしまった。えこ。えごと、かみひとえ。このほしに、やさしいとまではいえないうつってしまった。えこ。えごと、かみひとえ。このほしに、やさしいとまではいえないが、いわゆる、ひとつの、えころじー。がけっぶちにある、このほし。いつのまにか、限界のはなしになってしまった——。めちゃくちゃな、こじつけ。やらせ。やおちょう。

*

ふえすぎた、ひと。もちすぎた、ひと。ひとは、Gen界にいながらにして、ぶらぶら、ゆらゆらと弦界にある、てんからのつるにつるしあげられて、みをまかせるしかない。そのゆらぐおのれのすがたを、からだでとらえ、まなこをあけて、めまいをおぼえつつ眼界をさまよう。ふと、それがおのれのふるさと、ははのはらのなかだときづく。原界にいるのだときづく。もどったのではない。かえったのではない。いまここが、もとなのだと、さとる——。めちゃくちゃな、こじつけ。やらせ。できれーす。

*

めちゃくちゃなこじつけ。なんでもかんでも、くっつければいいというものではない。この、あほめ。たわけめ。めちゃくちゃ、こじつけたうえに、へらずぐちばかりを、たたきよって。

*

ごめんなさい。かえすことばもありません。いや、ことのはしか、かえすものはありません。

*

はなしを、ゆらぎにもどそう。うえのことばたちがえんじてくれた、めちゃくちゃなこじつけに、はなしをもどそう。つなぐ、めちゃくちゃに、こじつけて、なんでもかんでも、ことわりもどきのべてんで、つなげる。それが、ゆらぎだと、このあほはおもう。とちくるっているのだから、いたしかたない。

＊

ゆらぎと、つたわりを、めぐるはなしを、はなしをつづることのはたちに、えんじてもらう。これ、このたわごとの、たくらみなり。つづるうえでの、すべなり。ひとりずもう。はなしのなかみは、どうでもいい。はなしをつづってくれる、ことのはの、うごき、ゆらぎ、みぶり、めくばせ、かおつきに、めをこらしてほしい。たわごとに、ふさわしい、たわけた、くわだて。はなしをかえよう。

＊

くものすを、おもいえがこう。くもは、いとをはき、めぐらし、あみをつくり、すとする。すとといっても、えものをとらえる、わななり。わな。なわぼりなり。そのはりめぐらされた、なわ、すなわち、わなに、ひっかかったものは、にげようとして、もがく。ねっと。なっとう。ねっとりとした、いとが、もがくたびに、からだにからみつく。もがくほど、からだがゆれる。ゆれが、あみのいとに、つたわる。ぶるぶる。それが、ゆれ。ゆらゆら。ぶるぶる。

＊

くものすは、あみ。くもは、あみのゆらぎを、からだでうけとめる。そうやって、えものをあやめる、おりをうかがっている。うえぶ。web。このほしにはりめぐらされた、あみ。ひとが、つくったあみ。あなたとわたしをむすぶ、あみ。あなたと、このほしにすむ、とおくはなれた、おびたしいひとたちとをつなぐ、あみ。

＊

いんたーねっと。いんたーは、からことばで、あわいとか、きわをさす。ねっとは、あみ。あわいあみ。めにはみえないが、ひととひと、ことのはとことのは、きかいときかきを、つなぐ、あみ。でんわも、あみ。むせんも、あみ。けーぶるも、あみ。じんこうえいせいをかいした、あみ。おざき、あみ。すずき、あみ。ぜ、あみ。まい、あみ。もとのもく、あみ。じびき、あみ。なんでもかんでも、ごっそり、すくいとる、あみ。

＊

ところで、あみは、こわい。ほんまやでー。ひっかける、しくみ、しかけ。ありとあら

ゆる、でんばや、ゆうせんのしんごうを、ひっかけると、うわさされる、えしゅろん。それは、さておき、みなさん、おなじみの、けんさくえんじん。けんさくとけんえつは、きわめてちかい。このしまじまの、にしどなるの、おおきなくにのありさまを、みなはれ。ひとごとや、あらへん。あら、へんだと、おもったときには、もうおそし。びっぐ・ぶらざー。ふあしずむ。ふあっと、でてきても、なかなか、しずむことなし。こわいでー。

＊

あみをはる、さがす、おう、みつける、ひっかける、つぶす、とらえる、けす、ばっする、ときには、あやめる。かの、0と1のしくみもちいる。たった、ふたつのしるしなのに、はんぱじゃなく、きわめて、すばやく、はたらかせる。そうすれば、おびたしいかずとりょうのでーたを、さばくことができる。さはら、さばく。とてつもなく、でっかい、どくぐも。ぐぐる、やふる、えしゅる。にている。げきに。にすぎ。みなさん、せいぜい、きいつけなはれ。まじこわ、でっせー。のぞかれて、まっせー。みられてまっせー。きかれて、まっせー。よまれて、まっせー。このまま、すすめば、よも、まっせ、すなわち、すえ。

＊

つなぐ。むすぶ。あみ。ゆらぎ。絃界—幻界—言界—現界—限界—原界—Gen 界—眼界—弦界—滅界。

＊

10の「げん」の見取り図を、ふたたび、だしてみよう。

＊

「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを)近くする・知覚する」

= 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」

= 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」

01/00 (17) 編 (ラシ) のあはれとて 11 (全 11 頁)

= 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かける・翳る」

= 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」

= 「げん・Gen (※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」

= 「げん・眼・がん・まなこ・め・見 (げん・けん)・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」

= 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす・まいりました」

= 「げん・減・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうちがう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・〇・まあるくおさめまっせー・輪・和・わ」

= 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でっけー・うへーっ・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」

*

ひろがる、あみ。あちこちに、はりめぐらされている、さまざまなあみたち。のびた、いと。とおいむかしから、ずっとつづいている、あるいは、ついこのあいだ、あるいは、たったいま、のびたばかりの、いと。あみがほどけば、いととなる。いとがからまれば、あみとなる。いずれにせよ、いとも、あみも、ゆらぎを、つたえる。ばいたい。場・維・帯。

*

あわい。あいだ。ば。つたわる。ゆれ。ゆらぎ。つながる。つながらない。はる。めぐる。きれる。とだける。からまる。まざる。

*

つりを、おもいうかべてみよう。かわのながれ、うみのなみま、いけのさざなみ。いとをたらす。いとをなげる。あみをなげる。あみをはる。わな。ねらう。いきをこらす。まつ。

*

いとでんわを、おもいうかべてみよう。むこうと、こっち。はなす。こえがつつのそこに、はられたかみをゆらす。いとが、かすかにゆれる。みえないほど、かすかに。つたわる。つながる。つながったときの、よろこび。ときめき。

*

しかけ。しくみ。わな。はまる。ひっかかる。おちいる。つられる。

*

しかける。しくむ。とどける。おくる。つたえる。わたす。かわす。

*

しかける。しくみ。ほしい。ねがう。いのる。たくす。まかせる。とどく。とどかない。かなう。かなわない。じゃまされる。

＊

しかけ。しくむ。ねらう。たくらむ。であう。あう。とらえる。とらえられる。のがす。にげられる。じゃまされる。まける。かつ。つながる。まじわる。

＊

しかける。しくむ。はる。あむ。おる。まげる。つぐ。つくる。うつる。かわる。あう。ゆらぐ。

＊

ありとあらゆる、いきものが、しかける。しくむ。ゆらぐ。ゆらぎをとらえる。いきるため。くうため。ひとも、おなじ。だが、おそらく、ひとだけが、ことわる。事割る。言割る。ことわりもなく、ことわる。おごる。

＊

ゆらぐ。いきもの。いきをすう。いきをはく。なく。みぶるい。みをふるわすのは、おもに、みをまもるときの、さま。ぴくぴく。びくびく。ぶるぶる。おののく。いつも、まわりに、めをそそぐ。あやうきを、なかまに、つたえることもある。それだけではない。ぴくぴく。つがる。たねをつける。たねをうける。ぴくぴく。うむ。うまれる。ぴくぴく。くるしむ。なくなる。

＊

ゆらぐ。ひと。みぶるい。みをふるわすのは、みをまもるさまだけに、あらず。よろこぶ。いかる。かなしむ。たのしむ。おののく。はなす。かたる。かく。しるす。つづる。となえる。うたう。いのる。つたえる。わらう。たかぶる。おごる。えらそうに、みをふるわす。うきうき。

＊

ある。いる。それだけではない。いきものは、ゆらぐ。ことわりは、これくらいにしよ

う。わけても、わからなくなるだけ。いや、ひとであるかぎり、わけるしかない。おもいのなかで、ゆらぐ。それしかない。

＊

ゆれ。これも、なにかの、かわり。なにかの、しるし。なにかそのものにあらず。ゆれる。ぶれる。つたわる。つたわらず。つたわりそこなう。ゆれそのもの？ ことわけ、たわけ、たわごとなり。

＊

ともかく、ゆれよう。めがまうまで。

◆

以下は、10の「げん」の見取り図です。

- 1) 「げん・幻・幻想・まぼろし・魔を滅ぼす・間を滅ぼす・(隔たったものを) 近くする・知覚する」(うつせみのたわごと-5-)
- = 2) 「げん・言・言語・ことば・言葉・言の葉・事の端」(うつせみのたわごと-6-)
- = 3) 「げん・現・現実・うつつ・打つを打つ・うつをうつ・うつ(全・空・虚)をうつ・うつうつ」(うつせみのたわごと-7-)
- = 4) 「げん・限・限界・限度・境目・ふち・へり・端っこ・かぎり・かぎる・限る・かげる・翳る」(うつせみのたわごと-8-)
- = 5) 「げん・原・源・元・みなもと・もと・本・基・原子・元素・根っこ・ルーツ・泉・湧く・わく・わくわく・出る・でるでる」(うつせみのたわごと-9-)
- = 6) 「げん・Gen(※ドイツ語)・遺伝子・gene・gen-・因子・ジン・仁・gene-・うまれる・生じる・うむ・産む・発生・子宮・卵・可能性・生殖・生命・いのち・あらわれる・でる・でちゃった・できる・できちゃった・わく・わくわく」(うつせみのたわごと-10-)
- = 7) 「げん・眼・がん・まなこ・め・見(げん・けん)・みる・みわける・わかる・わける・しる・おしっこ・しるす・しるし・知る・ち・じめん・地・なわばり・あらそう・血・あやめる・なくす・なくなる・無・むっ・m・n・ん」(うつせみのたわごと-11-)
- = 8) 「げん・弦・つる・ぶらさげる・ぶらさがる・ぶらぶら・ゆらゆら・宙づり・宙ぶらりん・おまかせ・どうにでもしてちょうだい・おてあげ・白旗・偶然性・さいころ・なげる・ばくち・ギャンブル・まける・まかす」(うつせみのたわごと-12-)
- = 9) 「げん・滅・へる・hell・経る・たりない・欠乏・お腹がすいた・こまった・満足できない・ほしい・欲求・もっともっと・食べてもまた腹がすく・へらす・引き算・ひく・無限小・マイナス・ネガティブ・負・陰・だめ・だめだめ・否定・否・非・被・ちがうち

がう・そうじゃない・ひっくりかえす・ひっくりかえる・ひっくりかえそう・反対・あべこべ・さかさま・かえす・かえる・もとにもどる・堂々巡り・おなじこと・減即増・増即減・減=増・無限小=無限大・一定・差し引きゼロ・ゼロサム・ゼロ・zero・零・0・○・輪・和・わ」(うつせみのたわごと-13)

= 10) 「げん・絃・糸・張る・渡す・つたえる・つたわる・つながる・つなげる・ひびく・ひびき・ぴーん・おと・ふるえる・震動・ぶるぶる・ゆらぐ・なみ・波動・ひかり・つぶ・ゆれる・上下・左右・うごく・動力・ちから・熱・エネルギー・エントロピー・増大・でかい・確率大・無秩序・でたらめ・でまかせ」(うつせみのたわごと-14)



「うつせみのたわごと-14」(全14回)

できるだけ大和言葉系の語をもちいて、平仮名づくしで書こうという試みをしています。

ふだん書いているさいの枠をずらして書いたり、言葉をつくりながら書くわけですが、当たり前だと思っている事や物や様を、それまでとは異なった視点からとらえる試みとも言えます。とらえなおす、見なおす、考えなおす、感じなおす、という感じです。

- 1) ある漢語系の言葉に相当する大和言葉系の語を、辞書などで探しだして使用する。
- 2) 大和言葉系の語を組み合わせて説明的に書く。
- 3) 大和言葉系の語を用いて比喻をつかい、ほのめかす。

以上の3つの方法を試しています。

＊

＊「うつせみのたわごと -14」

今回のテーマは、「糸・伝わる・伝える・げん・絃」という言葉とイメージをもとに世界をとらえる絃界です。

「伝わる・伝える」という動き、「伝わる・伝える」を仲介する媒体、「伝わる・伝える」の対象をめぐる、さまざまな言葉たちを次々と「ずらす」ことにより、その言葉たちの表情・身ぶり・目くばせを読者に体感してもらおうとしています。

糸とその縦横の運動から成る織物と、紙と記された言葉たちの縦横の運動から成るテキスト＝テキストのつながりにも触れています。さらには、網とクモの巣、ひいてはインターネットへと話をつなげていきます。網における「引っ掛ける・仕掛ける」という動作の重要性を訴えています。検閲・検索の基本的仕組みだからです。

また、「伝わる・伝える」の究極的な対象となる「揺れ・揺らぎ」について考察していますが、尻切れトンボに終わっています。再度、考えてみたいテーマです。不可解なテーマです。

標準的な表記に直したキーワードは、「目まい」です。

直接書けなかったキーワードは、「宮川淳」『引用の織物』『紙片と眼差のあいだに』『豊崎光一』『余白と余白または幹のない接木』『ロラン・バルト』『テキストの快樂』『Stephen Heath』『Vertige du déplacement』『ジル・ドゥルーズ』『プルーストとシーニュ』です。



このシリーズは、タイトルを模倣し、まさに、たわごとで終わりました。幻界、言界、現界、限界、原界、Gen界、眼界、弦界、減界、絃界。なお、各記事の中で、断っているように、10の「げん」をめぐる各界は、別個のものではなく、パラレルな関係にあり、同調し、共振しているとイメージしています。

各界も、各界についてのイメージも、戯言であることは言うまでもありません。読者に、目まいまでは行かなくとも、笑いという揺らぎを促すことができたなら、そんな嬉しいことはありません。

※この記事は、かつてのブログ記事「10.02.15 うつせみのたわごと-14-」に加筆したものです。

うつせみのあなたに 第11巻 | パプー | 電子書籍作成・販売プラットフォーム
哲学がしたい、哲学を庶民の手に——。そんな気持ちを、うつに苦しむ一人の素人がいただき、いわば憂さ晴らしのためにブログを始めた

puboo.jp

日本語 # 言葉 # 大和言葉 # 和語 # 漢語 # 自分語 # 引用 # 宮川淳 # 豊崎光一 # 文字
信号 # 記号

うつせみのあなたに 2023年4月

著 星野廉

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
